George Eliot 作品における大英帝国の影

帝国主義への懐疑から文化的混淆への転換

福岡女子大学大学院
文学研究科英文学専攻
学位論文（博士）

濱　奈々恵
2015

謝辞

George Eliot との出会いは、卒業論文作成の頃にさかのぼります。当時、私の指導教官であった吉田徹夫先生（福岡女子大学名誉教授）から、「とても難しい作品があるが、やってみないか」と紹介していただいた本が *The Mill on the Floss*（1860）でした。「先生が私に難しい本を薦めてくださった」という気持ちに酔いしれながら、訳本を片手に最後まで読み切った感動は今でも覚えています。

古典に分類される作品を研究するにあたって、現代的な視点が欠如していた私を救ってくださったのは、宮川美佐子先生（福岡女子大学）でした。*The Spanish Gypsy*（1868）についての論文を書いてみようかと考えていた時、異民族に対するイギリス人の侮蔑的な態度を批判する George Eliot は、“we English” から自分を切り離しているのか、それとも彼女自身、やはり“we English”の一人なのかという疑問がわきました。その時に先生がおっしゃった「それこそ、私たち日本人が英文学を研究する意義なのよ」という言葉が、この研究の原点です。

福岡女子大学の博士後期課程に在学中、イギリスの Leicester 大学大学院に留学し、そこで Joanne Shattock 先生、Gail Marshall 先生にも教えを請い、日本人である私が英文学を研究する意味を模索し続けました。帰国してからも同じテーマで研究を行い、さまざまな場所で学会発表を行い、論文にして残すことに力を注ぎました。発表内容も論文内容も未熟な点が多く、何か行動を起こすたびに反省する毎日でしたが、学会発表で出会った先生方、投稿論文でコメントをくださった先生方、同年代の研究仲間、そして日々、私を励ましてくれた福岡女子大学の先生方のおかげで、今の私があります。西南学院大学言語教育センターに所属する、教育と研究に熱心な同僚たちの姿も私の心の支えでした。

お忙しい中、丹念に論文に目を通してくださった吉田徹夫先生、宮川美佐子先生、向井毅先生、本当にありがとうございました。口頭試問でのやり取りや、全頁にコメントが書かれ、ボロボロになって戻ってきた審査用の論文ファイルは、私の人生における宝物になりました。

最後に。いつも私のそばにいてくれた母と、知識欲旺盛でいつも何かを勉強するのが好きだった亡き父に…ありがとう。卒業論文提出から 12 年がかりで、やっとゴールにたどりつきましたよ。

目次

序章・・・1

第一章：子どもたちの帝国意識

—*The Mill on the Floss* における本の影響力・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

第二章：植民地をめぐる共犯関係

—"Brother Jacob"における愚かな住民像・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

第三章：まやかしの記号

—*Felix Holt, the Radical* におけるヘゲモニーの崩壊・・・・・・・・・・・・39

第四章：光を失った帝国のディスコースと皮肉なギャンブル

—*Daniel Deronda* の Gwendolen を中心にして・・・・・・・・・・・・・・・・50

第五章：選挙の裏で

—*Middlemarch* におけるコスモポリタンの素養・・・・・・・・・・・・・・・・・・62

第六章：排他的な帝国主義から他民族共生へ

—*Daniel Deronda* と *The Spanish Gypsy* における文化的混淆・・・・70

終章・・84

参考文献一覧・・・88

初出一覧

序章

第一章

（1）「流れと戦う少女 Maggie－*The Mill on the Floss*（1860）における洪水と死について」（*Kasumigaoka Review* 17 号、福岡女子大学英文学会（2011）：73-89）、（2）「子どもたちの帝国意識―*The Mill on the Floss* における本の影響力―」（『ジョージ・エリオット研究』17 号、日本ジョージ・エリオット協会（2015）：15-27）

第二章

「蔓延する帝国意識と覆される植民地幻想：George Eliot の短編“Brother Jacob”を中心にして」（『テクスト研究』9 号、テクスト研究学会（2013）：21-34）

第三章

「*Felix Holt, the Radical* における帝国意識への懐疑的な視線」（『ジョージ・エリオット研究』13 号、日本ジョージ・エリオット協会（2011）：15-27）

第四章

「光を失った帝国のディスコースと皮肉なギャンブル―*Daniel Deronda* の Gwendolen を中心にして―」（『ジョージ・エリオット研究』15 号、日本ジョージ・エリオット協会（2013）：19-33）

第五章

書きおろし

第六章

「*Daniel Deronda* におけるユダヤ人との共生―結末における旅立ちについて―」（『英文学研究支部統合号』5 号、日本英文学会（2013）：31-37）

「異民族共存への期待と西欧的イデオロギー：George Eliot の劇詩 *The Spanish Gypsy*（1868）」（*Kasumigaoka Review* 15 号、福岡女子大学英文学会（2009）：69-87）

終章

書きおろし

序章

かつて George Eliot（1819.11.22-1880.12.22）の伝記研究者が述べた通り、彼女にはいくつもの顔と名前があった。[1] イングランド中部のウォリクシャーで生まれた子どもは Mary Anne Evans と名づけられ、福音主義の学校で学んだり、バプティスト派の牧師に教育を受けたりと、比較的、充実した教育環境のもとで育つ。聡明な少女は独学でラテン語、ギリシャ語、イタリア語、ドイツ語、フランス語など複数の外国語を習得し、24 歳の頃に、友人 Elizabeth Rebecca Brabant（1811-98）に代わって、ドイツ人神学者 Strauss（1808-74）の *The Life of Jesus* の英訳に着手する。二年あまりの労苦の末に Strauss の英訳を完成させ、1854 年には Feuerbach（1804-72）の *The Essence of Christianity* の英訳を刊行している。本名を著書に記したのはこの英訳が最初で最後であり、これ以降、Mary Anne は名を Marian に変えて、*The Westminster Review* に論評を寄せる仕事にも携わっている。同誌の副編集長として活躍していた頃に Herbert Spencer（1820-1903）と親交を結び、彼から George Henry Lewes（1817-78）を紹介される。新進気鋭の哲学者、批評家であった Lewes との出会いは Marian に人生の転機をもたらし、二人は 1854 年の夏頃から夫婦として、生活を共にするようになる。

だが Marian が Lewes と出会った当時、彼には妻 Agnes Jervis Lewes（1822-1902）と三人の息子（Charles Lee Lewes（1842-91）、Thornton Arnott Lewes（1844-69）、Herbert Arthur Lewes（1846-75））がいた。妻帯者である Lewes との内縁関係によって、Marian は兄 Issac Evans（1816-90）の怒りを買う。彼女は兄に Lewes との関係を明かす手紙を送っているが（1857.5.26 付）、[2] 兄の理解は得られずに絶縁状態が続く。同様に Marian は最愛の姉 Christiana

---

[1] Bodenheimer, Rosemarie. “A woman of many names.” *Cambridge Companion to George Eliot*. Ed. George Levine. 20-37.を参照した。

[2] *Letters* III: 331-32. 以降、本論文で手紙を引用する際には、*The Letters of George Eliot*. Ed. Gordon S. Haight. 9 vols. New Haven: Yale UP, 1954.によるものとし、本文中の括弧内に *Letters* と巻数、および頁数を入れる。

(1814-59)との間にもわだかまりを抱え、結局、再会を果たせないままで1859年3月15日に姉を亡くしている(Haight 277-78)。[3] これらの状況を考えると、MarianはLewesとの生活が原因であまりにも失うものが大きかったと言わざるを得ない。しかし同時に、MarianはLewesの恋人、内妻、そして三人の息子の母という新たな顔を得ることにもなった。[4]

Marian が Lewes との生活で得たものは、これだけではない。ギリシャ悲劇、William Shakespeare(1564-1616)、John Milton(1608-74)、Walter Scott(1771-1832)の歴史小説などを好んで読んでいた Marian は Lewes とドイツを旅行中に、急に沸き上がった小説の構想を彼に話して聞かせる。その才能に気づいた彼の励ましで、38歳になっていた彼女は George Eliot という名で作家デビューを果たす。彼女は後に、処女作 *The Scenes of Clerical Life*(1858)を出版したときのことを回想し、「誰一人として、私が女性であるなんて想像もしなかった」[5]と記している。男性作家としての仮面をつけながら、彼女は女性特有の細やかな描写、特に登場人物の内面描写で高い評価を受け、その後も *Adam Bede*

---

[3] 病床にあった Christiana は Marian に会いたがっていたようで、そのことは姉の娘 Emily の証言が残っている。Marian も同様に再会を望んでいたものの、手紙には彼女の複雑な感情が含まれている。例えば、Sara Sophia Hennell(1812-99)に宛てた同年 2 月 26 日付の手紙で、Marian は姉から手紙が来たことを述べ、続けて、"I wrote immediately, and I desire to avoid any word of reference to anything with which she associates the idea of alienation. The past is abolished from my mind－I only want her to feel that I love her and care for her."(*Letters* III: 26)と記している。またその 2 日後には Charles Bray(1811-84)に宛てて、"I am afraid the necessity of hurrying back and making two broken railway journeys of it, will forbid me that pleasant renewal of the past."(*Letters* III: 27)と記している。病床の姉を前にしても、Marian には姉との間にしこりを残していたことが察せられる。

[4] 妻 Agnes は Lewes の友人であった Thornton Leigh Hunt(1810-73)との間に四子(Edmund Alfred(1850 年誕生)、Rose Agnes(1851 年誕生)、Ethel Isabella(1853 年誕生)、Mildred Jane(1857 年誕生))(*Letters* I: lxix-lxx)をもうけており、Lewes 夫妻の結婚生活は破たんしていた。Marian が三人の息子たちと顔を合わせたのは1860年頃とされ、子どもたちはAgnesをMother、MarianをMutterと呼んで、双方と親子関係を持ち続けたようだ。この点については、Rignall, John. "Lewes family." *Oxford Reader's Companion to George Eliot*. 220-22.を参照した。

[5] George Eliot は"How I Came to Write Fiction"の中で、"There was clearly no suspicion that I was a woman writer."(*Selected Critical Writings* 322)と述べている。しかし、Charles Dickens(1812-70)だけは George Eliot が女性作家だと見抜いており、1858 年 1 月 18 日付の手紙で本人にもその旨を伝えている(*Letters* II: 423-24)。二人は 1859 年 11 月 10 日に、George Henry Lewes も交えた食事会で初対面を果たしている(*Journals* 81)。なお、本論文で日記を引用する際には、*Journals of George Eliot*. Ed. Margaret Harris and Judith Johnston. Cambridge: Cambridge UP, 1998.によるものとし、本文中の括弧内に *Journal* と頁数を入れる。

(1859)や *The Mill on the Floss*(1860)で次々と読者を獲得していくのであった。

F. R. Leavis は *The Great Tradition*(1948)において、George Eliot の主要な作品を二期に分け、*Scenes of Clerical Life*、*Adam Bede*、*The Mill on the Floss*、*Silas Marner*(1861)を幼少期の記憶がもとになった前期作品、一方、*Romola*(1863)、*Felix Holt, the Radical*(1866)、*Middlemarch*(1871-72)、*Daniel Deronda*(1876)を調査にもとづく後期作品として分類している。[6] 近年では、George Eliot の日記編纂者の一人である Margaret Harris が、1860 年の Lewes とのイタリア旅行を大きな転換点として捉え、これを機に George Eliot が記憶に頼る作風から脱却していく様子を読み取っている。[7] 両者とも、*Romola* の執筆を一つの節目としている点、および執筆年代を基準にして作品の特徴を捉えている点で一致している。

ところが、George Eliot の全作品を設定時期に沿って並べ替えてみると、別の特徴が見えてくる。それは 1820 年代から 1830 年代を舞台にした作品が多いことである。この年代を舞台とする作品は全部で六作品あるが、それらはさらに三つのカテゴリーに分けられる。一つめは George Eliot が得意とした「田舎生活を描いたもの」で、*Scenes of Clerical Life* の中の“The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton”と“Janet’s Repentance”、および *The Mill on the Floss* の三作品が挙げられる。二つめは選挙法改正に基づく「社会的変化を描いたもの」で、*Felix Holt, the Radical* と *Middlemarch* の二作品がこれに該当する。そして三つめが「国外(特に植民地)への展望を描いたもの」で、“Brother Jacob”(1864)がこれに当てはまる。

三つめの分類に入れた“Brother Jacob”は、文学史どころか George Eliot の批評家の中でもあまり論じられてこなかった作品である。例えば William Harvey

---

[6] Leavis は George Eliot を“the novelist of reminiscence”と形容し、前期作品で多分に含まれる幼少期の記憶を好意的に捉えている。一方、後期作品のうち、*Middlemarch* だけは Virginia Woolf が送った賛辞(“one of the few English novels written for grown-up people”, 201)に共感したものの、それ以外の作品や著者 George Eliot については、“the product of an exhausting and misguided labour of excogitation and historical reconstruction”や“the distinguished intellectual rather than the great novelist”など、否定的な発言を続けている(Leavis 46-48)。

[7] Harris のこの指摘については、“What George Eliot Saw in Europe: The Evidence of her Journals.” *George Eliot and Europe*. Ed. John Rignall. 1-16.を参照した。

の作品論では、二百ページを超える研究書の中でわずかに、“that tedious tale, ‘Brother Jacob’”（Harvey 212）と言及されるにとどまり、U. C. Knoepflmacher の場合は、“rather cheerless and austere as a comedy”（Knoepflmacher 224）と評価が低い。多くの場合、“Brother Jacob”に関しては個人的な感想かジャンル紹介に落ち着き、深い議論に発展することが少なかった。この作品は、社会的な上昇志向が強い主人公が、本国（英国）での成功が見込めないことに不満を感じ、海外進出に乗り出す話である。嘘を重ねる青年を中心にした作品で、道徳性が主要テーマであることは言うまでもない。ところがその一方で、この青年の旅先やその時期にはあまり関心が払われてこなかった。実際、先に挙げた Harvey も Knoepflmacher も、彼の旅先が大英帝国の植民地ジャマイカであったことに触れていないのである。

考えてみると、George Eliot が作家として活躍していた当時、インド大反乱（Indian Mutiny, 1857-58）、ジャマイカ反乱（Morant Bay Rebellion, 1865）とそれに続く Edward John Eyre 総督（1815-1901、ジャマイカ総督は 1862-65）の裁判など、人々は大英帝国と植民地の関係から目を背けられない時期にいたはずである。植民地における英国人の振る舞いは道徳的に問題視され、特に Eyre 総督の裁判では John Stuart Mill（1806-73）、Charles Darwin（1809-82）、Herbert Spencer ら訴追派と、Thomas Carlyle（1795-1881）、Charles Dickens、Alfred Tennyson（1809-92）ら擁護派の間で意見が戦わされる事態に陥っている。ところが、思想界、文学界を巻き込む論争が身近で起こっていたのにもかかわらず、George Eliot は手紙や日記などの私的な文献においてでさえ、個人的な意見を述べていない。そのため、帝国主義に対する彼女の態度は探りにくくなっており、場合によっては黙認と見なされる可能性もある。

しかし、George Eliot は間接的、かつ私的レベルではあるものの、帝国主義とかかわりがあった。例えば、George Eliot が残した日記には彼女が東インド会社株を購入した記録があるし（*Journal* 87）、[8] George Eliot と帝国主義について研究する Nancy Henry は *George Eliot and the British Empire* の中で、彼女がケープタウンの鉄道株を購入した事実を突き止めている（Henry 2002: 75）。さら

[8] 1860 年 11 月 28 日の日記に、“I have invested £2000 in East Indies Stock, and expect shortly to invest another £2000, so that with my other money, we have enough in any case to keep us from beggary.”とある。

に言えば、George Eliot は Lewes の息子たちを介して、植民地と接点を持っていた。1860 年に長男 Charles が職に就くと、今度は次男 Thornton の将来を決める番になる。Lewes は息子たちが植民地、特にインドで働くことを望んでいたようだが（Adams 145）、Thornton は東インド会社の入社試験に失敗して、植民地行きのチャンスを失ってしまう（*Journals* 118）。George Eliot と Lewes は知り合いに相談し、その人のおかげで 1863 年 10 月 17 日に次男を南アフリカのナタールへと送り出している（*Journal* 119）。

およそ半年後の 1864 年 4 月 4 日付の手紙で、George Eliot は彼から元気に生活している旨の手紙を受け取っている（*Letters* IV: 140-43）。親としての務めを果たしたとばかりに安堵した George Eliot と Lewes だったが、翌年 7 月 23 日に、Thornton から現地での金銭的な問題や期待外れの心情を打ち明けられている（*Letters* IV: 197）。これを知るにつれて、夫妻は心配と後悔の念にさいなまれ続ける（*Journal* 121）。[9] ところがその翌年、Thornton は南アフリカにあるオレンジ川の辺りに農場を獲得し（“a grant of 3000 acres of land on the Orange River”, *Journal* 128）、弟をナタールに呼び寄せる（*Journal* 129）ほどに、現地での生活に明るい兆しを見出だす。George Eliot の日記は以降、三年に渡って自身の執筆活動に関する記述で埋まっており、作家としての充実した生活ぶりを見せている。だが、1869 年 5 月 8 日、健康を害した Thornton は五年半振りに帰国を果たし（*Journal* 136）、George Eliot の看病もむなしく、彼は回復しないままで脊椎結核（tuberculosis of the spine）により、同年 10 月 19 日に死亡している（*Journal* 139）。George Eliot の日記は以降、七か月にわたって記録が途絶えており、その間 *Middlemarch* の執筆も中断されている。つまり作家 George Eliot は、大英帝国の政策によって最愛の家族を亡くし、執筆に影響が出るほどの苦労を経験していたのである。

Thornton の国外体験は 1863 年から 1869 年におよび、George Eliot の作家活動は 1858 年から 1877 年に及ぶ。二つの時期が重なりあうことを考えると、

---

[9] 1865 年 7 月 23 日の日記に、“We have at last had letters from Thornie—on Wednesday the 19th they arrived. The news is middling, except that he is in good health. There has been a monetary crisis in the colony, which has made his trading expedition of doubtful result. He says it is of no use to send Bertie out without a little capital, and discourages the prospect of farming in Natal, so that we must now think of Bertie’s being a trader.”とある。

George Eliot の作品に大英帝国の影を読み込むことは可能であるはずだ。先述した通り、George Eliot が植民地の姿を明確に描いた作品は“Brother Jacob”だけだが、1820 年代から 1830 年代を扱った作品は他にもあり、実際、植民地や帝国主義の問題はわずかながらもこれ以外の作品にも含まれている。そこで本論文では、1820 年代から 1830 年代が舞台となる作品の中から *The Mill on the Floss*、“Brother Jacob”、*Felix Holt, the Radical*、そして *Middlemarch* を選び、出版とほぼ同時期の世界を描いた *Daniel Deronda*（1876）や、主人公の出自や東洋に旅立つ点で共通する劇詩 *The Spanish Gypsy*（1868）を加えて、George Eliot 作品における英国人の帝国意識や大英帝国の描かれ方の変遷を考察する。

本論文で使用する「帝国意識」という用語をここで定義しておきたい。これは木畑洋一が『大英帝国と帝国意識』（1998）の冒頭で定義した造語である。木畑は「帝国意識」について、「自らが、世界政治の中で力をもち、地球上の他民族に対して強力な支配権をふるい影響力を及ぼしている国、すなわち帝国の＜中心＞国に属しているという意識である」（木畑 4-5）と述べている。木畑はここで詳細を述べていないが、おそらくこれは主に Edward Said の定義がかかわっていると思われる。Said は *Orientalism*（1978）の序説において、“The relationship of Occident and Orient is a relationship of power, of domination, of varying degrees of a complex hegemony”（Said 1978: 5）と述べて、西洋と東洋の関係には権力構造が内在していたこと、またその権力構造には東洋よりも西洋の方が優れているという感覚が蔓延していたこと（“European superiority over Oriental backwardness”（Said 1978: 7））を指摘している。*Orientalism* では権力関係が東洋と西洋の間のものとして限定されているが、その後に発表された *Culture and Imperialism*（1993）では、必ずしもそうはなっていない。Said はこの本の中で帝国主義と植民地主義は互いに補完し合うものであると述べて、個々に内在するイデオロギーには、“certain territories and people *require* and beseech domination”といった意識があり、特に 19 世紀の帝国主義には、“words and concepts like ‘inferior’ or ‘subject races,’ ‘subordinate people,’ ‘dependency,’ ‘expansion,’ and ‘authority.’”（Said 1998: 9）が蔓延していたと述べている。George Eliot 作品にみられる「帝国意識」は必ずしも東洋に限定されていないため、*Culture and Imperialism* で述べられた「自国とそれ以外の下等な領域」という定義に近い。そ

こで本論文では「帝国意識」を、「他民族への侮蔑感と自民族への優越感」と同義のものとして使用していく。

George Eliot の帝国意識や大英帝国の描き方に話を戻すと、これらの表象は Thornton Lewes が死亡する前後、つまり *Felix Holt, the Radical* の出版以前と以後で大きく変化している。まず第一章では、George Eliot の半自伝小説ともいわれる *The Mill on the Floss* を使って、帝国意識を育む土壌について考察する。子どもたちは読書を通じて、知らず知らずのうちに帝国意識を共有し、それを表に出してしまう瞬間がある。Tulliver 兄妹が持つ帝国意識とそれがあらわになる瞬間を考察するとともに、成長してから双方の間で帝国主義との関わり方に違いが生じている点についても論じていく。第二章から第四章では、国外、特に植民地とそれに準じる土地の描かれ方の変遷をたどりながら、主要な登場人物たちの価値観を探っていく。まず第二章では“Brother Jacob”に描かれる国外へのまなざしに、あからさまな帝国意識が含まれていることを読み取り、George Eliot の批判の矛先について考えていく。続く第三章では、*Felix Holt, the Radical* の主要人物の一人である Harold Transome に注目し、本作品を Elizabeth Gaskell（1810-65）の *Cranford*（1853）と比較して論じていく。第四章では *Daniel Deronda* を使って、植民地帰りの人に付随する暴力性について論じるとともに、作品の冒頭で主人公 Gwendolen Harleth が興じるギャンブルや投資の問題についても論じていく。

第五章で扱う *Middlemarch* では「国外」が必ずしも植民地を意味しなくなっており、はっきりとした帝国主義の言説は見えにくくなっている。しかし、「内」と「外」という概念は引き続きはっきりと描かれ、英国内の田舎社会と英国外（主にヨーロッパ諸国）との関係が描かれている。この構造において George Eliot は、「国外」や「国外」との関わりに善悪の価値判断を組み込み、以前よりも「国外」との関係に関して保守的な態度に転じている。コスモポリタンとして描かれる登場人物やコミュニティ内における彼らの位置づけ、そしてコレラや鉄道網の問題などを絡めながら、George Eliot の視線が「外」から「内」へ、言い換えれば登場人物たちを国外への勢力拡大よりも国内への立て直しへと向かわせている点を考察していく。

George Eliot は晩年に、国家の在り方を模索している。このテーマを扱った *Daniel Deronda* は、ユダヤ人の青年が国家建国を目指して東洋に旅立つところ

で終わる。この旅立ちについてユダヤ人を中心とした批評家は、George Eliot がユダヤ人の独立を支持したとして賛辞の声を寄せたが、Edward Said をはじめとする批評家からはユダヤ人を英国から排斥したと批判されている。実は George Eliot は *The Spanish Gypsy* でも国家建国を目指すジプシーの王女 Fedalma を主人公に選び、*Daniel Deronda* の結末と同様に、ここでは主人公がアフリカに旅立つところで物語を締めている。どちらの作品においても異民族であった主人公は英国外に出ているため、George Eliot は異民族を英国内から排斥したとする批判は避けられそうにない。しかしこの当時、George Eliot は George Henry Lewes の著作 *Problems of Life and Mind*（1874-79）を手伝いながら、理想とする国家の在り方を模索している最中であった。第六章では、この二つの作品の結末を肯定的に読み取り、George Eliot は帝国主義的なイデオロギーに与して異民族を英国外へと追い出したのではなく、異民族共存を目指した George Eliot 流の理想像であったことを論じていく。

George Eliot と帝国主義の関係について、本研究は Nancy Henry の *George Eliot and the British Empire*（2002）に依拠するところが大きい。ただ同氏の研究は、George Eliot 個人に焦点を当てた作家論としての要素が強いため、本論文では作品論に大きな比重を置きたい。Edward Said が *Orientalism* を発表して以来、西洋による東洋の知的支配の根幹を暴く研究が行われてきた。George Eliot 研究でいえば、Susan Meyer の *Imperialism at Home*（1996）および Alicia Carroll の *Dark Smiles*（2002）がこの流れを汲み、前者は *The Mill on the Floss* に隠された帝国主義の影を見出し、後者では *The Mill on the Floss* や *Felix Holt, the Radical* に登場するオリエントと性の問題を扱っている。これらの研究がなければ本論文で大きなテーマとした、George Eliot 作品における大英帝国の表象を探るきっかけを得ることはできなかった。

ただ、Nancy Henry は作家論に、Susan Meyer と Alicia Carroll は特定の作品の一部に言及するのみであったため、George Eliot 作品全体を同一テーマで論じるにはまだ議論の余地が残されている。Alicia Carroll は、George Eliot 作品におけるオリエントの問題について議論したものの、George Eliot が帝国主義に対してどのような立場を取ったのかについてはあまり議論していない。Susan Meyer の場合は George Eliot 作品、特に *Daniel Deronda* の結末に否定的な

立場を取り、“racial separatism”（Meyer 160）とまで言い切っている。しかし、本論で取り上げる George Eliot の六作品を執筆時期に沿って再読していくと、George Eliot は帝国主義のイデオロギーを共有していたのではなく、むしろその蔓延した感覚を暴いた点で特異な作家であったことがわかる。ポストコロニアリズムの観点から George Eliot の作品を再考するうちに、宗主国の市民であり、支配者の立場にいた彼女が常に距離を持って自国を見つめていたこと、そして彼女が寄り添うのは非宗主国、非支配者であったことに気づいた。本論文では自国の植民地政策に否定的であった George Eliot の姿を探りながら、彼女が理想とした世界のあり方についても論じていく。

第一章
子どもたちの帝国意識
The Mill on the Floss における本の影響力

序論

1860 年に発表された *The Mill on the Floss* は、George Eliot の作品の中でも特に自伝的要素が濃い作品だと言われている。小説に登場する Maggie と Tom の Tulliver 兄妹は幼い頃の George Eliot とその兄 Isaac Evans（1816-90）が原型であり、二人を取り巻く人物や舞台も、多くの点で彼女の伝記と一致している。これに加えて、Maggie の知識欲や精神的な葛藤は幼少期の作者の経験がもとになっており、また兄との関係やわだかまりなどは本作品を執筆していた当時の George Eliot の心的状況を反映したものだとも考えられる。[1] この解釈もまた、作品が自伝的であるという評価を後押しする要素に挙げられるだろう。

このような解釈に大きな変化をもたらしたのが、Susan Meyer の *Imperialism at Home*（1996）である。Meyer は 1854 年のクリミア戦争（Crimean War）や、1857 年のインド大反乱（Indian Mutiny）などを筆頭にして、イギリス社会全体に帝国主義の影響が及んでいた頃に本作品が出版された点を指摘し、そこから古き良きイギリスが消えていくことを嘆く George Eliot の姿を読み取っている。[2] Susan Meyer が本作品を帝国主義という社会的観点から読んだように、本作品が植民地主義を描いた“Brother Jacob”と同じ 1820 年代から 1830 年代に設定されていることを考えると、本作品を単なる半自伝小説として片づけるわけにはいかない。確かに本作品では、“Brother Jacob”や *Felix Holt, the Radical* にあるような植

---

[1] 序章で述べたとおり、George Henry Lewes との同棲が発覚して以来、George Eliot は兄に絶縁を言い渡され、家族と連絡を取ることを許されなかった。*The Mill on the Floss* を執筆していた頃は、兄との和解も叶わず、また最愛の姉 Christiana の最期を見届けることすらできなかった時期である。この点から、本作品の最後で Maggie が Tom に許しを請い抱き合うシーンは、執筆していた当時の Eliot の願望を描き出したものとして読み取ることができる。

[2] Meyer は本作品を論じた結論で、“The novel in part laments the costs of an imperialist commercial economy and laments the loss of a rural life. . . .”（Meyer 156）と述べている。

民地とイギリスの間の明確な往来は描かれてない。どちらかといえば、*Middlemarch* や *Daniel Deronda* の場合のように、特定の登場人物に植民地との間接的な関わりがわずかにほのめかされる程度に抑えられている。[3]

本章では当時の人々が帝国意識を持つにいたる過程を探るため、子どもたちと本との関係に注目していく。一体、彼らは何を読み、そこからどのような影響を受けるのだろうか。本章ではまず初めに、Maggie と Tom が何を読んで育つのかを探り、そこに無意識に含まれるイデオロギーとその影響力について考えていく。また本とは無縁だった水車場頭 Luke や Bob Jakin の人物像、さらには、自己放棄に至った Maggie の溺死についても触れながら、*The Mill on the Floss* を半自伝小説という枠組みに限定しない視点から再考する。

1. 本は何を語るか

George Eliot のそばにはいつも本があったと言っても過言ではない。しかしこれは作家 George Eliot に限らず、Mary Anne Evans の時から変わっていない。例えば、1839 年、当時 19 歳の Mary Anne Evans は、教師でもあり友人でもあった Maria Lewis に宛てた手紙の中で、Shakespeare や Cowper、Wordsworth や Milton らの名前を挙げ、父親の介護で読書ができないもどかしさを吐露している（*Letters* I: 29）。彼女の読書欲、あるいは知識欲を付与された登場人物が Maggie Tulliver である。Maggie は自分の人生を説明してくれる鍵（“some key that would enable her to understand, and, in understanding, endure, the heavy weight that had fallen on her young heart”, Bk.4, Ch.3, 286）を求めてもがき続け、本をその拠り所とする。この町の女性たちは読書よりもゴシップ好きだと言われていることを考えると、本との結びつきが強い Maggie は特異な存在である。

---

[3] Stephen Guest と Maggie Tulliver の関係を噂する女性たちは、“[i]t was to be hoped that she would go out of the neighbourhood—to America, or anywhere—so as to purify the air of St. Ogg’s from the taint of her presence, extremely dangerous to daughters there.”（Bk.7, Ch.12, 492）と述べる。町の空気を浄化するために、Maggie をかつての植民地に追いやろうとするやり方は、*Middlemarch* で邪魔者を排斥しようとする Sir James Chettam と通じるところがある。なお、本論文での引用は、Eliot, George . *The Mill on the Floss*. Ed. Dinah Birch. New York: Oxford UP, 1998.によるものとし、引用の際には必要に応じて、本文中の括弧内に巻、章、頁数を記す。

そもそも Maggie はどのような本を読んで育つのだろうか。本作品の冒頭で、読書中の幼い Maggie が登場する。この時、彼女が読んでいたのは Daniel Defoe の *The Political History of the Devil*（1726）だが、訪問客である弁護士の Riley 氏から、この本は女の子が読むには相応しくないと判断され、“some prettier books”（Bk.1, Ch.3, 18）を読むようにと注意を受ける。本を入手したのは Maggie の父だが、その理由があまりにも短絡的である。彼は市の日（“Partridge’s sale”, 18）に本を買ったと話し、同じ時に Jeremy Taylor の *Holy Living*（1650）と *Holy Dying*（1651）、そして John Bunyan の *Pilgrim’s Progress*（1678）を入手している。その理由が、著者の名が「自分の名前と同じだから」（18）とか、「装丁が似ていたから続き物だと思っていた」（18）といった程度のもので、彼には本へのこだわりも知識も選択の意図もない。それどころか、“the child ’ull learn more mischief nor good wi’ the books”（19）と発言して、本を読むことに否定的である。

この否定的な姿勢は、Tulliver 家と関わるもう一人の大人、Luke にも共通している。彼は、「本に書いてあることは嘘だ」（“they’re mostly lies, I think, what’s printed i’ the books”, Bk.1, Ch.4, 30）と言い切り、本に没頭する Maggie と好対照をなす。Luke は知的労働よりも肉体労働を重視する働き者であるが、この価値観を許容できない Maggie は外の世界を知るべきだとして、Oliver Goldsmith の *Animated Nature*（1774）を Luke に薦める。“. . . elephants, and kangaroos, and the civet cat, and the sun-fish, and a bird sitting on its tail—I forgot its name. There are countries full of those creatures, instead of horses and cows, you know.”（30）と話す Maggie の中で、次第に異国が一つの動物に縮約されていく。例えば、Tom に対して空想交じりの話をするエピソードがあるが、ここで Maggie はライオンが出てきたらどうするかと問う。現実的な Tom はこの空想に馴染めないが、お構いなしの Maggie は、“but if we were in the lion countries—I mean in Africa, where it’s very hot—the lions eat people there. I can show it you in the book where I read it.”（Bk.1, Ch.5, 34-35）と話を続ける。ライオンの生息地はアフリカで、ライオンは肉食獣である。だからアフリカは危険なところだ、という単純な図式が出来上がると、Tom は “Well, I should get a gun and shoot him.”（35）と話して、残虐性を男らしさの一つとしてちらつかせる。

この Tom の姿は、George Henry Lewes の次男、Thornton にもみられる。彼は

インドで働くことを期待されていたが、選抜試験に落ちてしまい、その代わりに南アフリカのナタールに出発する。その時の様子を George Eliot は友人でスイス人画家の Francois D'Albert-Durade（1804-86）への手紙で、"his willing departure for Natal with a first-rate rifle and revolver"や"a very sanguine expectation of shooting lions"（*Letters* IV: 117）と記している。[4] ここでもやはり、南アフリカとライオンという組み合わせがあり、それを撃つという行為に正当化された残虐性が見え隠れする。本作品の場合、先のライオンのエピソード以外にも、Tom の残虐な嗜好が明らかになる箇所がある。Tom は学友になった Philip Wakem が披露する Walter Scott の英雄伝を気に入るが、Tom が狂喜するポイントは作品の主人公が大斧で騎士の兜を頭蓋骨もろとも粉砕する場面（Bk.2, Ch.4, 166）である。血なまぐさい戦闘を特に気に入る Tom は、常に妹や動物を含む下等なものを制したい欲求（"desire for mastery over the inferior animals", Bk.1, Ch.9, 92）に駆られている。本作品の語り手はこの特性を、"an attribute of such promise for fortunes of our race"（92）と呼んで、一種の逞しさとして解釈する。Edward Said が *Culture and Imperialism* の中で、"Greeks always require barbarians, and Europeans Africans, Orientals, etc."（Said 1993: 52）と述べている通り、西洋ではアイデンティティ確立のために「他者」を、もっと言えば「野蛮人」を常に必要としていたのである。Maggie の場合、国境を越えた土地の認識に野生動物が絡み、Tom の場合にはそれを討伐することを善とする価値観が絡んでいる。George Eliot は子どもたちの無邪気な発言や行為に、知らず知らずのうちに刷り込まれた帝国主義のイデオロギーを組み込み、無邪気さに潜むある種の残虐さを描き出している。

Maggie は *Animated Nature* 以外にも Luke に本を薦めている。それが John Harris の *Pug's Tour through Europe: or The Travelled Monkey*（1824）である。これはサルを主人公にした話で、二十ページにも満たないカラーの絵本である。田舎者のサルがロンドンの仕立屋でダンディに変貌し、フランス、イタリア、スペイン、

---

[4] *George Eliot and British Empire* 54. Nancy Henry によると、Thornton の英雄は "anti-imperialist nationalist"で、その代表格はイタリアの Galibaldi、アルジェリアの Abd el Kader、あるいはチェルケス人の Schamyl であったようだ。仲間を率いて勇猛果敢に前進する彼らに Thornton は自分の姿を重ね、彼らの物語を読んでは喜び、場合によっては自分で創作することもあったようだ。

ギリシャ、トルコ、ドイツ、ロシア、ノルウェー、そしてオランダへと移動する話である。無事に帰国するや、サルは “From England I will ne’er roam.”[5] と発して、故郷に身を落ち着ける。ギリシャやトルコのあたりでギリシャの独立戦争に巻き込まれただけに、サルが故郷に戻って安心するのは当然のことである。ただし、この本の副題は *His Wonderful Adventures in the Principal Capitals of the Greatest Empires, Kingdoms, and States* である。サルが行く地は西洋から見てある程度発展した国であり、必ず無事に帰って来られることが前提条件になっている。しかもサルはどこに行っても歓迎されるが、結局は英国が何ものにも勝るというイデオロギーがあるのだ。子どもは滑稽なサルを通してそこに描かれる世界を知り、それを元にして価値観を作り上げていく。無意識のうちに刷り込まれていく英国人であることの優越感は、大人の世界だけでなく子どもの世界においても共有される土壌が用意されているのである。

2. エピソードの背後にある帝国意識

George Eliot は子どもたちに刷り込まれる帝国意識を、多少の批判を込めて描き出していく。本に影響を受ける Tulliver 兄妹であるが、Tom の方は次第に学友である Philip Wakem が披露する英雄伝に飽き足らなくなってくる。その頃に出会うのが、体育を指導する Poulter 先生である。この教師は実際に戦場に赴いた経験の持ち主で、Tom の質問に対して実演を交えて説明する。実在した James Wolfe 将軍（1727-59）について問われると、“He did nothing but die of his wound . . . . One of my sword-cuts ’ud ha’ killed a fellow like General Wolfe.”（Bk.2, Ch.4, 171-72）と語り、Tom が“a wonderful fighter”（171）と評価したこの将軍を蔑む。一方の Tom は、“*I* should like the gun and bayonet best, because you could shoot ’em first, and spear ’em after. Bang! Ps-s-s-s!”（172）と感想を述べ、男らしさと残虐性をほぼ同義に捉えて話す。この時、Poulter 先生が剣をかざし、その動きに驚いた Tom は思わずのけぞってしまう。この迫力を共有しようと、Tom は別室にいる Philip を呼びにその場を離れる。一見すると、Tom は友だち思いの少年のようだが、実はこの行為は弱さを隠す彼なりのごまかしと取っ

[5] Pug’s Tour through Europe は Open Library で閲覧した。
<https://openlibrary.org/books/OL7065690M/Pug’s_tour_through_Europe_or_The_travell’d_monkey>

た方が自然な解釈となりえる。というのも、驚いた Tom の様子は、“a little conscious that he had not stood his ground as became an Englishman”（172）と表現されており、英国男児たるもの驚いてはならない、あるいは驚いたと気づかれてはならない、というイデオロギーが“Englishness”の一つの要因として浮かび上がるからだ。

Wellington 公爵を英雄視する Tom は、彼に会うために学校にやってきた Maggie を前にして威厳と強さを備えた公爵の真似事をする。ありったけのしかめ面をし、頭にはターバンを巻き、体には赤い布をかけて、“fierce and bloody-thirsty disposition”（Bk.2, Ch.5, 179）を演出する。びくともしない妹を本気で怖がらせようと、Tom はしかめ面をしたまま鞘から抜いた刀を Maggie に突きつけて、“severity of great warrior”（179）を備えた男らしさ（manliness）を見せつける。驚いた Maggie は大きな声を上げ、Tom は落とした剣で足に怪我を負う。

Tom の怪我によって、Maggie は Philip の境遇を理解するきっかけを得る。また、Philip は Tom を心配し、Tom は Philip の親切に応えることで、わずかながらもそれぞれの心的距離を縮めていく。これは幼い兄妹が生まれつき体にハンディを抱えた Philip を理解した、道徳的なエピソードとして解釈するのが一般的であろう。だが Nancy Henry はこのエピソードを別の視点から読み解いており、この解釈の方が本章での趣旨に合う。それは Tom が自ら思い描き、追い求めてきた男らしさで怪我をしたという解釈で、彼女は、“the gap between what Eliot considered real manliness and the displays of violence that passes for manliness”（Henry 2002: 30）が明らかになった瞬間だと述べている。ここではさらに、先に挙げた Poulter 先生のエピソードとも関連づけて考えてみたい。

> Tom liked to hear fighting stories as much as ever, but he insisted strongly on the fact that those great fighters, who did so many wonderful things and came off unhurt, wore excellent armour from head to foot, which made fighting easy work, he considered. He should not have hurt his foot if he had had an iron shoe on.（Bk.2, Ch.6, 182）

怪我をした Tom は、以前のように動き回ることができなくなり、日々の活動が一定

期間、制限されてしまう。そのため、座って Philip の英雄伝を聞いて時間を過ごすのだが、「英雄は鎧で身を固めていたはずだ。自分だって鉄靴を履いていれば怪我なんてしなかった」と強がって見せる。負け惜しみのようなこの発言もやはり、英国男児たるもの弱みを見せてはならないというイデオロギーに反応したものである。これも先に引用した「下等なものを制したい欲求」とつながりを見せており、Tom は自分で作り上げた権力構造の中で自分自身を Maggie や Philip よりも上に位置づけているため、自分よりも弱い Maggie や Philip の前で、必死になって“Englishness”の一つである“manliness”を示すことで、自分の体面を保とうとしている。

Maggie がジプシー共有地へ駆け込む場面でも、本に影響を受けた子どもの帝国意識を見出すことができる。大人たちの規範に嫌気がさした Maggie は日頃から外見が似ていると言われ続けたジプシーのコミュニティに駆け込むが、不安と恐怖心を抱いて、泣いて帰ってくる。Alicia Carroll は、激情型の女の子による突拍子のない幼い失敗談を、“unwanted sexual opportunities”や“resulting sexual threat”と表現し、ジプシーが Maggie を性の対象と見なしたことに触れている（Carroll 46）。だが本章で特に強調したいのは、Maggie の体験が植民地化・被植民地化のメタファーとなっている点である。Maggie は他人の生活における優先順位に思いが至らないため、Luke に知的労働を勧めたのと同様、ジプシーたちからも自分の“superior knowledge”（Bk.1, Ch.11, 104）で尊敬を勝ち得ようとする。ジプシー共有地に近づくと、その小さなテントを見て自分がいた“civilized life”（107）との差異化を図って格づけをする。当初はまだ見ぬジプシーを同胞と見なしてそこで女王になるつもりだったのだが、“I’ll live with you if you like, and I can teach you a great many things.”（108）と話すあたりから、彼らを教化しようとする姿が浮かび上がる。Maggie はここで Christopher Columbus の話を持ち出すが、Columbus を知らないジプシーたちはそれを町の名前と勘違いし、Maggie はひどく気の毒に思う。これをきっかけにして、“she was really beginning to instruct the gypsies, and gaining great influence over them”（109）と、Maggie がジプシー共有地へ行った目的が「仲間入り」から「教化」へと明らかに移行している。

幼い Maggie の小さな冒険は結局、彼女の幼さや突拍子のない気性の荒さを

際立たせる要因として作用し、終わる。Maggie の意識の中にはおそらく「教化」という概念はないのだろうが、彼女は一時、恐ろしい考えに取りつかれ、ジプシーを怪物、悪魔、人食い人種と見なす（112）。さらにはジプシーを盗賊と見なして、“all thieves, except Robin Hood, were wicked people”（111）と決めつけて、ジプシー共有地を野蛮で発展が乏しい空間と位置づけ、女王として文化的な発展をもたらしてやろうと帝国意識をあらわにする。だが、Columbus になることを期待していた Maggie は、結局、一種の入植者になれないどころか恐怖心に打ち勝てずに挫折する。George Eliot は Maggie の幼くて突拍子のない行動に、遠慮のない露骨な帝国意識を結びつけた。*Pug's Tour through Europe* の場合、サルは裕福な紳士の息子がやるような大陸旅行のつもりで国外に出るが、Maggie の場合はジプシー共有地に住み着くつもりであった。絶対に受け入れられるはずだと高をくくっていた彼女は父親に、「もう二度とこんなことはしない（“O no, I never will again, father—never.” Bk.1, Ch.11, 115）と泣き、失敗に終わった冒険を反省で締めくくるのである。

3．変化する本との距離

George Eliot の作品では、登場人物が本と距離を縮めたり、それとは逆に距離を置いたりすることがある。例えば“Brother Jacob”の場合、主人公の David Faux は“Inkle and Yarico”（1711）を読んでヨーロッパ中心主義（Eurocentrism）のイデオロギーを強固なものとするし、町の女性は Thomas Moore の“Lalla Rookh”（1817）や Byron の“The Corsair”（1814）、あるいは“Siege of Corinth”（1816）を読んで、異国、特に東洋への想像を膨らませていく。“Lalla Rookh”を読むのは *Middlemarch* の Rosamond Vincy にも共通しているし、Byron は *Felix Holt, the Radical* の Esther Lyon にも本作品の Maggie にも読まれている。ここに共通しているのは、異国への興味がありながら、自分で異国に足を踏み入れるチャンスがない人たちが本から知識を得て、それによって想像力を豊かにしていくことである。さらに言えば、自分たちの頭に出来上がったイメージは必ず崩されるのである。例えば、“Brother Jacob”では女性たちが作り上げた「外（特に異国）から来る人」のイメージが David と合わないし、Rosamond は自分に良い暮らしをもたらさない Tertius Lydgate に落胆し、Esther は Harold が異国で女奴隷を買い、

その女との間に一人息子をもうけたと知って幻滅する。David は異国に、それ以外の人物は外から来た他人に理想を追い求めるが、彼らは理想と現実のギャップを知ってしまう。

本作品の場合、戦争の話や英雄伝に胸を躍らせていた Tom は、一家の破産をきっかけに本と決別している。Tom は一家のために、何としてでも働かなければならないと考えて親戚に相談するが、自分が学んだ知識は全く実務に役立たない（“not a bit of good to me”, Bk.3, Ch.5, 234）ことを悟る。Maggie は「こんな時に Sampson 先生がいたら」（234）と Walter Scott の *Guy Mannering*（1815）を引き合いに出し、現実的な Tom の怒りを買う。Tom は本と距離を取り、その代わりに幼馴染の Bob Jakin に倣って商売に手を出す。Bob の商品は“the lightest things”（240）や“Laceham goods”（Bk.5, Ch.2, 311）などと表現され、船で外国に輸出されている。当時の状況から判断すると、おそらくこれはアメリカから輸入したコットンを布に加工してインド、オーストラリア、カナダ、そして南アフリカに輸送する事業のことだと思われる。[6] Tom は輸入した原料を英国内で加工して外に輸出するという流れ作業の一端にかかわり、経済的な側面で帝国主義と接点を持つようになる。Bob が言う通り、この商売は「ユダヤ人並に儲かり」（“as rich as a Jew”, Bk.5, Ch.2, 323）、家と二隻の舟を所有した Bob（Bk.6, Ch.4, 388）は学問に精を出した Tom よりも社会で成功したというわけだ。

一方の Maggie は、Thomas à Kempis の本をきっかけにして自己放棄の道へと至るものの、本との決別はなかなか果たせない。一家が破産したのち、Maggie は Philip を“my tutor”（Bk.5, Ch.4, 332）と呼び、彼が持ち寄る本と接点を持つ。そして彼女は現実逃避の一種として、Byron や Walter Scott の本を求め続ける。Tom が実務で帝国主義とかかわる一方、Maggie は書物の中の帝国主義とつながり続ける。ただし彼女が思春期にさしかかって読む本では、露骨な帝国意識が薄れている。例えば、Maggie が愛読する *Guy Mannering* は Mannering 大佐の清廉潔白で紳士的な姿が印象的で、「大佐」と「インド」、つまり権力者と被支配地域の関係に潜むはずの暴力と抑圧が含まれていない。この点について Patrick Brantlinger は *Victorian Literature and Postcolonial Studies* の中で Walter

[6] この点については Susan Meyer の論考、および、K. Theodore Hoppen, *The Mid-Victorian Generation: 1846-1886*. 285-86.を参照した。

Scott がインド帰りの人に対する世間一般の印象が悪かったことを危惧して、彼らに付随しがちだった暴力性を排除した背景を説明している（Brantlinger 2009: 13）。*Guy Mannering* という作品が本作品に組み込まれたのも、Maggie がそれを愛読書とするのも意図的である。この時点での Maggie は、本の世界に心地よさを感じ、そこに描かれる世界に対して違和感を持っていない様子を見せている。しかし、彼女の価値観は徐々に揺らぎを見せる。

George Eliot は外の世界、特に異国を描く際には、登場人物たちに「東洋」を描いた本、あるいは浅黒い肌を持つ人物が出てくる本を読ませる。彼らはそこから幻影を創り出すのだが、ヨーロッパ中心主義の価値観に支配された彼らは「東洋」とそれ以外の異国に細かな区別がついていない。先に挙げたとおり、David Faux、Esther Lyon、そして Rosamond Vincy らは本の中に描かれる「東洋」から異国を思い描き、その勝手な空想が現実にはあり得ないことを知って幻滅する。つまり彼らの場合、本に描かれる内容がかなり権威を持って受け入れられているのに対し、Maggie の場合は事情が異なっている。例えば Maggie は Philip に借りた Madame de Staël の *Corinne*（1807）を読んで、不満の声を上げる。その理由はイギリス人紳士 Oswald が、イタリア人女性 Corinne を捨てて祖国で金髪碧眼の女性と結ばれた展開に、「金髪碧眼だけが救われる話はおかしい」（Bk.5, Ch.4, 332）と気づいたからだ。Maggie は家族や親戚が Lucy を少女の模範としていたように、本の世界でも黒い肌の女性が救われないことを知ると、“I want to avenge Rebecca and Flora MacIvor, and Minna and all the rest of the dark unhappy ones.”（332）と話して、Walter Scott の作品に出てくるステレオタイプからはずれた女性たちに寄り添う。「外の世界も知らなければ」と話す Maggie は、*Guy Mannering* に描かれる模範的な英国人よりも *Corinne* における薄情な英国人の姿に大きく反応し、「外」における自国民の非道な振る舞いに気づいたと言える。Maggie はこのようにしてヨーロッパ中心主義の価値観と距離を置いていくのである。

4. 読書をやめた Maggie と溺死

本作品において Maggie は二つのコミュニティから周縁に位置づけられている。一つは“pink-and-white”の女性を理想とするコミュニティで、もう一つは男性中心

のコミュニティである。この二つはヨーロッパ中心主義の極みともいえるもので、これに抗うことこそ Maggie の特性であった。髪型や服装、そして行動などにおいて特異であり続けた Maggie は、父親の破産と死をきっかけにしてしおらしい女性へと変化していく。ライオンのたてがみに例えられていた剛毛が結い上げられているように、彼女の強情な性格は次第にしなやかさを帯びていき、St. Ogg's という社会に同化していく。そしてたまたま見つけた Thomas à Kempis の本に後押しされ、Maggie は自己放棄こそが生きる鍵だと信じ込む。

この自己放棄という選択肢は、Maggie 以外の人物の目にどう映っているのだろうか。本作の語り手は、"She had not perceived—how could she until she had lived longer . . . that renunciation remains sorrow, though a sorrow borne willingly"（Bk.4, Ch.3, 291）と述べ、Maggie は自己放棄がいかに未熟な選択であるかを理解していないと嘆く。Philip も同様に Maggie を批判する。彼は体に障害を持っており、人とうまく関わることができない。町の人は彼を不憫に思いながらも背を向け続けたため、Philip と Maggie は共に周縁に置かれた同志と言えるかもしれない。その彼が Maggie に禁欲的な自己放棄から脱するようにと説くが、彼女はそれすらも聞き入れようとしない。語り手も Philip も、Maggie の判断そのものと Maggie に及ぶ悪影響の両方に対して批判を加えているわけだが、Maggie の自己放棄にはもっと大きな意味づけがなされているはずだ。というのも Maggie には田舎の因習や伝統といった流れに身を任せた途端、今度は物理的な波に流されるという展開が待っているからである。

破産して以降、Maggie の生活は一変する。詳細は記されていないが、外国に行っていたらしい Philip は戻ってくるとすぐに Maggie の元へ向かい、読む本があるのかどうか尋ねる。すると Maggie は、"No, I have given up books, . . . except a very, very few."（Bk.5, Ch.1, 306）と答え、本の世界に戻ることを拒否する。Philip はその後も再三にわたって読書を薦めるが、先に述べた通り、Maggie は *Corinne* を途中で投げ出し、Stephen Guest に渡された本も読まれることがない。自己放棄によって社会が求める「女らしさ」に順応した Maggie は、いわば伝統や規範の波に乗ったわけだが、この象徴的な展開は Maggie が物理的な波に流されていく話へとつながっていく。本作品では Maggie が河で舟に乗るエピソードが二つあるが、どちらの場合においても溺死と絡んでおり、また同時に Maggie に対

するEliotの態度を考察するのには格好のエピソードである。

一つ目はMaggieがStephenと舟乗りに出かけ、駆け落ちの騒動に発展するエピソードである。自己放棄に達した後、MaggieはStephenに誘われるまま舟に乗り込む。漕ぎ手はStephenだが、二人が乗った舟は背後から押し寄せる波（“the backward-flowing tide”, Bk.6, Ch.13, 464）に押されているため、彼が漕がなくとも舟は勝手に流されていく。実際、Stephenはオールを置き、舟はその日のうちに帰れないほどにまで流されてしまう。このエピソードを含む章には“Borne along by the tide”（457）というタイトルがついており、あらゆる出来事が潮に流されるままで進行していく。舟の上のMaggieには“dimly conscious”（464）や“dim consciousness”（469）という表現が繰り返され、彼女の思考がほぼ停止していることが強調される。

もう一つのエピソードは、Maggieが舟を出して兄を救いに行く結末部分である。Stephenとの騒動後、MaggieはSt. Ogg’sの町に戻るが、世間の風当たりは以前にも増して冷たい。兄にも勘当されたMaggieは、友人の家で大洪水の危険を感じ取り、友人の舟を借りて兄の救出に向かう。勢いを増した河はすさまじい破壊力でMaggieに襲いかかり、Maggieにはなす術がない。水の力に任せて進んでいく舟上で、Maggieはまたしても“She sat helpless—dimly conscious that she was being floated along”（Bk.7, Ch.5, 519）と描写され、茫然と流されるままになっている。無事に兄を見つけ出して彼を舟に乗せると、Maggieは手にしていたオールを兄に渡して舵を任せる。オールと共に舟の上での主導権もTomに渡り、視点までもがTomに絞られ、Maggieの存在は一瞬消える。どこからか聞こえてくる“Get out of the current!”（521）という叫びもむなしく、Tomはオールを手放し、結局、兄妹は抱き合ったまま水の奥深くへと沈んでいく。自然の破壊力を前にして、一人の人間が自然の力を凌駕するだけの偉業を成し遂げるのは難しいことであろう。ましてや無意識に支配されているMaggieが、兄を救い出して共に生き残ることは、なおさら難しい。結局、舟を漕ぎ出したMaggieは、「ノアの方舟」のエピソードのように生き残ることはなかった。ただこの結末で明らかなのは、船を使った貿易で生活の立て直しに成功したTomが、舟を介して死ぬという皮肉な終わりを遂げたこと、そしてイギリス中心主義の価値観を否定的に捉えられる、複眼的な視点を持ったMaggieが死んだということである。Maggieは本作品の中で唯一、ヨーロ

ッパ中心主義の価値観に染まらない人物であり、本の中にある異常さを疑問視できる存在だった。しかし彼女は自己放棄を機に、この価値観に対して声を上げることをやめてしまい、「周縁」と「複眼的視点」という二つの特性をも捨て去ったのである。

結論

本章では子どもたちが読む本とその影響、およびそこに含まれる George Eliot の意図について考察した。Maggie の場合、本に描かれる世界は彼女の苦悩を解決する鍵を与えるはずのものであったり、あるいは辛い日常を忘れさせるはずのものであった。幼い頃には知らない間に一方的な価値観によるイデオロギーに影響を受け、Columbus になるべくジプシー共有地へと入り込む。ところが思春期にさしかかって、彼女は本に書かれた世界で黒い肌の女性が救われないことを見抜く。一方 Tom は血気盛んな英雄伝から脱却し、実務の世界に足を踏み入れることで家族や町の人々に一目置かれる存在になろうとする。

ヴィクトリア朝期に生きた人々が当時、本とどのように接していたのかについて Philip Davis はこのように述べている。

> As part of Victorian realism, it was characteristic of Victorian literary biography to believe that literature was important, precisely because it contained within it all that, in life, was more important than literature itself. [. . .] Novels were imaginary biographies.（Davis 416）

ヴィクトリア朝期において、文学作品はフィクションでありながらも、同時に普遍的な人間を描いたものでもあった。だからこそ Maggie は最後まで読み通せなかった Walter Scott の *The Pirate*（1822）の結末を想像して彼ら登場人物の無事を祈り（Bk.5, Ch.1, 306）、黒い肌の女性が救われない作品には本気で憤った。幼い頃にはジプシーを教化しようとした Maggie も、後に、“I always care the most about the unhappy people”（Bk.5, Ch.4, 333）と述べるように、彼女が寄り添う対象はイギリス中心主義の価値観で抑圧される人たちであった。そのため彼女は David、

Esther そして Rosamond らほどに本に絶対的な権力を与えず、むしろそこに含まれる価値観に反発を示せたのである。

Maggie の独特な外見や態度を考察していくと、George Eliot はヒロインをヴィクトリア朝の典型的な少女で終らせるつもりはなかったことが読み取れる。本作品は主人公が社会に溶け込むことが最終的なゴールではないし、また結婚によるハッピーエンドで幕を閉じることもない。しかしながら「ノアの方舟」のエピソードのように、舟に乗っていた Maggie が生き残るという結末も選ばれていない。既定の価値観や社会システムに対して強い対抗心を持っていた Maggie は、ヴィクトリア朝の典型的な少女像からはかけ離れており、このような人物は意図的に描かれたに違いない。結局、Maggie は一方的な価値観に対して声を上げることなく死ぬが、Maggie の墓石が建てられたことで、彼女が存在していた跡を残している。Maggie が本の中にあるヨーロッパ中心主義に気づき、そこにある情報に向き合ったように、George Eliot 自身も自分の本が読者に読まれることを意識して執筆活動にあたっていたはずである。だからこそ、あえて登場人物たちに理想と現実のはざまで挫折させ、幻滅と修正の機会を与えたのである。

第二章
植民地幻想をめぐる共犯関係
“Brother Jacob”における愚かな住民像

序論

長編小説家として名高い George Eliot は、およそ二十年の作家生活の中で二本の短編小説を生み出している。一つは千里眼を持つ青年を主人公にした“The Lifted Veil”(1859)で、もう一つが本章で取り上げる“Brother Jacob”(1864)である。どちらの作品も長編小説ほどの知名度はなく、序章においてすでに述べた通り、“Brother Jacob”に至っては文学史どころか George Eliot の批評家の中でもあまり論じられてこなかった。William Harvey と U. C. Knoepflmacher が低い評価を下したのとは対照的に Henry James は、“‘Brother Jacob,’ which is wholly of a humorous cast, is much the better.”(James 131)と、“The Lifted Veil”よりも“Brother Jacob”の方を好んでいたようだが、それでもやはり本作品を称賛する声は少ない。

本作品は、社会的な上昇志向が高い主人公 David Faux の物語である。元来打算的な彼は本国(英国)での成功が見込めないことに不満を感じ、海外進出を夢見る。旅立ちの資金として母親の財産に手をつけていたところ、知的障害を持つ兄 Jacob に現場を目撃される。何とか兄をふりきって旅立ったものの六年で帰国し、Edward Freely と名を改めて田舎町 Grimworth に入り込んで、そこで菓子店を開く。それなりに成功した生活を送っていたところに兄が登場し、過去の悪事と嘘が暴露された David はその町を去る。“Brother Jacob”はイソップ物語のエピグラフで始まり、[7] “And we see in it, I think, an admirable instance of the unexpected forms in which the great Nemesis hides herself.”(83)の文で終わ

[7] エピグラフは、“Trompeurs, c’est pour vous que j’écris, / Attendez vous à la pareille.”(44)(“Deceivers, I write for you, / Expect a similar fate.”)で、これは La Fontaine の“The Fox and the Stork”(1668)からとられたものである。なお、本論文での引用は、Eliot, George. *The Lifted Veil and Brother Jacob*. Ed. Sally Shuttleworth. London: Penguin, 2001.によるものとし、引用の際には頁数のみを本文中の括弧内に記す。

る。狡猾なキツネ(fox)を彷彿とさせる David Faux や明るく開放的なイメージとは程遠い Grimworth といった地名から、この作品がコメディの要素を含んだ寓話であり、また「悪事には必ず罰が下る」という道徳性が主要テーマであることは言うまでもない。ところがその一方で、David の旅先やその時期にはあまり関心が払われてこなかった。実際、先述した批評家の誰一人として、David の旅先が「大英帝国の植民地ジャマイカ」であったことには触れていないのである。

本作品の時代設定については詳細な年号が記されていないが、登場人物の会話や小道具に注目することで 1820 年代半ばから 1830 年頃と推定される。[8] この時期、イギリスの国会では植民地情勢が議題になることもあったようで、西インド諸島の歴史を著した Eric Williams は、"In 1832 another committee of the House of Commons reported that considerable distress had existed in the British West Indies for the past ten or twelve years, . . . greatly aggravated within the last three or four."(Williams 282)と述べている。ジャマイカでは 1831 年から翌年にかけて大きな暴動が起きており、これは白人入植者に対する反感が頂点に達したことの端的なあらわれである。だが危惧すべき事態は 1820 年代にすでに始まっており、David が滞在していたとされるこの時期のジャマイカは、暴動の火種を抱えた状態にあったといえる。"Brother Jacob"自体、ジャマイカ反乱(Morant Bay Revellion)の前年にあたる 1864 年に出版されたもので、ここにもジャマイカとの縁が感じられる。出版時期は単なる偶然だとしても、David が 1820 年代にジャマイカに渡り、暴動の直前に帰国したというこの設定は明らかに George Eliot によって選ばれている。

David が旅立った時期だけでなく、旅立ちから帰国後の生活など全てのプロッ

---

[8] Oxford 版の編者 Helen Small と Penguin 版の編者 Sally Shuttleworth は、本作品で言及される職業訓練校(Mechanics' Institutes, 1823 年に George Birkbeck が創設)と David の店先の木製よろい戸に注目する。この木製の戸は 1830 年代に鉄製の戸が導入されるまで使用されていたものであるため、Helen Small はこれに着目して本作品の時期を"some time before the 1830s"(101)と定める。Sally Shuttleworth も同様にこの二つの小道具に注目するが、これらに加えて本文中で David が、"the missionaries were the only cause of the negro's discontent"(60)と当時の植民地での暴動について触れる箇所にも注目して、"A slave rising took place in Demerara in 1823, which was suppressed with great harshness by the planters who argued that English missionaries had incited the slaves to rebellion. This detail suggests that the story is therefore set sometimes after 1823 and before emancipation which took place in 1833."(98)とより具体的な年号を提示している。

トに植民地の問題が絡んでいる。それにもかかわらず“Brother Jacob”の批評では植民地の問題が置き去りにされ、不自然なほどに無視されてきた。ようやく 1990 年に入ってから従来型の批評に変化が生じ、その代表格である Susan de Sola Rodstein や Carl Plasa は、David が菓子職人であり職業柄、砂糖を大量消費する立場にいたことから砂糖と奴隷の関係について論じ、一方 Melissa Valiska Gregory はネメシスと帝国主義の関わりに注目する。[9] 本章でもこれらの論考と同様に“Brother Jacob”における植民地の問題を重視していくが、ここで主として論じたいのは、David や彼の取り巻きに蔓延する露骨な帝国意識の存在と、大英帝国の活動に対する George Eliot のスタンスを読み取ることにある。フィクションに感化されて帝国意識に染まる登場人物については本論文の第一章において述べたが、本作品の場合、このモチーフが作品全体により大きくかかわっており、プロットを支配していると言っても過言ではない。本章では David がジャマイカを旅先に選ぶ様子、帰国してから人々を騙す様子、そしてそれに疑いを持たない住民の姿などを帝国意識の観点から考察し、植民地問題に対する George Eliot の態度や“Brother Jacob”の特異性について明らかにしていく。

1. 成功への確信と揺るぎない帝国意識

19 世紀の大英帝国にとって植民地、特に西インド諸島はどのような存在だったのか。J. S. Mill は著書 *Principles of Political Economy*（1848）の中で、西インド諸島についてこのように述べている。

> These [the West Indies] are hardly to be looked upon as countries, carrying on an exchange of commodities with other countries, but more properly as outlying agricultural or manufacturing establishments belonging to a larger community. Our West India

[9] 砂糖と奴隷の関係については、Rodstein, Susan de Sola. “Sweetness and Dark: George Eliot’s ‘Brother Jacob’.” *Modern Language Quarterly* 52 (1991): 295-317.と、Plasa, Carl. “George Eliot’s ‘Confectionary Business’: Sugar and Slavery in ‘Brother Jacob’.” *Literature Interpretation Theory* 16 (2005): 285-309. を参照した。ネメシスと帝国主義の関係については、Gregory, Melissa Valiska. “The Unexpected Forms of Nemesis: George Eliot’s ‘Brother Jacob,’ Victorian Narrative, and the Morality of Imperialism.” *Dickens Studies* 31 (2002): 281-303.を参照した。

> colonies, for example, cannot be regarded as countries, with a productive capital of their own. . . . The West Indies . . . are the place where England finds it convenient to carry on the production of sugar, coffee, and a few other tropical commodities.（Mill 685-86）

Millは当時のイギリスで生活必需品となりつつあった砂糖とコーヒーを生産するにあたって、西インド諸島が大きな役割を果たしたこと、そしてこの地は結局、イギリスにとって商業的に便利な国でしかなかったという英国側の冷徹な位置づけを晒している。西インド諸島が「我々の」と表現されるあたりに、英国と西インド諸島の関係性がはっきりと表れているが、この感覚は一部に限定されるものではなかったと考えられる。この点についてはすでにCarl PlasaがIsabella Beeton（1836-65）の著書 *The Book of Household Management*（1861）に基づいて興味深い指摘をしている（Plasa 286）。19世紀当時、絶大な人気を誇ったBeetonの料理・家事の手引書にはさまざまな家庭料理のレシピが載っており、そこでは砂糖に関して特別に注がつけられている。彼女は砂糖の産地が西インド諸島であり、栽培までにかなりの労力が必要なことを説明する際に、“giving employment to thousands upon thousands of slaves in the slave countries”（Beeton 642）と記している。つまりBeetonはここで労働の背景に潜む奴隷の存在を明かし、奴隷に職を与えて彼らを働かせているという権力構造を露呈させているのである。彼女の本が当時、多くの一般家庭で読まれていたことを考慮に入れると、植民地や奴隷に対するBeetonの感覚は当時の一般大衆とそれほどズレはなく、むしろ多くの英国人が共有していた可能性が高い。19世紀の英国ではジャマイカを代表とする植民地、またそこで取れる作物には常に権力関係が介在しており、ジャマイカも砂糖もいわば暴力の記号と化している。

“Brother Jacob”は1860年に出版を目的とせずに書かれたものであったが、*Romola*の売れ行きが芳しくなかったことからGeorge Eliotが*Cornhill Magazine*に無償で提供した作品である。[10] 彼女は当初 *Cornhill Magazine* に“Brother Jacob”を掲載した時、主人公 David がお菓子に詳しい様子を、“he had the

[10] Rignal, John. “Brother Jacob.” *Oxford Reader's Companion to George Eliot*. 40-41.を参照した。

widest views of the suck department”（*Cornhill* 版, 2）と記していたのだが、書籍として販売する際にはこの部分を、“sugar department”（46）に書き改めている。*Oxford English Dictionary* は 19 世紀当時の“suck”に“sweetmeat”の意味があったことを記載している。[11] そのため George Eliot が“suck”を使おうと“suger”を使おうと、それが意味することはほとんど同じだと思われるであろう。しかし、先に引用した Isabella Beeton の手引書では、砂糖と奴隷はほぼ切り離せない関係にあったことがほのめかされており、現代の読者は両者の間に権力や暴力が介在していた可能性を読み取ることができる。Beeton と同時代を生きていた George Eliot も、“suck department”よりも“sugar department”の方が暴力の存在を表せると気づいていたのかもしれない。この意図的なテクストの異同によって、お菓子職人に憧れた主人公 David がわざわざジャマイカを目指した背景に、権力や優劣関係、そして主人と奴隷といった記号が浮かび上がってくる。

David は経済的な成功の可能性を海外に託す時に、その背後にある暴力性について、“Having a general idea of America as a country where the population was chiefly black, it appeared to him the most propitious destination for an emigrant who, to begin with, had the broad and easily recognisable merit of whiteness”（47）と何の疑いもなく信じ込んでいる。彼は自分の肌の色を理由にして現地の住民に対する強い権力と影響力を信じ込み、出発の前から自分は現地で優位な立場に立てるはずだという帝国意識を見せつける。George Eliot はこの感覚を David だけに特有な意識として片づけることなく、“general idea”と表現することで登場人物や読者を含めた人々と共有させる。そうした中で David の帝国意識をさらに明らかにしていく。“Such a striking young man as he would be sure to be well received in the West Indies. . . . It was probable that some Princess Yarico would want him to marry her, and make him presents of large jewels beforehand.”（53）は、語り手の視点でありながら自由間接話法が使用されており、David が強く成功を確信している様子が明確に描かれている。

---

[11] “8. *pl*. Sweetmeats. Also *collect*. *sing*. *colloq*. **1858** Hughes *Scour*. *White Horse* vi. 110 Nuts and apples, and ginger-bread, and all sorts of sucks and food. **1865** *Good Words* 125 They sometimes get a ‘knob o’ suck’ (a piece of sweetstuff) on Saturday.”とある。

引用中にある“Princess Yarico”は Richard Ligon の *A True and Exact History of the Island of Barbados*（1675）を原典とするもので、イギリス人男性が乗った船が西インド諸島で座礁し、それを原住民少女の Yarico が助けるという話である。ところが男性は仲間と合流した途端にこの少女の恩をあだで返すかのように、“the youth . . . forgot the kindness of the poor maid . . . and sold her for a slave”（107）と残酷な態度をとる。この話に影響を受けた Richard Steel はこのイギリス人男性に Thomas Inkle という名前をつけ、結末の部分では Yarico が身重であるという設定を加えて、“Inkle and Yarico”を発表する。[12] “Brother Jacob”の主人公は Steel 版の話を読んでそこに描かれていることを信じ込み、乏しい読書経験に基づく帝国意識に依存していく。しかも David はここで、“sorry for poor Mr Inkle”（46）と幾分偏った態度を示し、Yarico を踏み台にした Thomas の態度には目もくれずに未知の領域で苦労した彼に寄り添う。本作品の語り手はこの読みについて、“his ideas might not have been below a certain mark of the literary calling”（46）と述べており、David が当時の一般的な感覚を代表していることは明白である。それと同時に読者は、わざわざこのようなコメントが差し挟まれる背景に、語り手が David と距離を取ろうとしている態度を読み取らなければならない。

David は、世間から成功者と見なされるひとかどの人物（remarkable young man, 63）になることを夢見て、他人と同等、あるいは世間一般の生活を愚弄する。しかし彼は菓子職人という仕事でイギリス国内の社会的障壁を超えることは不可能だと判断して、照準を海外に合わせる。彼にとって国外に出ることは自分の立場を大きく変えるチャンスであるため、社会で成功者と認められるために暴力や権力関係が透けて見える場所、しかも勝ち目があると彼が信じるジャマイカに向かう。“Brother Jacob”では主人公は国家組織の一員として植民地に行くことはなく、個人ベースの営みの一環としてジャマイカに渡っている。George Eliot は David のエゴイズムをこのような方法で強調し、植民地との関わり方の根底に彼の帝国意識を盛り込んでいる。

---

[12] Thomas は船が座礁したことによる時間的・経済的なロスを埋めようと、バルバドスの商人に Yarico を売ろうとする。その時に彼女の状況が語り手の視点から描かれる（“she was with Child by him”）が、Thomas はこの情報を利用して商人から二人分の料金を要求したことが物語の最後に記されている。

2. 海を渡った男へのまなざし: Grimworth の住民の帝国意識

本作品では David が滞在先でどのような生活を送ったのかについて、その詳細が一切描かれていない。実際、本作品は David が西インド諸島に向けて出発するところを第一章の終わりとし、それに続く第二章は六年後に彼が Edward Freely と名を変えて英国に戻り、自分の故郷ではない田舎町 Grimworth で菓子店を開いたところで始まる。しかも、彼の行き先がジャマイカだったことは、第二章の終わりから第三章の冒頭でほのめかされる程度におさえられている。[13]

Grimworth のコミュニティは中流階級の女性たちが中心で、医者や牧師、工場経営者や商人など、概して社会的な地位が高い夫を持つ女性が多い。ホームメードの食べ物を食卓に並べることが美徳とされる中、獣医の妻は夫の来客がある日にミンスパイの調理に失敗してしまう。彼女は夫に内緒で David の店から買ったものをテーブルに並べてその場をしのぎ、友人にこの出来事を話す。するとこの友人も David の店からお菓子を買い、次第に David の店で買った食べ物が家庭内に持ち込まれるようになる。ホームメードからレディーメードに移行していく状況は、“The infection spread”(61)、“the glowing demoralisation”(62)、あるいは“the inevitable course of civilisation, division of labour”(62)などと表現されており、語り手は田舎社会に資本主義の化身ともいえる David が入り込んだことを嘆く。ただし David に対する嘆きはこのことに限られておらず、それは物語を読

[13] 希望に胸を膨らませて渡ったはずのジャマイカで、David が挫折する様子については、“in other branches of human labour, he began to see that it was not possible for him to shine. Fate was too strong for him; he had thought to master her inclination and had fled over the seas to that end; but she caught him, tied an apron round him, and snatching him from all other devices, made him devise cakes and patties in a kitchen at Kingstown.”(73)においても明白である。ただ一つ気になるのは、ジャマイカに渡ったはずの彼の滞在先がジャマイカの首都 Kingston ではなく、“Kingstown”と表記されている点である。キングスタウンは西インド諸島のセントヴィンセント島(St. Vincent and the Grenadines)の首都であり、実在する地である。“Brother Jacob”が最初に掲載された *Cornhill Magazine* でも Kingstown として表記されているため、書籍版にする際のミスとは考えにくい。Kingstown という地がジャマイカ内に存在するのか、それとも架空の地として George Eliot が組み込んだのか。あるいは George Eliot がこの二つの地を混同していたのか、この点について触れた先行研究がないため判断がつきにくい。もしこれが George Eliot のミスであれば、執筆前に相当な下調べをする彼女には珍しいことであり、“Brother Jacob”では植民地の姿を事実に基づいて正確に描き出すことを意図していなかったと考えられるかもしれない。

み進めていくうちに明らかになる。

前述した獣医の妻は東洋を描いた作品に熱中しており、特に Lord Byron の“The Corsair”(1814)や“The Siege of Corinth”(1816)、さらに Thomas Moore の“Lalla Rookh”(1817)などを暗唱できるほどに愛読している。イギリスの外に出たことがない彼女にとって、外の世界を知る術は書物しかなかったため、Byron が描くトルコや Moore のカシミール表象から想像を膨らませていくのである。このような状況で実際に海を越えた David に会い、その彼に憧れのまなざしを向けたとしても何ら不思議なことはないだろう。

> Nothing short of the very best in the department of female charms and virtues could suffice to kindle the ardour of Mr Edward Freely, who had become familiar with the most luxuriant and dazzling beauty in the West Indies. It may seem incredible that a confectioner should have ideas and conversation so much resembling those to be met with in a higher walk of life, but it must be remembered that he had not merely travelled, he had also bow-legs and a sallow, small-featured visage, so that nature herself had stamped him for a fastidious connoisseur of the fair sex.(64)

獣医の妻と同様に、彼女たちはフィクションの世界に描かれるイメージに感化されており、実際の場所がどのようなところであるかを知ることなく、外の世界を美化する。そのためにトルコやインド、そしてジャマイカの違いもわからないままで、外から戻った David に魅了されて冷静な判断ができていない。閉塞性のある田舎と刺激的な David というこの二つの要素は見事に絡み合い、David はジャマイカから戻って初めてひとかどの人物になれたのである。ところがまたしてもここで語り手は David のマイナス要素を描写してみせる。それは足の形や肌の色、そして顔つきなど外見的なことに集中しており、これは語り手同様、ほとんどの登場人物の視線を集めるほどのインパクトがある。中でも David の足は彼がヨチヨチ歩きを始めた頃に弓型に大きく曲がる(“bow-leg”, 47)徴候を見せており、父親は David の将来を心配していたようだ。彼に初めて会う人の多くはその足元に目を向け、同時に

浅黒い肌や特徴のない顔立ちにも警戒心を抱く。多くの人がこのような反応を見せる中、女性たちはこれらの外的要素ですらもどこか神秘的なものとして受け取っているふしがある。彼女たちにとって David の全てが無条件に魅力的なのだ。

David が独身であり、彼に憧れのまなざしを向ける人も独身であれば、恋愛関係に発展するのは当然の成り行きであろう。物語の中盤で David はヨーマンの娘 Penelope と婚約する。彼にとってこの婚約はイギリスの田舎社会で台頭できる大きなチャンスであり、また彼女にとっても人々の注目を集めるチャンスとなる。彼女は自分の夫になる人はひとかどの人物でなければならないと決め込み、その人と結ばれることで自分も普通以上になれる恩恵にあずかろうとする。そのような彼女にとって David はまさにうってつけの存在である。実は Penelope はこの時点で田舎紳士 John Towers から求婚を受けていたのだが、彼女は二人を秤にかけ、“young Towers, whose cheeks were of the finest pink, set off by a fringe of dark whisker, was quite eclipsed by the presence of the sallow Mr Freely.”(63)と John の方を振るい落とす。彼女は David を“A man who had been to the Indies, and knew the sea so well, seemed to her a sort of public character”(66)と形容し、Captain Cook や Robinson Crusoe と同列に並べて目を輝かせる。Penelope は Robinson Crusoe こそ植民地にいち早く足を踏み入れ、主人と奴隷の関係を築いた人物だという認識ができない。David はその後も Penelope や町の女性たちを前にして、サメや巨大ガニと格闘したという偽の武勇伝や、植民地には食パンの木がありその実をもぎ取って食べていたという話、あるいはジャマイカにプランテーションを経営している伯父がいるという話など(63)、まことしやかな嘘で田舎の女性たちを虜にし、またこれを聞いた女性たちも何ら疑うことなく彼の言葉を信じ込む。“Brother Jacob”では、植民地に行けば間違いなく成功するはずだという David の帝国意識だけでなく、植民地に行っていたイギリス人男性は絶対に成功者に違いないと根拠もなく信じ込む女性たちの帝国意識も暴かれており、David はこの状況を利用して小さなコミュニティでのし上がっていくのである。

すでに述べたことだが、本作品では David がジャマイカに滞在していた間の様子はわずかしか描かれない。そのため読者もその詳細を知ることはできないのだが、David がジャマイカで挫折したことだけははっきりと描かれている。

> Certainly, this result was contrary to David's own expectations. He had looked forward, you are aware, to a brilliant career among 'the blacks'; but, either because they had already seen too many white men, or for some other reasons, they did not at once recognise him as a superior order of human being; besides, there were no princesses among them. Nobody in Jamaica was anxious to maintain David for the mere pleasure of his society. . . . [H]e was doing himself a wrong. . . . He had formed several ingenious plans by which he meant to circumvent people of large fortune and small faculty; but then he never met with exactly the right people under exactly the right circumstances.(72)

George Eliot はこの部分の視点人物を David に定めて彼の立場から植民地での失敗を提示し、そこに語り手の判断を組み込むことで、David の理想と語り手の現実描写の落差を浮き彫りにしていく。例えば David は自分が"superior order"として認識されなかった理由を、原住民が白人を見慣れていた可能性に結びつけているが、本論の冒頭で述べたDavidの滞在時期に目を向ければ容易に答えが導き出せる。つまり彼は白人入植者に対する原住民の反感が最も強い時期にジャマイカに渡り、彼らの怒りが頂点に達した 1832 年の反乱直前まで滞在していた可能性が高いのである。それにも関わらず彼は当時の植民地情勢に疎いまま、根拠のない自信だけを頼りに最悪のタイミングで植民地に渡ったのである。このような時期に露骨な帝国意識を出すDavidがジャマイカで受け入れられるはずなどない。

David が選んだ行き先とその滞在時期、および現地での職業に納得がいかない人の中には、"[H]ow came he to go to the Indies? I should like that answered. It's unnatural in a confectioner."(64)と疑問視する人もいる。これは Penelope にも共通する感覚であり、彼女は、"[I]t seemed strange that a remarkable man should be a confectioner and pastry-cook"(66)と話し、この状況を"anomaly"(66)と表現する。だが結局、住民たちは David がチラつかせるジャマイカ産のラム酒に成功の証を読み込み、白人至上主義に基づく帝国意識か

らDavidを成功者に位置づけて信じ込んでしまう。このようにしてGeorge Eliotは中流階級を中心とするGrimworthの住民の帝国意識と、彼らの植民地事情への無知を暴き出して読者の目の前に晒すのである。

3. 疲弊した侵略者

David はジャマイカの住民との間で主人と奴隷の権力関係を築けないまま、イギリスに戻る。この時に彼が生活を営むのに意図的に選んだのは自分の故郷ではなく、彼のことを誰も知らない土地であり、住民の無知を利用してのし上がろうと画策する。彼はPenelopeと会うやいなや、“[H]e judged her to be of submissive temper—likely to wait upon him as well as if she had been a negress”(67)と判断を下し、植民地で作り損ねた権力関係をGrimworthで作り上げようと試みる。その結果、David がジャマイカで作ろうとした権力構造は結局この町で実現し、しかも David と住民たちの幻想によってジャマイカを最下層にした共犯関係を結ぶのである。David、Grimworth の女性たち、そしてジャマイカという上下関係ができあがったところで、David の兄 Jacob が登場する。実は David がジャマイカに渡っていた間に父親が死亡したのだが、そのことを知らせる新聞記事を目にすると、David は遺産の分け前で用があるはずだと勘違いして弁護士と接触を図ったのである。結果的には自分の居場所を伝えることになり、David にとってはこれが致命的なミスとなってしまう。巨体を揺らして店内に入ってきた Jacob は、ピッチフォークを片手に店内のお菓子に食らいつく。この状況で Jacob はたどたどしい口調ながらも、Edward Freely は自分の弟 David Faux であること、彼は母親の財産を盗んで西インド諸島に行っていたことを語り、結局、ジャマイカにプランテーションを経営している伯父などいないことが暴露される。当初、Jacob は知的障害ゆえに真剣に構ってもらえなかったのだが、彼を探しにやってきた兄弟の長男 Jonathan の説明と相まって、居合わせた人たちは次第に彼の言葉の真実味に気づく。この知的障害を持つ Jacob が eye-opener となった途端にこの町で築かれた権力構造は覆され、田舎の中流階級の愚かさが一気に暴かれるのだ。

愚か者の烙印を押された女性たちは震え上がり、“Dreadful suspicions gathered round him: his green eyes, his bow-legs, had a criminal aspect. . . . In this way the demoralisation of Grimworth women was checked.”(83)と描

かれる。女性たちの見る目が変わった様子は、以前、世界を見てきた非凡な男性の特徴として捉えられた彼の目や足が“criminal aspect”と表現されている点において明らかである。また David が田舎にやって社会的にのし上がろうとした野心が“demoralisation”として位置付けられるが、おそらく不道徳として位置付けられるのは、先に述べたように David が伝統的な田舎社会に近代的な資本主義をもたらし、それによって女性たちが家庭経営という役目を放棄したことだけでなく、David に向けていた彼女たちのまなざしに性的堕落があったことも含まれるのかもしれない。その結果、David はこの田舎町の“interloper”(81)と呼ばれ、植民地に続いて田舎にも侵略した男に位置づけられる。この状況がさらに続けば、“Grimworth would have people coming from Botany Bay to settle in it”(81)とも述べられており、この田舎町がいかに危険な場所になりつつあったかを英国の流刑植民地を例にとって具体化している。

一方、失敗が確実になった David は、“Was this the upshot of travelling to the Indies, and acquiring experience combined with anecdote?”(79)と落胆する。この発言から David はジャマイカに渡ること、あるいはジャマイカで成功を収めることよりもむしろ、ジャマイカから戻った時に付随する「植民地帰り」という身分を手に入れることを目的としたことが考えられる。つまり彼が自分の故郷に戻らなかったのは母親の財産を奪って海外に出た後ろめたさが原因なのではなく、むしろ彼の過去も素性も知らない場所で「植民地帰り」という身分を利用して、以前越えられなかった社会的障壁を越えることが目的だったのである。しかしこの試みは失敗し、David は泣く泣くこの地を去る。このように George Eliot は David が信じて疑わなかった神話、つまり白人男性は植民地で必ず経済的に成功するという神話を本作品の中で崩壊させ、植民地帰りの男性に付随しがちな「成功」の構図を完全に消し去ったのである。それだけにとどまらず、植民地から戻った人を経済的、社会的成功者に位置づける住民たちの帝国意識をも暴き出し、そこにも批判の矛先を向けたのである。“Brother Jacob”の特異性は、植民地拡大の活動に携わったことよりもむしろ、現地の様子を知らない人たちを騙す帰国者が「侵略者」に位置づけてられている点、つまり外から戻ってきた自国民が不道徳な詐欺師として描かれ、その人に憧れのまなざしを向ける取り巻きもが否定的に描かれた点にある。

もう一つの特異性を考えるにあたって、まずは Edward Said の主張を取り上げたい。Said は *Culture and Imperialism* の中で、19 世紀から 20 世紀の社会に蔓延していた感覚についてこのように記している。

> In the expansion of the great Western empires, profit and hope of further profit were obviously tremendously important, [. . . b]ut there is more than that to imperialism and colonialism. There was a commitment to them over and above profit, a commitment in constant circulation and recirculation, which, on the one hand, allowed decent men and women to accept the notion that distant territories and their native peoples should be subjugated. [. . .] We must not forget that there was very little domestic resistance to these empires, although they were very frequently established and maintained under adverse and even disadvantageous conditions. Not only were immense hardships endured by the colonizers, but there was always the tremendously risky physical disparity between a small number of Europeans at a very great distance from home and the much larger number of natives on their home territory.（Said 1993: 10-11）

Said は 19 世紀当時多くの人にとって、植民地が単に経済的発展に不可欠な地とは考えられていなかったこと、そして彼らが植民地にいる人たちは隷属しても構わない人たちだと見なし、これが疑問視されなかったことに触れている。確かに、この共通概念は多くの人に受け入れられていたものであり、George Eliot もその片棒を担いでいる。本作品の場合は、David にも彼の取り巻きにも植民地に行けば必ず成功するという考えが刷り込まれているし、その根底には植民地の人たちを最下層に置いた権力構造が存在している。だが、George Eliot が“Brother Jacob”に込めた想いは別のところにある。

例えば本作品では、“fevers and prickly heat, and other evils incidental to cooks in ardent climates, made him long for his native land”（73）に、現地での苛酷な状況を言い含め、またそこから帰国した David の外見（“the stranger

with a sallow complexion", 57）には現地での苦労をうかがわせる。George Eliot は植民地帰りの人を描写する際に、日焼けと持ち帰った品を植民地にいた証とすることが多く、David の場合も肌の色とラム酒が人々を騙す切り札となっている。さらに読み進めていくと再び彼が、"the sallow-complexioned stranger"と描写されるが、ここでは"the less sanguine"（58）や"peaky"（69）という新たな特徴がつけ加えられている。つまり George Eliot が描く「植民地帰り」の人は、恰幅のよさや威厳、あるいは活力に満ちた様子とは無縁であり、むしろ危険と苛酷な状況にいたことを想像させるほどに輝きがないのだ。[14] このような点から考えると、George Eliot の作品、少なくとも本稿で扱った"Brother Jacob"は Edward Said が批判する、当時の共通概念と一線を画しており、当時としてはかなり特異な作品であったと結論づけられる。

結論

序章でも述べた通り、George Eliot は 1864 年に"Brother Jacob"を出版する前に、植民地と個人的なレベルで接点を持っていた。このことが帝国主義に対する George Eliot の懐疑的な態度を決定づけ、彼女が大英帝国の活動にネガティブなイメージをまとわせたのもうなずける。またちょうどこの頃、インド高等文官の実情を記した"The Indian Civil Service: Its Rise and Fall"が *Blackwood's Edinburgh Magazine* に掲載された。このエッセイは現地生活に伴う精神的、肉体的負担や彼らの不道徳ぶりを明かすもので、植民地生活に対して抱きがちだった輝かしいイメージを一変させるほどの衝撃があった。[15] George Eliot が当時これを読んだのかどうかについては日記や手紙に記述がないが、この雑誌は彼女自身、関わりが深いものであったため目を通した可能性は十分に考えられる。いずれにせよここで留意すべきことは、"Brother Jacob"は出版年こそ 1864 年であるが、執筆そのものは 1860 年であるということだ。つまり本作品は彼女がわが子同

---

[14] *Felix Holt, the Radical* に登場する Harold Transome は例外的に恰幅がいい。彼は 15 年ぶりにスミルナから帰国し、地元住民の前に"so browned and so stout"（25）な姿を見せつける。"Brother Jacob"の David とは対極的に、Harold は大きな体つきで帰国し、またイギリスでの社会的な地位や身分が良いため、住民たちが彼の金銭的な成功を信じ込むのは自然な流れかもしれない。

[15] Kaye, John William. "The Indian Civil Service: Its Rise and Fall." *Blackwood's Edinburgh Magazine* 89 (Jan. 1861): 115-30.; (Mar. 1861): 261-76.を参照した。

然にかわいがっていた Thornton Lewes をナタールに送り出す前、言い換えれば George Eliot が植民地と接点を持つ前に書かれた作品であり、また *Blackwood's Edinburgh Magazine* で植民地の現状が伝えられる前に書かれた作品である。このことを考慮に入れると、本作品は George Eliot が個人的な事情に左右される前の段階で、大英帝国の姿をどのように捉えていたのかを考察するのに格好の研究対象である。

George Eliot は身内を植民地活動の一環で失う前からすでに、大英帝国と植民地の関係は必ずしも輝かしいものではないことを察知していた。David を成功とは対極に置いてそこから華々しいイメージを剥ぎ取り、当時多くの人が共有していた感覚、つまり白人は植民地で必ず成功するのだという夢を David に見させ、それをもろくも崩れさせた。それだけにとどまらず、彼女は「植民地帰り」というその一点に過剰な夢を見る取り巻きの帝国意識をも晒した。彼らを David に騙されかけた住民、別の言い方をすれば、もう少しで David が騙せそうだった愚かな住民として描くことで喜劇的な効果を出し、その中で安易な考えに飛びつく彼らをも批判と揶揄の対象にした。George Eliot は“Brother Jacob”で典型的な植民地像を一部利用しながら、当時多くの人たちが共有していた優越感と植民地に対する幻想を完全に崩壊させることで、帝国意識と植民地に付きまとう幻想に抵抗を示したと結論づけられる。

第三章
まやかしの記号
Felix Holt, the Radical におけるヘゲモニーの崩壊

序論

序章でも述べた通り、George Eliot は 1863 年 10 月に Thornton Lewes をナタールに送り出し、その後、何度か彼と手紙のやり取りをしている。ナタールから届いた手紙には、金銭的な問題や現地でのいざこざなどあまり明るい話題はなかったようで、George Eliot は Thornton をナタールに送ったことが正しい選択だったのかと苦悶する。この時期に書かれた作品が本稿で扱う *Felix Holt, the Radical* (1866) である。

"On the 1st of September, in the memorable year 1832, some one was expected at Transome Court."[1] の文で始まる本作品は、物語の設定時期を 1832 年 9 月、第一次選挙法改正の直後から次の選挙法改正に向けた政治的な混乱期に定めている。本作品自体、第二次選挙法改正 (1866) の直前に発表されており、政治の混乱は小説の内外に及んでいる。この時代背景にあって人々が帰りを待ちわびるのは、スミルナから 15 年ぶりに帰国する Harold Transome である。*Felix Holt, the Radical* というタイトルにもかかわらず、冒頭から全ての注目は Harold に集中している。実際、本作品は Harold の物語とも言えるほどに一家の歴史、彼とその息子 Harry の出生に関する秘密、そして Transome 邸の所有権問題など、大部分が Harold に関するプロットで占められている。

これまでのところ多くの論文で、本作品が政治小説であるかどうかの議論が行なわれてきた。ところが Alicia Carroll は *Dark Smiles* で、本作品に描かれる政治問題が注目されるあまりに、オリエンタリズムの問題が置き去りにされてきたことを指摘し、そこに付随する性の問題を論じた。[2] 例えば Alicia Carroll は本作品に

---

[1] *Felix Holt, the Radical* 13. 本論文での引用は Eliot, George. *Felix Holt, the Radical*. Ed. Fred C. Thompson. New York: Oxford UP, 1998.によるものとし、引用の際には必要に応じて、本文中の括弧内に巻、章、頁数を記す。

[2] この点については、Carroll, Alicia. "The *Giaour*'s Campaign: Seduction and

おける Byron の影響に注目し、Esther Lyon が Byron の *The Giaour*（1813）からオリエンタルなものに憧れを抱き、その理想を Harold に投影する様子を読み取っていく。Carroll はオリエントへのあこがれを“a metaphor for despotism and sexual tyranny”と同義に捉え、Felix が Esther を叱責することでこの価値観に歯止めをかけようとする姿を評価している（Carroll 84）。本稿でも Carroll と同様に、本作品における東洋の問題について議論していくが、主として論じたいのは Harold に内在する帝国意識と彼を取り巻く人々に内在する帝国意識である。本稿ではまず、作品に蔓延する帝国意識がどのようなものかについて述べ、スミルナから帰国した Harold の運命や Felix と Esther の結婚問題を考察しながら、帝国意識に対する George Eliot の態度を読み取っていく。[3]

1．蔓延する帝国意識

1857 年 3 月 18 日付の日記によると、George Eliot はこの日に Elizabeth Gaskell（1810-65）の *Cranford*（1853）を読んでいる。“[R]eading Mrs. Gaskell’s pretty Cranford”（*Journal* 67）という記述から、George Eliot がこの作品を気に入った様子が推察できる。*Cranford* の後半では、田舎で店を営む困窮した姉妹のもとに、突然、姉妹の弟である Peter Jenkyns がインドから帰国する。帰国した彼は“the Aga”（*Cranford* 149）や“as rich as a Nabob”（*Cranford* 152-53）と言い表され、住民たちからオスマン帝国やインドの高官に比肩する人物として歓迎される。町は彼が持ち帰ったお茶や装飾品で彩られ、土産話や妙な食事法など全てが“so very Oriental”（*Cranford* 237）の一言に縮約される。Peter の帰国は住民を無条件に魅了し、彼の財産によって家族と町が精神的、経済的な落ち着きを取り戻して物語が終わる。一方、*Felix Holt, the Radical* の場合、物語の冒頭で Harold Transome がスミルナから帰国する。ここでは母親を筆頭にして一

---

the Other in *Felix Holt, the Radical*.” *Dark Smiles*. 65-91.を参照した。

[3] 序章で述べた通り、「帝国意識」には植民地に対する優越感が関わっている。本作品で Harold が滞在していたスミルナは、正確に言えば大英帝国の植民地ではない。しかし John Rignall は *Oxford Companion to George Eliot* でスミルナについて、“it was central to the so-called ‘Eastern Question’, and Britain sought to develop its influence in the region to counter Russian advance to safeguard the route to India.”（Rignall 74）と述べている。権力と支配権を牛耳ろうとする大英帝国にとって当時のスミルナは一種の踏み台と化している。そのため本稿ではスミルナを大英帝国の植民地と同等に扱い議論していく。

張羅に身を包んだ女性たち、馬車を見に集まる少年たち、帰宅の鐘を鳴らそうと待ち構える寺男たちなど、まさに町全体が彼の帰りを待ちわびる様子が描かれる。人々の記憶の中で 1832 年は選挙法改正の年として認識され、個人の歴史は埋もれがちになる。だが本作品の Treby Magna では 1832 年が Harold の帰国した年として強調されており、“the memorable year 1832”が国レベルの記録から地方レベルの記録に捉え直されている。

代々続く Transome 家は、邸の所有権をめぐる度重なる裁判によって金銭的に困窮している。筆不精な Harold のおかげで、Transome 夫人はこれまでの彼の生活ぶりをほとんど知らないが、それにもかかわらず彼を“a rich, clever, possibly a tender, son”（Vol.1, Ch.1, 16）と形容して、金銭的な期待を募らせる。帰国した Harold が“so browned and so stout”（25）だったこともあり、彼が気候の異なる地で成功したという期待は一層高まる。大金を目にせずとも、帰国した彼は“coming back with a fortune to keep up the establishment”（Vol.1, Ch.7, 85）や“as rich as a Jew”（Vol.2, Ch.18, 165）などといったように金銭と結びつけられることが多く、“this Transome has p’raps got a matter of a hundred thousand.”（Vol.1, Ch.7, 83）と金銭的なゴシップが絶えない。また“[t]his young fellow coming back with a fortune to give the family a head and a position is a clear gain to the county”（80）では彼への金銭的期待が家族の枠を越え、コミュニティ全体にまで拡大していることが示される。植民地やそれに準じる土地はイギリス人に金銭的な成功を約束する場所に違いないとするこの根拠のない考えは、イギリス人の優位性を信じて疑わない帝国意識の表れである。George Eliot はこの姿を Treby Magna の住人たちにも重ねていき、安易な帝国意識に支配された人々の姿を暴き出す。

Harold に向けられるまなざしは、植民地から戻ったエリートに対するそれに通じるものがある。“Brother Jacob”の David Faux が、無知な住民たちを騙して、田舎社会で台頭しようとしたように、本作品の Harold もまたこの状況を利用していく。彼は持ち帰った財産が Transome 邸の再建にははるかに及ばないことを明かさないままで、スミルナでの裕福な生活ぶりや、気候と食事に適合していた様子など、輝かしい話だけを披露してみせる。これらの成功談は Harold の口からのみ語られ、それは現地で生活を共にした召使いの Dominic や息子 Harry がいない場合に

限られている。住民たちは Harold が発信する情報を元にして、彼のエリート像を作り上げていくわけだが、空白の 15 年を埋めるにはあまりにも情報が乏しい。実際、住民の誰一人として彼がトルコで女奴隷を買って子どもをもうけた反道徳者であることなど、知る由もないのだ。

Harold に内在するこのような帝国意識は、イートン校で教育を受けたことにも原因があるのかもしれない。19 世紀当時、大英帝国のエリートと称されたインド高等文官（Nabob）の多くはイートン校の出身者であり、彼らはそこで植民地の文明化や教化を目指す政治的指導者になろうと共通認識を深めていった。[4] このような大義名分はイギリス人が持っていた無意識の優越感に支えられており、帝国意識はこのような土壌で育まれていく。Harold はインドにこそ行かなかったものの、将来的には植民地高官になりえる環境で教育を受けていたわけであるから、彼が帝国意識と無縁だったとは考えにくい。

Transome 邸に戻ってからの Harold は専属の召使いを求め、家族の生活を無視して自分中心の間取りに変えようと横柄に振舞う。時には伝統的な家庭料理にまで難癖をつけ、彼好みの味に変えようとスパイスを持ってくるようにと要求する。典型的なイギリスの上流家庭が Harold 流の東洋に塗り替えられ、それは食材や味付けといったお皿の中の小さなイギリスにまで及び始める。この一連の行動には、自分こそが Transome 邸の中心人物だと信じる意識が影響しており、帝国意識にも似た優越感が国内、そして家庭内でも影響を及ぼしていく。また一度捨てた公人の道を目指す際には、“I am an Orient, you know”（Vol.1, Ch.8, 91）と総括的な総称で自分の立場を言い表す。ここには東洋に渡り、東洋を知り、東洋で支配的な立場にいた Harold の自負が込められているのであろう。[5] 元来の“fond of mastery”（Vol.1, Ch.2, 31）という性格も手伝って、彼の高慢な態度は勢いを増す。

---

[4] 本田 25, 44. インド高等文官はオックスフォードかケンブリッジ大学の出身者が圧倒的だったが、出身パブリックスクールの上位 3 校は、1 位から順にセント・ポールズ・スクール（St. Paul’s School）、クリフトン・カレッジ（Clifton College）、ウィンチェスター（Winchester）となっている。Harold の出身校であるイートン校は第 8 位に挙げられている。

[5] 第四章で扱う *Daniel Deronda* の中では、Gwendolen の祖父が“a West Indian”（Bk.1, Ch.3, 17）と呼ばれている。これは彼が西インド諸島に複数のプランテーションを所有し、支配的な立場にいたことを示す俗称である。本稿では Harold の発言も *Daniel Deronda* の場合と同様に支配権の有無を争点にしたものだと解釈している。

議会選挙にラディカルから出馬するにあたって彼は、“every one about him should like his mastery; not caring greatly to know other people’s thoughts, and ready to despise them as blockheads if their thoughts differed from his [. . . .] The blockheads must be forced to respect him.”(31)とスミルナで培った優越感をイギリス国内にも持ち込み、家庭と政治の中心人物になろうと画策する。彼の優越感は他民族に対するものとは限らず、家族や有権者などの自民族にも及んでいる。つまり植民地の住人も家族も有権者も、彼の帝国意識下では一つにまとめられ、彼を中心にした構図の中で無遠慮に操られていくのである。これ以降、George Eliot が Harold に肩入れすることはなく、彼とは一定の距離を保ったまま描写を続けていく。Harold への投票を呼びかける遊説では、彼が遠方から大金を持ち帰りそれを多くの労働者のために使うつもりであることが伝えられる。帝国意識に毒された住民たちはやすやすと Harold の影響力を信じ込み、彼らはいわば財力と権力が表裏一体化した社会で商品化されていくのである。一方の Harold も帝国意識に毒された人々が持つイメージを利用して成功を夢見るが、後に仲間の汚い選挙手腕が明らかになる。結局、Harold もこの帝国意識に翻弄されていたことがわかる。この挫折は Harold が帝国意識を拭いきれなかったことへのネメシスでもあり、*Felix Holt, the Radical* において George Eliot は植民地帰りの男性をエリートとして活躍させる展開を排除したのである。

2．覆される帝国意識

Cranford では Peter Jenkins が帰国してすぐに社会に幸をもたらす一方、本作品の Harold Transome は大きな問題を抱えている。それは冒頭から Transome 夫人が気にしている、彼の“lack of local experience”(Vol.1, Ch.1, 17)である。George Eliot は「植民地帰り」の人が当然抱えるべきこの現実的な問題を本作品に盛り込み、イギリス社会に復帰する際の壁として捉えている。そもそもラディカルからの出馬表明は、Harold がトーリー党とホイッグ党に分けられる町の時流に乗れていない端的な証拠である。伯父は“a Radical will affect your position here, and the position of your family.”(Vol.1, Ch.2, 34)と話して、彼の経歴や将来性、そして親族の立場に傷がつく可能性を説く。Harold の帝国意識はここでも影響し、彼は一人で息巻いて、誰の指図も受けないとばかりに、“I must be

master of my own actions.”（35）と発言する。伯父が放つ“disgrace”（34）という言葉を見れば、彼の選択がいかに突飛なことか明白であろう。

Harold は町の時流から逸脱したまま、“master of my own actions”になるどころか、他者との関係でも“master”になろうとする。彼が連れ帰った付き人 Dominic と一人息子の Harry は、彼のエリート像を構築するのに欠かせない存在であるが、この二人には「帰属なき者」という共通項がある。Dominic は人種と国籍が不明な人物であり、また Harry は“little gypsy of a son”（Vol.2, Ch.19, 172）や“his gypsy-eyed boy”（Vol.3, Ch.38, 303）と表象されている。George Eliot はわざわざ両者にこのような属性を付与し、その上で彼らを Harold の支配力が及ぶ範囲内に置く。これにより彼らは単なる雇用者・非雇用者、父・子という権力関係を越えて、イギリス人である Harold とその彼に恩恵を負うイギリス人でない者たちという関係性を持っている。彼らにわざわざ付与されている「帰属なき者」という属性から、Harold は彼らを無理やりイギリスに連れ込んだのではないという George Eliot の弁解を読み取るべきか、あるいはイギリス人である Harold には彼らを保護するだけの影響力があるという George Eliot の無意識の帝国意識を読み取るべきか、非常に判断が難しい。ただ Harold の帰国に伴って注目すべきことは、彼の帰国が次第に侵略行為と重なっていくこと、しかも連れ帰った二人をイギリス化（Anglicisation）してさらなる支配下に置くのではなく、むしろ権力の矛先が Transome 邸に向けられていることにある。

Harold が入り込む Transome 邸は、Transome 夫人に“every little sign of power”（Vol.1, Ch.1, 28）や“virtue of acknowledged superiority”（17）が与えられている。また彼女には“master”（Introduction, 10）や“empress”（Vol.1, Ch.1, 26）という称号が与えられており、虫（“a distracted insect”, Vol.1, Ch.1, 20）に例えられる夫と比べれば、家庭内の権力関係は明らかである。George Eliot の後期作品では、男性が外で帝国の領土を広げていた頃、女性は帝国に見立てた家庭で女王となって君臨するという姿が多く描かれている。先に挙げた Transome 夫人に加えて、牧師の娘である Esther Lyon は Malthouse Yard の“Queen Esther”（Vol. 1, Ch.6, 66）と形容されるし、第四章で扱う *Daniel Deronda* では Gwendolen の家が“Gwendolen’s domestic empire”（Bk.1, Ch.4, 32）と言い表され、失った家を取り戻そうとする決心は“winning empire”（Bk.1, Ch.6, 52）と大

仰に表現される。*Middlemarch*（1871-72）の場合は、Casaubon との結婚生活で家庭の女王になれなかった Dorothea が社会改革に乗り出して、“a little colony”（Bk.6, Ch.55, 517）という名の労働者設備を建設し、そこを治めようと奔走する。これらの小さな帝国では、女性たちがもはや家庭の天使として収まることはなく、権力を携えた女王と化している。さらに本作品に限って言えば、Transome 邸も Lyon 邸も親子関係に関する秘密を抱えた不穏な空間として表象され、家庭が安全で快適な場所だという安全神話は崩壊している。

Harold は選挙暴動によって Transome 邸に正式な所有者が存在していたこと、そしてその人物の死亡に伴って Esther に正式な所有権が譲渡されることを知る。西洋の女性に興味を示すことがなかった Harold だが、Transome 邸の所有権を守るために Esther との結婚を最後の砦と考えるようになる。当初、彼女は自分の立場を単に“heiress”（Vol.3, Ch.38, 306）と言い表していたのだが、次第に Harold が発する“you are empress of your own fortunes”（Vol.3, Ch.40, 323）という言葉に魅了されていく。その気になった Esther は、“I don’t know what to do with my empire.”（323）と答えながら、夢の世界が目の前にあることに酔いしれる。しかし Esther がこの帝国を Harold から奪い取ることはない。

> Esther found it impossible to read in these days; her life was a book which she seemed herself to be constructing—trying to make character clear before her, and looking into the ways of destiny.
>
> The active Harold had almost always something definite to propose by way of filling the time: if it were fine, she must walk out with him and see the grounds; and when the snow melted and it was no longer slippery, she must get on horseback and learn to ride. If they stayed indoors, she must learn to play at billiards, or she must go over the house and see the pictures he had had hung anew, or the costumes he had brought from the East, or come into his study and look at the map of the estate, and hear what—if it had remained in his family—he had intended to do in every corner of it in order to make the most of its capabilities.（320-21）

Esther には必ず“must”という助動詞が付きまとう。気候や場所に合わせた選択肢が用意されているようだが、彼女はHaroldから自由になりきれていない。室内には彼が持ち帰った東洋の品があり、Haroldにとって都合が良い空間にするために図面をのぞきこむ行為など、あらゆる行動が Harold を基点にして行われる。Esther は Transome 邸の正式な相続人として認められているが、それでも彼女は Harold の権力に彩られた領域にいるため、Transome 邸は Esther の帝国とは言えない。また後に彼女は Harold が奴隷貿易にも手を染めていたことを知り、Transome 帝国の女王としての地位や財産、そして名誉を放棄してでも家柄や階級で劣る Felix を選ぶ。Esther が階級や家柄によらない家庭に入ることを選んだ瞬間、Harold の権威は失墜し、彼の敗北が決定的となる。

3. Felix と Esther の結婚—ヘゲモニーの終焉

George Eliot は 1865 年 6 月 22 日に、出版社に宛てた手紙の中で本作品の執筆方針について、“I am going doggedly to work at my novel, seeing what determination can do in the face of despair.”（*Letter* IV: 197）と述べている。政治状況そのものよりも、混乱の中に生きる人を描くことに重点が置かれていたことを考えると、“there is no private life which has not been determined by a wider public life”（Vol.1, Ch.3, 43）と話す本作品の語り手は、George Eliot の分身とも言えるかもしれない。語り手の主張どおり、本作品では公私の影響関係が顕著に描かれている。例えば、選挙暴動が個人の生活を大きく左右しているし、首謀者の嫌疑をかけられた Felix の逮捕や、Transome 邸の後継者（Tommy Trausem）が暴動の最中に死亡したことで、物語の流れが大きく変わっていく。しかし本作品では個人の生活は必ずしも公的出来事によってマイナスの影響を受けていない。そのことは暴動で Transome 邸の所有権が Esther に移ること、Felix の無実を訴えるために行動する中で Esther と Felix が互いの愛を確認しあうこと、そして物語が Esther と Felix のハッピーエンドに収束していくことで明らかである。

Ruth Bernard Yeazell は政治小説に社会的混乱と恋愛問題が同居する理由について、“only to take refuge at critical moments in the representation of female innocence, exchanging a politically dangerous man for a sexually

unaggressive young woman, and a narrative that threatens drastic change for one that proves reassuringly static. [. . .] Social and political anxieties are contained—and erased—in the narrative of such a courtship.”（Yeazell 127）と説明する。Yeazell は政治小説でありながら、政治をきちんと論じようとしない点に物足りなさを感じながらも、ストーリーの中にあるメリハリについては評価している。その証拠に本作品では、大きな変革に揺れる物語に男女の恋愛を織り交ぜることで、ストーリーには静と動の切り替えが生じている。例えば Harold の場合、“[he] regarded women as slight things, but he was fond of slight things in the intervals of business”（Vol.3, Ch.41, 149）で明らかになり、同様に Felix の場合は Esther との愛を確認し合う場面が暴動と暴動にはさまれた 32 章に用意されている。これに加えて Eliot が本作品の中で男女の領域を分けたという点も見過ごせない。Bonnie Zimmerman もこの点を指摘しており、“The election concerns the business of men—politics, money and social reform—and consequently the women retreat”（Zimmerman 447）と述べている。男性が政治、金銭、社会改革の領域に属しているのに対して、女性は明らかにその領域からはじかれている。Zimmerman は明記していないが、彼女たちの領域は家庭や家庭経営に限られている。しかし Esther の場合、彼女と Harold の関係において家庭経営を牛耳るのは Harold であるため、Esther は Transome 家の財産、エリート男性の妻という身分、そして Transome 邸の所有権を捨ててでも Felix と生きる道を選ぶ。

もう一つ重要なことは、Esther が憧れ続けた東洋と決別する点であろう。Byron の *The Giaour* を読みふけっていた彼女は、Byron に起因するオリエンタリズムを Harold に見出し、彼を理想化していた。しかし女奴隷と Harold の間に生まれた Harry の存在に Esther は幻滅し、空想の源泉とも言えた Byron の本に対する情熱は一気に冷めてしまう。Alicia Carroll は Harry の存在を、Transome 邸の純粋なイギリスの血筋が途絶えた証拠とし、本作品には“an almost overdetermined anxiety over the ‘dilution’ of blood and fusion of races.”（Carroll 78）があると述べる。その意味で考えると、Esther が東西と接点を持つ Harold ではなく、pure-English の Felix を選んだ点は興味深い。ただ、Esther が Felix を選んだ理由は、彼女が Harold の支配下に置かれる可能性に抵抗を示したこと、そして Esther が言う、“I never knew what nobleness of character really was before I

knew Felix Holt.”(Vol.3, Ch.43, 349)から、彼女の中で Felix こそが真の気高さ(nobleness)を体現した人だという確信があった点によるところが大きい。

Felix はグラスゴー大学で医者になるための学識を積んでいたものの、職人として社会貢献を果たそうと時計職人に弟子入りする。労働者を選挙活動の道具として操る Harold とは対照的に Felix は、“I have the blood of a line of handicraftsmen in my veins, and I want to stand up for the lot of the handicraftsman as a good lot”(Vol.2, Ch.27, 223)と話して、常に労働者の目線に立って寄り添う。教育を重要視する彼は、仕事の合間に少年たちに読み書きを教え、またパブを教育の場として利用する計画に思いをめぐらす。結婚を決めた Felix と Esther は一方がもう一方の家庭に入るという形の結婚生活をとらず、帝国意識が蔓延する Treby Magna を離れて町の外で新居を構える。

新しい生活を始めるにあたって、Felix は上流社会の洗練された容姿や振る舞いをひけらかすフランス系の Esther に、自分と同じ生活ができるかを問う。Felix が思い描く生活は裕福さと無縁で、Esther を楽しませるバラの香水も巻き毛も存在しない。Felix はそのことをひとつひとつ Esther に説きながら、彼流のイギリス化(Anglicisation)を図る。彼はこれを労働者教育の延長線上に据えて使命感をみなぎらせるが、事は彼の思い通りに進まない。Esther は Felix が図書館を建てて、イギリスの労働者を教育するつもりであると告げられると、つんと澄まして、“I shall improve your French accent.”(Vol.3, Ch.51, 396)とやり込める。Alicia Carroll が述べた通り、Esther は pure-English である Felix を選んだが、彼女は決して pure-English な生き方を享受することがない。Esther が Felix のイギリス化計画をかわしたここに、イギリスの文化的ヘゲモニーの終焉を読み取ることができよう。

結論

本章では *Felix Holt, the Radical* における帝国意識を中心に取り上げた。この帝国意識は実際に植民地に行ったことがあるかどうかに関わらず、多くの人によって共有される感覚であった。イギリス人の優位性を信じて疑わない人たちは、帰国した Harold Transome に大きな期待を寄せ、Harold 自身もそのイメージを利用して本国でのさらなる成功を夢見る。しかし彼の場合、現地で培った優越感が

災いして成功をつかむことができない。この点は第二章で扱った短編“Brother Jacob”でも見られた感覚であり、George Eliot は植民地、あるいはそれに準じる土地からの帰国者を道徳的な人物として描くことがない。

本作品と“Brother Jacob”との大きな違いは、帰国を待ちわびる Harold の母が彼の“lack of local experience”を案じている点であろう。帰国してからの生活を案じる母の姿は、Thornton を案じる George Eliot の姿と重なる部分がある。本作品が書かれていた頃、彼女はナタールにいる Thornton のことを心配している頃であったが、植民地移住者には現地でのリスクだけでなく、帰国してからの生活にも苦労が絶えなかったはずである。おそらく George Eliot はこの点に気づいていたため、*Cranford* に登場した Peter Jenkyns のように輝かしい帰国を遂げる人に異を唱えて、彼とは異なる人物を描き出したのであろう。その上でイギリスの人々が持つ帝国意識を暴き、その横暴な態度を捨てきれない人物にはネメシスを用意した。

国内にとどまっていた Esther の場合は、後に Harold がちらつかせる権力をまやかしだと見抜き、それまで依拠してきたオリエンタリズムと決別している。その上で彼女が選んだのは、国内での労働に従事する Felix であった。George Eliot は「植民地帰り」という経歴と人間的な気高さを明確に切り離して、国内で労働に勤しむ人に肩入れした形跡がある。ただしこの場合、国内で培った価値観だけを称揚したり、あるいは pure-English を汚す恐れがあるものを排除しようとした意図は見いだせない。その点は Felix が Esther を教化しようとして失敗した箇所で明らかだ。George Eliot は本作品から、徐々に文化的混淆を作品内に取り入れており、多様な社会を描く方向に進みつつある。この点が“Brother Jacob”との大きな違いであり、ここに *Daniel Deronda* や *Middlemarch* で扱われる文化的多様性の萌芽を見出すことができる。

第四章
光を失った帝国のディスコースと皮肉なギャンブル
Daniel Deronda の Gwendolen を中心にして

序論

George Eliot の作品には、国外、特に植民地、あるいはそれに準じる土地を往来する主人公が三人登場する。一人目は“Brother Jacob”(1864)の主人公 David Faux で、二人目は *Felix Holt, the Radical*(1866)の Harold Transome、そして三人目が本章で扱う *Daniel Deronda*(1876)の Henleigh Mallinger Grandcourt である。[1] 第二章で扱った David Faux はジャマイカから、一方、第三章で扱った Harold Transome はスミルナから帰国し、それぞれ「植民地帰り」という肩書きで住民たちを操ろうとする。どちらの作品においても、George Eliot は遠方から帰った自国民を比較的ネガティブに描いており、田舎の人々が帰国者に安易な幻想を抱く様子を揶揄する点も特徴的である。

“Brother Jacob”と *Felix Holt, the Radical* の設定時期から、およそ三十年が経過したイギリスが *Daniel Deronda* の物語世界である。この作品は Gwendolen Harleth と大富豪 Henleigh Mallinger Grandcourt をめぐるイギリスのプロットと、Daniel、Mordecai、Mirah を中心にしたユダヤのプロットから成る。先に挙げた二作品では、外から帰った人に根拠のない成功を読み取る住民の姿が印象的であったが、本作品の場合は状況が異なっている。そもそも本作品で George Eliot が描く大英帝国の姿が、大きく様変わりしているのである。本稿では *Daniel Deronda* に描かれるイギリスのプロットに注目して帝国意識の問題や大英帝国の特徴を考察し、先に挙げた二作品との相違について論じていく。

---

[1] 主人公クラスで植民地に行く人物としては、*Adam Bede*(1859)の Hetty Sorrel も同様である。ただし彼女は“[she is]transported o’er the seas”(Ch.48, 463)と言及され、Arthur Donnithorne との子どもを殺したことで、流刑のためにオーストラリアの Botany Bay に移送される。彼女と植民地の関係は、David、Harold そして Grandcourt の場合と事情が異なるため、本章では議論の対象からはずしている。

1. 金の出自と資金繰り

Daniel Deronda はユダヤ人の少女 Mirah がテムズ川で入水自殺を図る 1864 年の 7 月から、主人公の Daniel が Mirah とともに東洋に旅立つ 66 年 10 月の約 2 年間を描いた作品である。George Eliot はこの作品で唯一、「途中から始まる形式」(in medias res)を採用して、時間軸にそって話を進めたり、あるいはフラッシュバックで Gwendolen や Daniel の過去にさかのぼったりと、一方向に流れる伝統的な語りのスタイルから脱却している。[2] また本作品の場合、奇抜なのは語りの手法だけではない。時間軸の「途中」にあたるのは 1865 年 9 月、Gwendolen がドイツでギャンブルに興じている姿を Daniel Deronda が目撃するところで始まる。当時、女性がギャンブルに手を出すことなど考えられない時代であったため、Daniel は彼女の目つきを見るなりそのまなざしに悪が宿っていると考え、Gwendolen にもギャンブルにも寛容になれない。

ドイツのギャンブル会場で人々の視線を集める Gwendolen は、所持金を金貨数枚(a few napoleons)から金貨 10 枚(ten Louis)に増やす。[3] 彼女に付き添っていた人たちはそのお金を本国イギリスに持ち帰るようにと説得するが、結局彼女はさらなる賭けで全額を失ってしまう。一見すると彼女は運に見放され、"Gwendolen's personal get-rich-scheme"(Linehan 329)は失敗に終わったように思える。しかし、彼女がギャンブルに手を出した目的は賞金を獲得することではなかったようだ。そのことは例えば、"she cared for the excitement of play, not the winnings"や"her eager experience of gambling"(Bk.1, Ch.1, 6)、また"not because of passion, but in search of it"(Bk.1, Ch.2, 12)などで顕著に表れている。彼女にとって重要なのは賞金の額よりも、勝つか、負けるかという興奮と娯楽性だったのである。この点から考えると、ヴィクトリア朝とギャンブルの関係を論じ

---

[2] John Rignall は *Oxford Companion to George Eliot* の中で、*Daniel Deronda* の特徴として全 70 章の各章にエピグラフが使われていること、その時点ではまだ正体がはっきりしない人物の内面に入り込んでいくこと、そして時間軸の前後移動があることを述べ、特にこの三つ目の特徴について、"a willingness to experiment with narrative forms other than the straightforward chronology common to realism."(84)と述べている。リアリズム小説の典型ともいえる一方向の語りを脱却した本作品は、多くの点で奇抜な作品だったといえる。

[3] *Daniel Deronda* 6. 以下、本論文での引用は、Eliot, George. *Daniel Deronda*. Ed. Graham Handley. New York: Oxford UP, 1998.によるものとし、引用の際には必要に応じて、本文中の括弧内に巻、章、頁数を記す。

た Jodi Wagner の説明が本作品でのギャンブルの本質を言い当てている。Wagner は Jean Baudrillard（1929-2007）の「シミュレーション理論」に言及しながら、ヴィクトリア朝期のギャンブルには「不確かさ」と「自信」という、二つのメタファーがあることを指摘している。そのうえで Wagner は、“They bet because of the thrill and excitement of the game; they bet to escape the dreary life of their reality; and some realize that the skill with which one plays can be valuable in real life.”（Wagner 96）と続ける。この時の Gwendolen は自分が賭けに勝ち続けることでギャンブル会場に興奮を巻き起こしていることに気づき、優越感に浸る。彼女はさらに、“why should not a woman have a like supremacy?”（Bk.1, Ch.1, 6）とつぶやき、ギャンブルの世界には男女の優劣関係が介在しないことに満足をおぼえる。

先に述べたとおり、興奮と娯楽性を優先させた Gwendolen は賭けに負けて、全額を失うが、そもそもここで彼女が失ったお金はどこから来たものなのだろうか。かつて Edward Said は *Culture and Imperialism* の中で、Jane Austen の *Mansfield Park*（1814）にあらわれる海外（特にアンティグア）への言及に注目し、そのわずかな言及に Austen がどのような意味を持たせ、それをどう読むべきかに力を注ぐべきだと述べた（Said 1993: 89）。Said は 19 世紀半ば以降に顕著になる植民地問題が早くも Austen の作品にもあらわれており、しかも荘園所有者が国内領地だけでなく植民地をも統治する能力を持っている点に注目している。[4] 本章でも Gwendolen 一家が失った金の出自を探り、破産の原因とその打開策、また植民地表象が“Brother Jacob”や *Felix Holt, the Radical* からどのように変容したのか考えたい。

本作品の冒頭において、Gwendolen の母方の祖父が西インド諸島にプランテーションを持っていたことがほのめかされている（Bk.1, Ch.3, 17）。母も娘も“the conditions of colonial property and banking”（Bk.1, Ch.6, 51）の詳細を把握している様子はなく、ましてや直接その目で確かめたことはない。唯一明らかにされるのはそのプランテーションがバルバドスにあったこと（Bk.4, Ch.29, 279）くらいで、それ以上の詳細は述べられない。祖父が亡くなってからの財産の行方につい

[4] Said の *Mansfield Park* 論については、“Jane Austen and Empire,” *Culture and Imperialism*. 80-110.を参照した。

ては、母の手紙で“All the property our poor father saved for us goes to pay the liabilities.”と知らされ、これに続けて破産の原因が“Grapnell and Co. have failed for a million and we are totally ruined.”（Bk.1, Ch.2, 10）と明かされていく。[5] 祖父がこしらえた財産はしばらく銀行に預けられていたが、母はGwendolenに相談することもなくGrapnell社に委託して投資にあてたようだ。その投資先について母は、“There were great speculations: he [Mr Lassmann] meant to gain. It was all about mines and things of that sort. He risked too much.”（Bk. 3, Ch.21, 199）と説明する。つまり破産の原因は母が祖父の財産を元手に「鉱山投資」に乗り出して失敗したことにあるのだ。

第二章で“Brother Jacob”を論じた際に、J. S. Millの *Principles of Political Economy* を挙げながら、イギリスにおける西インド諸島について述べたように、当時の植民地はイギリスの資金源にしか過ぎなかった。この格付けはイギリスの優位性を信じ込む帝国意識に根ざしたもので、例えば“Brother Jacob”の David Faux がこれと同質の意識をあらわにする。植民地に旅立つ前に彼は、“the most propitious destination for an emigrant who, to begin with, had the broad and easily recognisable merit of whiteness”（47）と根拠のない優越感を見せつけて、自分が尊敬の対象になることを信じて疑わない。ところが *Daniel Deronda* の物語世界、もしくは Gwendolen のプロットに限った場合、植民地は便利な土地でもなければ、重要な資金源としても位置づけられていない。というのも祖父が死亡して以降、親族の誰かがこのプランテーションを引き継いだ形跡はなく、Gwendolenの家系はもはや不在農場主としてでさえ権力を維持していない。そのため“slave owner”としての一家の地位はすでに消滅しており、本作品では植民地からもたらされるはずの財政的な支援が途絶えてしまっている。[6] “Brother Jacob”や *Felix*

---

[5] 「四つ爪のついた錨」を意味するGrapnell社は唯一、*Daniel Deronda* に登場する架空の会社である。George Eliotは本作品の執筆に際して膨大なメモを残しており、1866 年の出来事に“Commercial Panic. May, Overend&Gurney”（*Notebook* Pf711, 96a）を挙げている。本作中にある“the last commercial panic”（Bk.6, Ch.48, 499）はおそらく 1866 年に倒産した Overend&Gurney のことを指すものと思われる。George Eliotはこの社名をGrapnellに変えて、本作に取り入れたのであろう。

[6] Gwendolenの父方の祖父がプランテーション経営者として描写される点について、*Notebook* の編者 Jane Irwin は“GE lets the reader know that he was a slave-owner in the West Indies.”（Irwin 352）とコメントをしている。プランテーションと奴隷を分けて考えることは難しかった背景を考えると、Eliot にとってプランテーション経営者と“slave-owner”はほぼイコールで結ばれる関係であった。

Holt, the Radical では海外に対して金銭的な期待が見え隠れしていたが、*Daniel Deronda* ではその望みが完全に消されており、海外（特に植民地）を資金源とすることに限界がきている。

経済的な問題を回復させるため Gwendolen は当初、牧師の娘の家庭教師として働くことを考える（Bk.3, Ch.23, 225）。しかし結局、彼女は Grandcourt と結婚することで一家が経済的困窮から抜け出せる可能性に賭ける。一時は彼の隠し子騒動に心底参ってしまうが、彼女にとって Grandcourt の最大の魅力は屋敷（Diplow Hall）の次期相続人であること、そして妻にも利益がもたらされること（“his wife would share the title”, Bk.1, Ch.9, 76）の二点であろう。そのために Gwendolen は正妻としての身分を重視し、Grandcourt との結婚に踏み切る。*Daniel Deronda* において一家はただ単に貧乏になったのではなく、経済的な期待が「祖父の代から受け継がれた植民地財産」から、一種のギャンブルともいえる「鉱山投資」に変わり、最終的には「国内で代々受け継がれてきた荘園」へと価値転換していく。植民地を財源として位置づける設定は取られておらず、Gwendolen 一家のお金には国外とのつながりが見えなくなる。財源として頼るべきところが国外から国内へと方向転換している点で、本作品は “Brother Jacob”や *Felix Holt, the Radical* における植民地の位置づけと一線を画しているといえるだろう。

2．ムチと馬：Gwendolen の結婚にたちこめる暗雲

Grandcourt は当初、Quetcham 屋敷の相続人 Miss Arrowpoint と婚約することを望んでいたようだが（Bk.1, Ch.9, 77）、Gwendolen に魅了されて彼女に狙いを定める。二人の仲は第 9 章から 13 章にかけて発展し、第 27 章で婚約に至るが、そのいきさつはこうだ。アーチェリー大会で初対面を果たした Grandcourt と Gwendolen は、その日の夜、ダンスパーティで再会し二人きりになる。二週間後、彼の誘いに応じた Gwendolen は二人で馬の遠乗りに出かける。彼女は Grandcourt を結婚相手として大いに意識しているものの、いざ迫られるとしり込みしてしまう。煮え切らない態度の Gwendolen だったが、牧師で伯父の Sir Gascoigne にたしなめられて（Bk.2, Ch.14, 119）、ついに Grandcourt のプロポーズを受けて、正式に婚約する。

一見するとロマンチックなエピソードだが、細かな点に不幸へのきざしが散りばめられている。注目したい小道具の一つは、彼らが馬の遠乗りに出かける場面に見つけられる。曖昧な態度を取り続ける Gwendolen は Grandcourt に迫られたときに、返答を逃れようと手にしていたものを落として、その場をしのぐ。それが Gwendolen のムチである。乗馬に出かけることを考慮に入れれば、この場面にムチが描かれても何の違和感もない。だが、ムチのエピソードがここだけに限られていないことを考えると、Eliot は選んだ小道具に大きな意味づけをしているといえるだろう。ムチは Grandcourt と Gwendolen の結婚式の場面にも出てくる。暇を持て余した招待客は、ある男性の噂話に花を咲かせている。どうやらこの男性は妻に暴力をふるっているようで、ムチでたたくのが常らしい。それに妻が「口撃」で応戦すると、怒った夫がさらにムチを打ち、喧嘩はますますひどくなるのだそうだ。ここで主役の新郎新婦が登場し、我にかえった招待客の一人が、結婚式会場でこんな話をするのはまずいと発言する。ところが招待客は話をやめるどころか、口達者な Gwendolen に対抗しようと Grandcourt に関して、“he’s the more whips, I doubt.”（Bk.4, Ch.31, 299）と述べて冗談を飛ばす。二人の結婚生活にも主従関係の隠喩が用いられ始め、主導権を奪われた Gwendolen の様子は“the cord which united her with this lover and which she had hitherto held by the hand, was now being flung over her neck”（299）と描写される。

ムチに加えてもう一つ注目したいのが、プロポーズの日に Grandcourt が乗ってくる馬である。彼が乗る黒い馬には Yarico という独特な名前がついている（Bk.3, Ch.27, 251）。本作品中ではわずか一度しか言及されず、Oxford 版 *Daniel Deronda* にも Penguin 版にも注はつけられていない。だが実はこれは“Brother Jacob”ですでに使われた名前で、帝国意識を検討する際には重要な意味がある。この名前は Richard Ligon の *A True and Exact History of the Island of Barbados*（1675）を原典とするもので、イギリス人男性が乗った船が西インド諸島で座礁し、それを原住民少女の Yarico が助けるという話に由来する。手厚く介抱してもらったものの、男性は仲間と合流するや否やこの少女を裏切り、“the youth . . . forgot the kindness of the poor maid . . . and sold her for a slave”（Ligon 107）と残酷な態度をとる。この部分に影響を受けた Richard Steel はこの男性に Thomas Inkle という名前をつけ、結末の部分では Yarico が Thomas の

子どもを宿しているという設定を加えて“Inkle and Yarico”（1711）を *The Spectator* に発表する。[7] George Eliot は“Brother Jacob”の中でジャマイカに行く前に、主人公が現地での厚遇を信じ切っている様子を“It was probable that some Princess Yarico would want him to marry her, and make him presents of large jewels beforehand.”（53）として描き出して、彼の挫折と関連づけている。*Daniel Deronda* に話を戻して考えると、Grandcourt は「植民地」と「女性」という二つの点で虐げられた Yarico の名前を馬につけて乗り、それを御しているのである。これら二つの小道具はGwendolenの結婚後の人生への伏線となっているが、同時に Grandcourt の暴力性とも関連づけられている。

Grandcourt に付随する暴力性は、彼の経歴とも関わっている。ダンスパーティの夜、彼は Gwendolen と二人きりで話す機会を得るが、口下手で快活さに欠ける彼のせいであまり話が盛り上がらない。この日はアーチェリー大会が行われたこともあって、二人は弓や馬を話題にする。乗馬が好きな Gwendolen は世間一般の生活では満足できず、それを察した Grandcourt は初めて彼の方から質問を投げかける。漠然と“Do you like danger?”と聞いた後、彼は“You would perhaps like tiger-hunting or pig-sticking. I saw some of that for a season or two in the East.”（Bk.2, Ch.11, 93）と話し、「東洋」や「狩り」と結びつけられていく。実は、初対面を果たしたこの場面だけでなく、前述したムチ拾いの場面でも“He had hunted the tiger”（Bk.2, Ch.13, 115）という表現が差し込まれており、Gorge Eliot はわざわざ二人のロマンスに関わる箇所で Grandcourt の虎狩りに触れる。そもそも彼が Diplow にやってきた目的は狩りをすることだった（“he comes to Diplow for the hunting”, Bk.1, Ch.9, 76）ことを考えると、Gwendolen が彼の獲物に位置づけられるのはすでに決められたことだったのかもしれない。George Eliot がロマンスに関わる小道具や話題に、Gwendolen の不幸の予兆を忍ばせ

---

[7] “Inkle and Yarico”の変遷については、Oxford 版“Brother Jacob”の注（98n）と、Penguin 版の Introduction（xxxii-xxxvi）および注（95n）を参照した。“Brother Jacob”で主人公の David は、イギリス人の男性が植民地で成功しなかった話を読んで“very sorry for poor Mr Inkle”（46）という感情を持つが、男性に名前がついていることから George Eliot が Steel 版を底本にしたことがわかる。また Steel 版では、Yarico が子どもを宿していることが明かされ、そこで語り手が彼女に同情して涙ながらに部屋を出るところで終わる。George Eliot の場合、植民地での成功を逃した Mr Inkle に肩入れする David を描くことで、彼の精神的な幼稚さや利己主義を強調し、Steel 版との差異を浮き彫りにしている。

たことは明らかである。

3. 最期の旅路

Gwendolen は 12 歳の時に実の父を事故で亡くし(Bk.1, Ch.3, 17)、その後、母の再婚に伴って各地を転々としている。軍人だった継父と九年を過ごした(17)後、その継父の死亡に伴って再びみじめな生活へ戻る(27)。安住の地を得られていない彼女は“princess in exile”(18, 32)や“queen of exile”(Bk.1, Ch.4, 33)と表現され、どこか神々しいイメージが付与されている。一家の長として立ちまわる彼女にとって、家庭は“Gwendolen's domestic empire”(32)と化しており、家政婦は彼女のことを多少からかいながらも “her Royal Highness”(Bk.1, Ch.3, 21)と呼ぶ。結婚が人生のゴールだと考える母(22)や夫の権力下に入ることを容認する妻たち(23)に対して、Gwendolen は自由を奪われることをひどく嫌い(Bk.2, Ch.13, 110-11)、平凡で一般的な生活に抵抗し(Bk.1, Ch.6, 43; Bk.2, Ch.13, 111)、他人に羨望されることを望む(Bk.3, Ch.24, 232)。それと同時に、気の強い彼女は夫に対して従順な態度をとることを嫌い、一方の夫は結婚してから Gwendolen に対して横暴な態度を取り続ける。結婚して彼女が入り込んだ家庭は“her husband's empire of fear”(Bk.5, Ch.35, 364)と描写され、Gwendolen は結婚生活に幸せを感じることができない。

Gwendolen の不満が爆発する極めつけのできごとが新婚旅行中に起こる。Grandcourt はヨットに妻を乗せて先を進むが、ふと望遠鏡を取り出して次の目的地としてある場所へと向かう。それが“a plantation of sugar-canes”(Bk.7, Ch.65, 575)であり、このあたりの描写は冒険家、あるいは植民地開拓者を髣髴とさせる。Gwendolen はしぶしぶ同行を決めるが、その時の様子は、“remembering that she must try and interest herself in sugar-canes as something outside her personal affairs.”(575)と述べられている。新婚旅行の途中にいるはずの Gwendolen は夫との旅行を楽しむのではなく、まるでプランテーション経営に従事しているかのようにふるまうことが求められる。あまり気乗りがしない Gwendolen とあらゆることを独断で決めていく Grandcourt との間には、気持ちのズレが生じ始め、それは次第に大きくなっていく。結婚以来、Grandcourt は Gwendolen に選択の自由や権限を与えることなく、“Only you will please to behave as becomes my

wife.”（Bk.5, Ch.36, 384）とその横暴さを彼女に押しつけていく。“Her husband had a ghostly army at his back, that could close round her wherever she might turn.”（384）という表現から、Gwendolen にとって今や彼は軍を従えた恐怖の対象と化しており、彼女が八方ふさがりの状況に追い込まれていることは容易に察することができる。

新婚旅行の船旅でもやはり、Gwendolen の意見は取り入れられず、夫の計画に従ってフランスのマルセイユに停泊（Bk.6, Ch.48, 522）し、バレアレス諸島を通ってサルデーニャへと進む。コルシカ島のアヤッチオへ渡ったところで船が故障し、仕方なくボートでジェノヴァからスペツィアへと進路を決める。その翌日、Grandcourt は地中海の真ん中で溺死。この時の Gwendolen は夫にロープを投げ渡すことはなく（Bk.7, Ch.56, 596-97）、またこっそりナイフを隠し持っていたことがほのめかされている（592-93）ため、彼女が精神的に限界に来ていたのは明らかであろう。いずれにせよ、Grandcourt はあっけなく旅先で死に、*Daniel Deronda* から消えてしまうのである。なぜ George Eliot は Grandcourt を死に追いやったのか、また彼の財産はその後どこに行くのだろうか。

本章の冒頭で“Brother Jacob”、*Felix Holt, the Radical*、そして *Daniel Deronda* では共通して主人公が国外に向かう点を指摘した。中でも最初の二作品では、人々が植民地こそ経済的な成功を約束する場だと信じている様子、そして主人公たちもその感覚をうまく利用していく様子が顕著である。これら二作品で George Eliot は David Faux にも Harold Transome にも一種のネメシスを用意し、傍若無人に振舞うことを許さなかった。*Daniel Deronda* の Grandcourt の場合を考えると、彼へのネメシスが溺死という形で組み込まれており、他の二人に対するものと比べると結末がかなり手厳しくなっている。そもそも彼が溺死するまでに巡る航路は、19 世紀に工業で栄えたフランスの港湾都市マルセイユを出発点とし、その後、彼が乗る船は 18 世紀以降にフランス、スペイン、イギリスの間で領土争いを広げたバレアレス諸島を経由して、その後、1861 年にイタリア領になったばかりのサルデーニャを通っているのである。George Eliot が詳細に挙げた地名は領土問題が絡む場所であり、Grandcourt はこのような場所に分け入って、そこで溺死しているのである。

夫の死に伴い、Gwendolen は夫の隠し子とその母親との間で財産譲与問題

を抱えることとなる。Grandcourt は *Daniel Deronda* の「現在」からおよそ十年前にアイルランド人大佐の妻だった Lydia Glasher と知り合い、彼女との間に娘三人と息子一人をもうけている。この二人は法に基づいた婚姻関係になく（Bk.3, Ch.27, 253）、Lydia は財産権も要求しなかった（Bk.4, Ch.30, 287）のだが、Gwendolen の存在を知ってから態度を一変させる。Grandcourt の死後、Gwendolen の周囲にいる一部の人たちは、“Any prospect of an heir being born?” “From what Mr Gascoigne said to me, I conclude not.”（Bk.8, Ch.59, 612）という下世話な話を繰り返す。結局、Gwendolen に子どもが誕生する気配はなく、Lydia（正確には長男 Henry）に財産権が移る。

先に挙げた二作品でもやはり、「女性」や「子ども」の問題はつきものとなっている。例えば“Brother Jacob”では、主人公 David は海外で Yarico に出会えず、結局はイギリスの田舎町に入ってきて嫁探しを始める。彼は「植民地帰り」という肩書きでうまく行きそうだったものの結局は失敗しており、一方 *Felix Holt, the Radical* では Harold が海外で女奴隷を買い Harry をもうけている。*Daniel Deronda* の Grandcourt の場合、Yarico という名の馬に乗って Gwendolen にプロポーズしたあの時点で、彼にはすでに性の対象がいたことになる。つまり本作品では Yarico 役が Gwendolen ではなく Lydia になっており、しかもその Lydia が最終的に金銭面で優遇されているのである。Gwendolen には年に 2,000 ポンドの遺産とそれまで Lydia が住んでいた Gadsmere の家が委譲される（Bk.8, Ch.59, 612）が、この場所は“a dog-hutch of a place in a black country”（Bk.6, Ch.44, 473）と表現されるような薄暗くて清潔感に欠けた所である。結局、この家は借家になる可能性が示唆されるが、その相手が“one of the fellows engaged with the coal”（Bk.8, Ch.64, 651）となっており、Gwendolen には母が投資で失敗したあの炭鉱に再び結びつけられるという皮肉が待っていたのである。

すでに述べたが、本作品は Gwendolen がギャンブルに興じる姿を Daniel が目撃する場面で始まっている。このギャンブルに対する一般的なイメージについてもすでに触れたが、Catherine Gallaghar は、いち早く儲けることに価値を置いていた当時、この感覚が蔓延した背景に植民地主義があると説明して“beggar-your-neighbour”（Gallagher 49）と形容して、この個人版こそがギャンブルだと主張する。George Eliot がこの考えにどこまで反応したかは結論がつけがた

いが、Gwendolen の付添い人たちは“the prudent advice to stop at the right moment and carry money back to England”（Bk.1, Ch.1, 6）を口にする。だがGwendolen はその忠告を無視して大金を失い、破産の報せを知って“she would have had a handsome sum to carry home”（Bk.1, Ch.2, 11）と後悔する。George Eliot はここで、ギャンブルに興じる人間の奥底に、単なる娯楽性以上の感情を潜ませている。Gwendolen は Lydia に Grandcourt との結婚を止めるように懇願されながら、結局、彼との結婚に踏み切ったことで良心の呵責にさいなまれ、他人の損から利益を得たことを嘆く。“I wanted to make my gain out of another's loss — you remember? — it was like roulette — and the money burnt into me.”（Bk.7, Ch.56, 593）と Daniel に告白するこの嘆きに、Eliot が Gwendolen に経済的な安定よりも道徳性を残したかった意図が読み取れる。そういえば *Daniel Deronda* の Daniel の父もギャンブルで破滅した（Bk.8, Ch.66, 665）ことを考え合わせると、やはり George Eliot は他人の損から利益を得るという道徳的問題を許すことはできなかったのだろう。

結論

本章では George Eliot が作品の時代を経るにつれて、植民地の描き方に変化を持たせ、それが“Brother Jacob”や *Felix Holt, the Radical* とどのような関係があるのかについて考察した。主人公クラスで植民地に向かう人についてはすでに述べたが、サブキャラクターにもやはり植民地やそれに準じる外の世界と関わりを持つ人たちがいる。例えば本論文の第五章で触れる、*Middlemarch* の John Ruffles は謎と醜聞に満ちており、アメリカで十年生活をしていたらしいことや他人の財産を横取りしたことが述べられる。*Daniel Deronda* では Gwendolen の従兄の Rex Gascoigne が外の世界とかかわりを持とうとする。Gwendolen に想いを寄せていた彼は、失恋の痛手から逃げるためにカナダを目指す。心配した妹は同行を決意するのだが、このあたりの会話が実に突拍子がない。“I will go to Canada, or somewhere of that sort.”（Bk.1, Ch.8, 70）では彼の知識の欠如が明らかとなり、“I should like to build a hut, and work hard at clearing, and have everything wild about me, and a great wide quiet.”（71）や“I should like to go to the colonies and work on the land there.”（72）からは、彼がカナダを未開の

地だと信じ込み、すぐに家を建てて生活できると高をくくっている様子が読み取れる。このような描写はポストコロニアリズムの批評家の批判対象となりやすいものだが、George Eliot は語り手に“Rex had not studied the character of our colonial possessions”(70)という説明を加えさせる。また Rex の決意を聞いた父親が、“a rash and foolish procedure”(71)と息子の幼稚な考えを一蹴して、とにかく勉強しろと突き放す点からも、George Eliot が帝国主義と距離を置いていた証を読み取ることができる。それまでの George Eliot 作品と異なり、*Daniel Deronda* では植民地を財源として位置づける設定が消え、“Brother Jacob”の David や *Felix Holt, the Radical* の Harold の周辺人物たちが抱いていたような、植民地に対する根拠のない夢が共有されない。George Eliot は作品の設定に合わせて、植民地そのものの位置づけを変え、ギャンブルのエピソードを盛り込みながら人間の道徳性を重んじる作品を作り上げたと結論づけたい。

第五章
選挙の裏で
Middlemarch におけるコスモポリタンの素養

序論

1871 年 12 月から隔月で発表された *Middlemarch* は、1829 年 9 月 30 日から1832 年 5 月までを描いた長編小説である。この時代背景で取り扱われるのは、公的レベルでいえば、カトリック解放（Catholic Emmancipation Act, 1829）から選挙法改正法案が否決されるまでのことであり、それに伴う Tory から Whig への政権交代の混乱ぶりも登場人物たちの会話から窺い知れる。一方、私的レベルでいえば、物語は女主人公 Dorothea Brooke が妹の Celia と母の形見分けをするところで始まり、Dorothea が Will Ladislaw と再婚するところで終わる。本作品の Prelude で言及される Saint Theresa は野心と憧れを持ちながらも、偏狭な社会とジェンダーの規範に潰された女性の代名詞であるが、これが次第に Dorothea に重なっていく。その点からも、本作品は政治的な変化が著しかった時代における Dorothea の物語として理解されるのが、一般的な反応であろう。[1]

本作品の時代設定は第一次選挙法改正を目前にした頃であり、これは *Felix Holt, the Radical*（1866）と“Brother Jacob”（1864）の時代設定にはさまれる。そのため、これら二つの作品と同様に本作品でも植民地主義や帝国意識に関する読みが期待できそうだが、実際は植民地、あるいはそれに準じる土地の影が薄い。主要人物たちとこのような土地との関係が希薄で、イギリス、あるいはミドルマーチ

[1] 分冊本が出ると、新聞や雑誌では *Middlemarch* への評価が次々と掲載されていく。それは比較的称賛の声が多いが、その中にも賛否両論がある。例えば、R. H. Hutton は 1872 年の *The Spectator* で、“the action is slow [and] there is too much parade of science and especially physiological knowledge”と前置きをしたうえで、“*Middlemarch* bids more than fair to be one of the great books of the world”と評価する（*Critical Heritage* 302）。Sidney Colvin の場合は *Fortnightly Review* で、本作品を“chief English book of the immediate present”（*Critical Heritage* 331）と呼びながらも、志が高い Dorothea が Casaubon と愚かな結婚をし、Will と再婚するという結末に、“we have been made to feel all along that he is hardly worthy of her”（*Her Readers* 105）と述べている。

に移り住む目的が必ずしも悪く描かれることがない。さらに言えば、本作品での「外」は先の作品のように植民地を意味せず、またイギリス国外よりもイギリス国内に価値が置かれる構図が顕著である。序章で述べた通り、本作品の執筆当時、George Eliot はナタールに送り出した Thornton Lewes を亡くしているため、George Eliot の価値観が「国外」よりも「国内」に向いたのには、Thornton の死が一因になっている可能性は否定できない。

George Eliot の後期四作品は時代設定と地理において、前期四作品よりも広がりがあり、[2] それに合わせて彼女は作品の中で“cosmopolitan”という語を使用し始めている。*OED* は“cosmopolitan”を（一）一国家にしばられない全世界的な、（二）国境を越えていくつかの国と接点を持った、（三）世界中に分布している、（四）いろいろな国から来た人たちから成る、という四つの定義を示している。[3] ヴィクトリア朝期の“cosmopolitan”、あるいは“cosmopolitanism”には両義性があり、侮蔑の目的で使う作家がいる一方、「国境も敵も持たない」（no boundaries and no enemies）という肯定的な意味で使われる場合もあった。[4] *Middlemarch* における“cosmopolitan”の使用は、Mr Brooke の“Certainly a man can only be cosmopolitan up to a certain point.”[5] の一例のみである。George Eliot は

---

[2] *Romola* は 15 世紀のイタリアを舞台としており、*Felix Holt, the Radical* はスミルナとの接点が描かれる。しかもその接点は現地で女奴隷との間にもうけた一人息子を連れ帰ってきたことによって、永続的な接点となっている。また本章で扱う *Middlemarch* にはイタリア旅行が含まれ、*Daniel Deronda* の場合は結末で主人公が東洋へと向かう。これらの主要な後期四作品に加えて、*The Spanish Gypsy* では 15 世紀のスペインが舞台になっており、やはり時代と地理の面で大掛かりな作品となっている。

[3] *OED* での記述は以下の通りである。“1. Belonging to all parts of the world; not restricted to any one country or its inhabitants. 2. Having the characteristics which arise from, or are suited to, a range over many different countries; free from national limitations or attachments. 3. *Natural Hist.* Widely diffused over the globe; found in all or many countries. 4. Composed of people from many different countries.”

[4] この点については Agathocleous, Tanya and Jason R. Ruby. “Victorian Cosmopolitanisms: Introduction.” *Victorian Literature and Culture*, 38 (2010): 389-97. を参照した。ここでは J. S. Mill や Dickens、Conrad、Henry James らが“cosmopolitan”を「禁欲」や「道徳的退廃」と同義に使っていた一方、*Cosmopolitan Review*（1861）、*Cosmopolitan*（1865-76）、あるいは *Cosmopolitan Critic and Controversialist*（1876-77）といった視点の広い雑誌が発行されていたことが説明されている。

[5] *Middlemarch* 50. 本論文での引用は、Eliot, George. *Middlemarch*. Ed. David Carroll. New York: Oxford UP, 1998.によるものとし、引用の際には必要に応じて、本文中の括弧内に巻、章、頁数を記す。

“cosmopolitan”をあからさまに使用することは少なかったが、本作品では物語の背景にこの概念を忍ばせ、これに「外」との接点に関する登場人物たちの反応を組み合わせている。本作品は植民地や帝国意識に対する記述が少ないものの、この“cosmopolitan”の概念に注目することで、帝国主義に対する George Eliot の態度を読み取ることは可能である。本論ではまず、“cosmopolitan”という概念でつながる三人の男たちを考察し、「外」よりも「内」に、言い換えればイギリスの国外よりもむしろイギリス国内の改革に力点が置かれる様子を読み取っていく。

1. つながり合う三人の男たち

物語の中盤で語り手は、*Middlemarch* の時代背景について、“railways were as exciting a topic as the Reform Bill or the imminent horrors of Cholera.”（Bk.6, Ch.56, 519）と述べる。*Middlemarch* は選挙法改正に揺れる田舎社会を描いたものだが、George Eliot は同時に、鉄道とコレラをこの時代の特徴として挙げている。特にこのコレラを組み込む案は、執筆当初から彼女の念頭にあったはずである。というのも、本作品はそもそも Dorothea を主人公にして作られた話ではないからだ。George Eliot は 1869 年 1 月 1 日の日記で新作“A Novel called Middlemarch”（*Journals* 134）に向けて動き始めていることに触れており、同年 9 月 21 日には病院の調査をしたこと、それが“my hero”に必要であること（*Journals* 138）を記している。つまり、本来の *Middlemarch* は Lydgate を主人公とした話であり、彼が医者として田舎で奮闘するという筋書きは、初めから決まっていたのである。

Norton 版の *Middlemarch* の註に、編者 Bert G. Hornback は George Eliot がフィクションと現実との間に整合性を持たせるべく、注意深くプロットを組み立てていた努力の跡を収録している。彼女が主に参照した資料は医学雑誌の *Lancet* で、Norton 版の“Quarry for *Middlemarch*”（607-642）にはそのメモが多数、引用されている。それによると、コレラ発生の第一報は 1818 年の“our Indian possession”（*Lancet* 241）で、1832 年 3 月末のロンドンでは、コレラによる死者数が 800 名を超えている（Norton 2nd ed., 543）。George Eliot が参照したはずの 1831 年 11 月 19 日号の *Lancet* にはコレラがもたらす状況について、“[C]ivilised nations [could be] changed to savage hordes, and in short, when it exceeds a

certain point, all grades and bounds of social organisation disappear”（*Lancet* 241）と記されている。“Indian Disease”（*Lancet* 242）とも形容されるコレラが人の往来に合わせて次第に広がっていた当時、イギリスには「脅かす存在」から「脅かされる存在」になる不安が常につきまとっていたわけである。

1832 年にロンドンへと広がりを見せていた（Norton 2nd ed., 640）コレラは、仮想空間であるミドルマーチにも忍び寄っている。フランスで医学の修行を積んだ Lydgate は、感染症の拡大を防ごうと隔離病棟の計画を立てて銀行家の Nicholas Bulstrode に協力を仰ぐ。ロンドンにいた Bulstrode も Lydgate 同様にミドルマーチの外からやってきた人で、大柄なわりに体が弱い。彼の特徴を説明する場合には、“pale blonde skin”（Bk.2, Ch.13, 115）や“pale and self-restrained”（Bk.2, Ch.18, 173）と“pale”が多用される特徴がある。また彼はやたらとコレラを恐れて、“I presume that a constitution in the susceptible state in which mine at present is, would be especially liable to fall a victim to cholera, if it visited our district.”（Bk.7, Ch.67, 640）と発言する。ついにミドルマーチでもコレラが発生する（Bk.7, Ch.64, 618）が、興味深いことに、George Eliot はコレラの発生と John Raffles という正体がつかみにくい男の登場を意図的に結びつけている。それだけではなく、Raffles、Bulstrode、Lydgate の三人を絡ませて、それぞれを転落の人生に進ませていくのだ。

Raffles はミドルマーチで Bulstrode と 25 年ぶりの再会を果たすが、この再会は全く歓迎されない。彼は Bulstrode が過去にロンドンで盗品を扱う質屋をしていたことや Will の祖母と再婚して彼女の財産を横取りしたことでゆすりをかけ（Bk.6, Ch.61, 576）、両者の間に「脅かす存在」と「脅かされる存在」という関係性を生みだす。Raffles は自分の過去について“a little travelling in the tobacco line”（Bk.5, Ch.53, 495）と説明し、さらには、“Things went confoundedly with me in New York [. . . .] I married when I came back—a nice woman in the tobacco trade”（496）とも話す。そうかと思えば Will に対して、“I’ve seen the world [. . . .] It was at Boulogne I saw your father”（Bk.6, Ch.60, 573）とも言っており、ロンドン以外にもいくつかの場所を転々としたことがほのめかされている。

Mary Wilson Carpenter は“Eliot’s representation of cosmopolitanisms in the novel circulates through medical discourses”と述べ、*Middlemarch* が執筆

された当時、“cosmopolitan”には「世界中に分布する医者」と「人の移動で広がる病」という両極端の意味合いが含まれていたことや、コレラが次第に“cosmopolitan disease”と名を変えていく過程を論じている（Carpenter 512-13）。イギリスとアメリカを行き来していた John Raffles が“the new-made railways”（Bk.4, Ch.41, 390）に乗ってミドルマーチにやってきたことで、地元の有力な銀行家だった Bulstrode は次第に名士としての評価を下げ、またアルコール中毒に苦しんでいた Raffles が死んだことで、彼の治療に手を貸した Bulstrode と Lydgate に殺人容疑の目が向けられる。ついに二人は周囲の期待と信頼を失い、疑惑に満ちた男になってしまう。*Middlemarch* では“cosmopolitan disease”が Raffles の姿に身をやつしており、また住民の一人が発する“I was not fond of strangers coming into a town.”（Bk.3, Ch.31, 276）からも、「外」からの侵入には否定的なイメージがつきまとっている。

2.「外」から「内」への価値転換

「外」に対する否定的なイメージは、先に挙げた三人の男たちに限定されない。例えば、Sir James Chettam は、密かに想いを寄せる Dorothea Brooke が Will Ladislaw と恋仲になるのを危惧して、次のような非難の言葉を浴びせる―“Why didn’t [Casaubon] use his interest to get Ladislaw made an *attaché* or sent to India? That is how families get rid of troublesome sprigs.”（Bk.4, Ch.38, 357）。Chettam は自分が思い描く Dorothea との未来において、邪魔になる Will を植民地へ送り込もうと画策し、“let us give him a post; let us spend money on him. If he could go in the suite of some Colonial Governor!”（Bk.5, Ch.49, 456）と提案して、彼の心に潜む葛藤をこのような形で解決しようとする。同様に、John Raffles の死に疑惑を持った住民たちが Bulstrode に関して噂をする箇所では、“Bulstrode might have had to say his prayers at Botany Bay”（Bk.7, Ch.71, 673）と話し、流刑地（オーストラリア）行きをほのめかして罪の重さを測る。

植民地、あるいは「外」の世界を排除の目的地としてほのめかすのとは別に、人生に行き詰った人たちが自ら望んで「外」に向かおうとする場合もある。たとえば、Lydgate の学友は“talked of going to the Backwoods to found a sort of Pythagorean community”（Bk.2, Ch.17, 162）と、「外」に望みをかける。Will も

“his new interest in plans of colonization”（Bk.8, Ch.75, 710）と一時は「外」に目を向け、“Will had given a disinterested attention to an intended settlement on a new plan in the Far West”（Bk.8, Ch.82, 752）で、ある程度具体的な目的地まで言及している。ところが“Brother Jacob”や *Felix Holt, the Radical* に見られたように、主要人物が実際に植民地を往来する様子は本作品において描かれず、物語の空間が広がる気配はない。唯一、その可能性が提示されたのは、鉄道が大きく取り上げられる第 56 章である。

ミドルマーチの住民たちは鉄道敷設に反対の立場をとり、目的を遂げたい測量技師と乱闘騒ぎを起こす。事態の収束にあたった Fred Vincy はこの時、鞭を片手に地元住民を追いかけ、測量技師に対して“No knowing what might have happened if the cavalry had not come up in time”（Bk.6, Ch.56, 524）と冗談めかす。Nancy Henry は *George Eliot and the British Empire* の中でこのエピソードを帝国主義の観点から考察し、本作品で測量技師が“coated men”（523）と形容される一方、地元住民が“smock-frocks with hay-forks”として対比され、しかも方言だらけの言葉で“offensive”（523）に対峙する姿に、“colonial conflict”や“colonial battle”を読み取る（Henry 2002: 102）。この摩擦を Nancy Henry が言う通りに読めば、Fred と地元住民の関係には植民地で見られた支配者・被支配者の構造が浮かび上がり、Fred は鉄道敷設をすすめる権力者の側にいることになる。

Fred は常々、“what secular avocation on earth was there for a young man (whose friends could not get him an ‘appointment’) which was at once gentlemanly, lucrative, and to be followed without special knowledge?”（523）と話して、楽な儲け方を思案していた。その彼が測量技師と地元住民の対立をとりなし、自分が発する一言で人を操った快感を得た時、ほんの一瞬ながらも彼はわざわざ植民地に行かずとも生まれ育った小さな故郷で、植民地統治にも似た経験をしたことになる。またインドの鉄道株を保有しさらに買い足そうとしていた George Eliot は、鉄道敷設が儲ける事業だと知っていたはずだ。Fred が理想とする生き方は、この鉄道敷設にかかわることで実現するかと思えたが、結局、彼は伝統ある Stone Court を受け継いでその管理に人生を費やす。彼の行動範囲は鉄道網のように「外」への広がりを見せることがなく、彼は国内で安定した人生を送

る。

Fred が「外」とつながる道を選ばなかったように、*Middlemarch* では「外」に出ていく人が極端に少なく、それとは対照的に「外」から「内」に入る人が多い。プロット上、最初に入ってくるのは Dorothea と Celia の姉妹で、スイスで教育を受けた彼女たちは親の死をきっかけにしておじを頼ってミドルマーチへと入ってくる。姉 Dorothea とは違って無知で従順な Celia は Sir James Chettam と結婚して家庭に入るが、Dorothea の場合は衣食住が一緒になった農場施設（colony）の建設を目指して奔走する。貧しい農民たちの生活改善を目指した試みだったが、結局、この計画は実現せず、Dorothea も最後には家庭に入る。その後に続くのが Lydgate 医師や Will で、前者の場合はパリで医学の知識を磨き、ミドルマーチで感染症に対する隔離病棟の建設を目指す。一方、Will の方は大陸旅行から戻り、その後は Mr Brooke の新聞社を手伝う。Bulstrode は“not born in the town”（Bk.1, Ch.11, 89）とだけ紹介されるが、ロンドンの質屋で評判のよくない商売をしていたことははっきりしている。その Bulstrode をゆする John Raffles は、アメリカからミドルマーチにやってきてそこで死ぬ。もともとミドルマーチにいる Fred はその町から出ないという選択をするが、多くの重要な登場人物は外からミドルマーチに入ってきて、そこで各々に自分の居場所を獲得していく。この移動、あるいは侵入は帝国主義と同じように、金銭や搾取などといったネガティブな要素を含むのであろうか。

パリで医学を学んだ Lydgate はミドルマーチの医療改革を目指して、やってくる。語り手は彼がこの町を選んだ理由について、“not directly fitted to make his fortune or even secure him a good income”（Bk.1, Ch.11, 87）と言葉をはさみ、彼が金銭目的で入ってきたわけではないことに説明を加える。また Will がミドルマーチにやってきた理由については、“to try his fortune, as many other young men were obliged to do whose only capital was in their brains”（Bk.3, Ch.30, 273）とも説明されている。fortune という言葉は“Brother Jacob”でも *Felix Holt, the Radical* でも使われているが、George Eliot はここに明らかな差異を生み出している。例えば、“Brother Jacob”では主人公 David Faux は国内から国外に向かうのにお金がなく、母親が貯めていた fortune を盗んでジャマイカへと向かう（54）。David が目指す行為は、“to circumvent people of large fortune and

small faculty”(72)と表現され、明らかに「金銭的な成功」を収めることが目的とされている。*Felix Holt, the Radical* の場合、故郷に戻った青年に「金銭的な成功」を読み込む周囲の姿が顕著である。Harold Transome に関して、“this fellow coming back with a large fortune”(Vol 1, Ch.7, 80)と表現され、英国人は「外」で財をなすものだという暗黙の了解が描かれている。

一方、*Middlemarch* では外から来る Lydgate にも Will にも、fortune に金銭的な意味合いが含まれていない。さらに言えば、Dorothea は夫 Casaubon が遺した財産を捨ててでも Will と結ばれる道を選ぶ。ゆすりとたかりを常とした John Raffles は死に、他人の財産を横取りした Bulstrode は生涯苦しみ続ける。“Brother Jacob”、*Felix Holt, the Radical*、そして *Middlemarch*、この三作品を考察してみると、中心に置かれた人物と fortune の関わりに変化が出ており、少なくとも *Middlemarch* では Lydgate や Will の行動に不純な動機が含まれていない。*Middlemarch* では国外を「イギリスに成功を約束する場所」と見なしたり、あるいは「邪魔者を送り込む場所」として機能したりする設定は採用されておらず、支配と活動の範囲を国内に限定している点が本作品の大きな特徴として挙げられる。

3. 理想的なコスモポリタンの姿

Bulstrode と Lydgate は外からやってきた Raffles に負の影響を受けて、社会的な信頼を失いかける。また、Will Ladislaw は“Far West”(Bk.8, Ch.82, 752)に行く野望を語りながらも、結局は Dorothea との結婚に落ち着いて、国内にとどまる。これだけを見れば、*Middlemarch* では国内、あるいはミドルマーチの中に価値が置かれ、その「外」はネガティブに表象されているかのような印象を与えかねない。しかし、Bulstrode と Lydgate も外からやってきた人であるが、彼らは必ずしも他人に負の影響を与えることはない。そもそも Raffles にある否定的な要素は Bulstrode に対するゆすりとアルコール中毒であって、個人の堕落が問題とされている。つまり、George Eliot は「外」を否定し、「外」から入ってくるものをひとまとめにして批判しているわけではないことに注意しておかなければならない。

その証拠に、Mr Brooke は「外」とのつながりが多く、ウィーンで音楽を聴いた経験(Bk.1, Ch.7, 60)や、レヴァントやバルト海への訪問経験(Bk.5, Ch.51, 474)があり、Will も大陸旅行にでかけるなど移動範囲が広い。また Lydgate が計画し

ていた感染症予防の隔離病棟や Dorothea が計画していた農場施設（colony）など、一部の人だけを取り囲む構図は結局実現していない。*Middlemarch* で顕著なのは、「外」が国外、あるいは市外、町外を意味することはあっても、“Brother Jacob”や *Felix Holt, the Radical* の場合ように、植民地かそれに準じる土地を意味しなくなっている。では George Eliot は「外」をどのような場所として設定し、その理想像をどのように描き出したのであろうか。

Dorothea の夫 Casaubon は生前、『神話学全解』（*The Key to All Mythologies*）の完成を目指して奮闘するが、結局、完成することがない。Will は Casaubon の研究内容を聞くと、“He is not an Orientalist”（Bk.2, Ch.22, 207）と発言して、Dorothea の怒りを買う。1830 年代当時、ドイツの学問はヨーロッパの学問の頂点に立っていたのだが、ドイツ語の文献を読めない Casaubon の研究姿勢は当時の学問的流れに逆行している。この点について Edward Said は *Orientalism* の中で、“denunciation of insular British scholars by George Eliot”（Said 1978: 18）と言い表し、Casaubon の偏狭さに対する George Eliot の批判を読み取る。Said はこれ以外の登場人物に関して述べていないが、研究者という点でいえば Lydgate もその一人である。医学の研究をする Lydgate は研究の範囲が広い。Lydgate はエジンバラとパリで教育を受け（Bk.2, Ch.15, 136）、チフスをフランスの研究書から、またアルコール中毒をアメリカの研究書から学び、学問的広さを見せる。医学研究の頂点はパリにあるとされていた当時、この事情に疎いミドルマーチの識者たちは、新設病院の医者を任命する投票において Lydgate が英国で教育を受けた経験がないことを問題視する（Bk.2, Ch.18, 171）。Casaubon が持っていた島国根性は Lydgate を取り囲む人々にも共通しており、「外」との接点が希薄な人たちは考えの幅も狭い。

Dorothea と Celia もスイスで教育を受けた後にイギリスに入ってきており、Lydgate と同じく彼女たちも“cosmopolitan”の一員であると言ってもよさそうだ。最終的に Dorothea と結婚する Will も「外」との接点があるが、周囲の人間は Will の祖母がポーランド人亡命者と結婚していた（Bk.4, Ch.37, 343）ことから、彼を“dangerously mixed blood”（Bk.5, Ch.46, 434）と呼んで差別する。しかし Mr Brooke だけは当初から一貫して Will に一目置いており、“Will was not only at home in all those artistic and literary subjects [. . .] but that he was

strikingly ready at seizing the points of the political situation”（Bk.4, Ch.37, 337）とほめそやす。George Eliot は彼の利発さと芸術の素養を結びつけ、再び Mr Brooke に、“Fine art, poetry, that kind of thing, elevates a nation—*emollit mores*”（Bk.4, Ch.39, 366-67）と発言させ、Mr Brooke は Will の知識と経験を社会改革で最大限に活かそうとする。

以上のように、本作品において George Eliot は「外」を植民地やそれに準じる土地と結び付けず、イタリアやフランスなど英国にないものを補強してくれる地と結びつけた。本章の冒頭で引用した *OED* の定義に従えば、一つの世界にとどまらなかった Raffles や Bulstrode は“cosmopolitan”に分類されるはずだが、George Eliot は彼らにアルコール中毒や違法商売という退廃を組み込んで否定的に描いた。その一方で、Will、Mr Brooke、そして Lydgate を学問領域と視野が広い人物として描き、彼らを国内の改革に尽力する理想的な“cosmopolitan”として擁護したのである。

結論

本章では、設定時期では重なる“Brother Jacob”や *Felix Holt, the Radical* とは異なり、*Middlemarch* の「外」が植民地やそれに準じる土地を意味しなくなっている様子や、「外」よりも「内」の改革に価値転換が図られている様子を読み取ってきた。George Eliot の場合、「外」が植民地を意味する場合は金銭や搾取とかかわるような接点を持つことに懐疑的であったが、「外」がイタリアやフランスなどの場合は積極的な接点を求めた。この考え方は多少ヨーロッパ中心的（Eurocentric）な印象を与えうるが、ドイツ語の素養がない Casaubon や、パリで修行を積んだ Lydgate の学識を理解できない人々の姿を批判的に描いた点に、George Eliot の視野の広さをうかがい知ることができる。

Middlemarch における特徴の一つは「外」よりも「内」に価値転換がはかられたことが挙げられるが、これは第四章で述べた *Daniel Deronda* にも見られた構図である。それは Gwendolen の祖父が西インド諸島にプランテーションを所有していたが、その所有権が消滅しており、経済的な期待が国外（西インド諸島のプランテーション）から国内（Grandcourt が所有する荘園）へと価値転換している点において顕著である。もう一つの特徴は理想的な“cosmopolitan”の姿が描かれた点に

あり、*OED* の定義でいえば（二）国境を越えていくつかの国と接点を持った人たちを理想化したことである。この点については第六章で詳しく述べるが、*Daniel Deronda* と *The Spanish Gypsy* では、「個」の形成において複数の文化が影響を与える構図を理想化している。この萌芽は *Middlemarch* において既に提示されていたことになり、本作品は *Daniel Deronda* や *The Spanish Gypsy* とも関連がある作品だったことがわかる。

Middlemarch は政治に基づく社会的混乱期を描いたものであるため、George Eliot が本来描きたかったものと本稿の視点とは少しずれがあるだろう。しかしながら、物語の背後に隠れた“cosmopolitan”の意味を探り、“Brother Jacob”と *Felix Holt, the Radical* で使われた“fortune”との意味の違いに注目することで、George Eliot が単一文化で個や社会が形成されることを望んでいなかったこと、むしろ Homi K. Bhabha が *The Location of Culture* の中で述べる文化的混淆（cultural hybridity）を成し遂げた人を理想的な“cosmopolitan”として表現したことを明らかにした。これにより George Eliot 作品全体の流れにおいて、*Middlemarch* も帝国主義の観点からアプローチすることが可能になったのではないだろうか。

第六章
排他的な帝国主義から他民族共生へ
Daniel Deronda と *The Spanish Gipsy* における文化的混淆

序論

"My Gentile nature kicks most resolutely against any assumption of superiority in the Jews. . . . Everything *specifically* Jewish is of a low grade." (*Letters* I: 246-47)これは 1848 年 2 月 11 日、作家になる前の George Eliot が Coventry 時代の友人 John Sibree Jr.(1823-1909)に宛てた手紙の一部である。ユダヤ人に対するきわどい発言から、当時の彼女が反ユダヤ主義者だったという指摘は避けられそうにない。だが 1854 年、彼女は George Henry Lewes と初めてドイツのシナゴーグを訪問し、[1] その後、彼の知人にユダヤ人の歴史やヘブライ語の指導を頼んでいる。[2] 歴史書や小説のユダヤ人像に頼ってきた George Eliot はこれらの直接体験に影響を受け、ついに 1876 年にユダヤ人を主人公にした *Daniel Deronda* を書き上げたのである。彼女はこの作品の時代設定に、執筆時期とほぼ同時期の 1860 年代半ばを選び、その舞台をイギリスの国内外に拡大している。その中で異文化に属する人々、とりわけユダヤ人とイギリス人の関係を身近な問題として捉え、ユダヤ人に温かいまなざしを向けている。*The Merchant of Venice*(1600)の Shylock や *Oliver Twist*(1839)の Fagin など、ユダヤ人にネガティブなイメージがつきものだった背景を考えると、彼女の態度は異例なことだといえるだろう。本作品にいち早く反応した James Picciotto が、"To make a Jew the

---

[1] George Eliot は 1858 年にプラハで(*Journal* 324)、66 年にアムステルダムで(*Letters* IV: 298)、そして 73 年にフランクフルトで(*Letters* V: 424-25)シナゴーグを訪れている。特にアムステルダムから送った手紙に、"I fairly cried at witnessing this faint symbolism of a religion of sublime far-off memories."と記しており、彼女がここで過去と現在の連続性を認識する強烈な体験をしたことが推察できる。

[2] Haight 469-71. この知人はユダヤ人学者 Emanuel Deutsch(1829-73)で、ユダヤ思想を英語圏に広めた人物の一人である。1855 年に大英博物館で職を得てからイギリスの文学界とも交流を深めていき、Lewes 夫妻とは 66 年に旅行先のアムステルダムで偶然出会ってから親密になったようだ。彼は 69 年に初めてパレスチナを訪問し、72 年の再訪問でエルサレムを目前に死去。その出自や最期の様子から彼が Mordecai のモデルだと考えられている。

hero of a story, or even to endeavour to enlist the sympathies of the reader in his favour, was contrary to the canons of fiction."（Picciotto 407）と述べていることからも、当時の文壇で *Daniel Deronda* がいかに特異な作品だったかは容易に想像できる。

第四章において既に述べたが、本作品は Gwendolen Harleth と大富豪 Henreigh Malinger Grandcourt をめぐるイギリスのプロットと、Daniel、Mordecai、Mirah の三人を中心にしたユダヤ人のプロットから成る。二つのプロットは大きな接点を持たずに進行していくが、これらはイギリス人（Sir Hugo Mallinger）の養子として育った Daniel が、自分の生い立ちに興味を持ってから交錯していく。後に彼は自分がユダヤ人であることを知り、敬愛する Mordecai の遺志をついで、ユダヤ人国家の建国を夢見て東洋を目指す。この結末に George Eliot がユダヤ人独立を支持した態度を重ねるのが、一般的な反応だといえるだろう。ところが Edward Said がこの結末に難色を示して以来、[3] ユダヤ人がイギリスを去る構図に彼女のネガティブな態度を読み取る動きが出た。例えば Susan Meyer は *Imperialism at Home*（1996）で次のように主張する。

> [H]er last novel simply removes this racially alien figure of social discord from England. The proto-Zionist conclusion through which the novel effects this removal reveals some disturbing attitudes about Jews . . . as well as a disquieting continuity with imperialist ideology.（Meyer 160）

Meyer は本作品の結末を否定的に捉えており、ここに George Eliot の帝国主義的イデオロギーが絡んだユダヤ人排斥を読み込んでいる。だが *Daniel Deronda* 以外の作品や、当時 George Eliot がかかわっていた George Henry Lewes の著

---

[3] パレスチナ系米国人である Edward Said が *The Question of Palestine*（1980）の中で発言した内容を、ユダヤ民族統一を論じる際の指標にするには慎重さが必要であろう。ただしここで問題にしたいのは、彼が自著の中でシオニズムを扱った小説の代表格に *Daniel Deronda* を挙げながらも、主人公が東洋を目指す行為と大英帝国の国外進出を同一視して、"transforming the East into the West"（Said 1980: 65）と論じた点にある。この発言を機に批評家の間で結末の受け止め方に変化がでてきたことを考えると、彼の視点は本作品を論じるにあたって意義深いといえる。

作（*Problems of Life and Mind*）にも目を向けると、Daniel の旅立ちに George Eliot 独特の共生論（coexistence）が浮かびあがる。帝国主義に対してあまり寛容になれなかった George Eliot は、本作品で何を目指したのだろうか。本章では Daniel、Mordecai、Mirah らユダヤ人のプロットに注目して、ユダヤ人とイギリス人の関係、そして Mordecai と Daniel の民族結合への理想を読み取ることから始める。本作品の Mordecai は民族結合をユダヤ諸民族の統一と同義に捉える人物として描かれている。しかし George Eliot は民族結合を単一民族のものとして限定せず、むしろ他民族との関わり方にまで敷衍させて Daniel の思想に組み込んでいる。彼女が理想とした“fusion of races”[4] がどのようなものであったかを、*The Spanish Gypsy* と共に考察しながら、Daniel が東洋を目指す結末に George Eliot 流の共生論があることを論じていく。

1. ユダヤ人の位置づけ

Daniel Deronda は 1864 年 7 月から 1866 年 10 月の二年にわたる物語である。George Eliot はこの時期に起きた出来事を小説に散りばめ、虚構と現実の隙間を埋める工夫をしている。それは例えば、猛威を振るう牛疫（Bk.4, Ch.29, 279）のことから、イギリスの商業的関心地だったニジェール河領域やブラジル、南太平洋の政治談議（Bk.3, Ch.22, 205）、そして普墺戦争（Bk.1, Ch.5, 39）、アメリカ南北戦争（Bk.1, Ch.9, 75）、ジャマイカ反乱（Bk.4, Ch.29, 279）、イタリア統一運動（Bk.7, Ch.52, 549）など、話題はローカルなものから近隣諸国の情勢にまで及ぶ。特にジャマイカ事件への反応には、当時の雰囲気が露骨に描かれている。例えば Grandcourt は当時の話題だったこの事件に触れ、“the Jamaican negro was a beastly sort of baptist Caliban”（279）と発言する。居合わせた人はこの発言に同調し、その中の一人は“she should never sleep in her bed if she lived among blacks”（279）と言われても平然としている。また語り手は他人を抑圧して優越感に浸る Grandcourt をあまりよく思っていないようで、“If this white-handed man with the perpendicular profile had been sent to govern a difficult colony,

[4] *Daniel Deronda* 206.以下、本論文での引用は、Eliot, George. *Daniel Deronda*. New York: Oxford UP, 1998.によるものとし、引用の際には必要に応じて、本文中の括弧内に巻、章、頁数を記す。

he might have won reputation among his contemporaries."（Bk.6, Ch.48, 507）とコメントをさしはさんで、彼を皮肉る。[5] 批判の矛先は白人の優位性を信じて疑わない彼と、それを支持する取り巻きにも向けられており、異民族や異人種への露骨な差別的態度はジェントリー階級の偏見やおごりと結びつけられる。

このようなコミュニティでの Mirah や Daniel の母親を考察すると、西洋におけるユダヤ人の位置づけが明らかになる。Mirah は 6 歳の頃に、愛人を伴った父親によって国外へ連れ出されている。度重なる浪費で困窮すると、彼は娘を"musical box"（Bk.3, Ch.20, 181）に見立て、Mirah の歌で儲けようと画策する。娘が思春期に入ると、今度は"greatest price"（184）と呼んでロシア人伯爵の妻として売る計画を立てる。彼は西洋の価値観に合わせて娘を商品化し、彼女が嘲笑されることや性的恐怖に晒されることに抵抗がない。一方、Daniel の母 Leonora は自ら歌手への道を探ったのだが、"He [Leonora's father] hated that Jewish women should be thought of by the Christian world as a sort of ware to make public singers and actresses of."（Bk.7, Ch.51, 541）と嫌悪感を見せつけられる。彼女たちの人生は、父親が西洋やキリスト教社会をどう認識しているかで大きく左右されている。実際、Mirah は西洋への従属を積極的に受け入れる父に、一方、Daniel の母は西洋への従属に抵抗する父に翻弄されている。この中で彼女たちに共通するのは、父親の態度そのものよりもむしろユダヤの生まれを直接的な不幸の原因と考えている点にある。そのため Daniel の母は息子をイギリス人として育てるように知人だった Sir Hugo Mallinger に託し、自分はロシア人貴族と再婚して、その肩書きを隠れ蓑にしてユダヤの縛りから逃げる。Mirah もやはり、"the unhappiness in my life came from my being a Jewess"（Bk.3, Ch.20, 183）と嘆き、"the Wandering Jew"（Bk.3, Ch.22, 206）の運命をたどるかのように、各地を転々とした挙句にテムズ川で入水自殺を図るのである。

結局 Mirah は Daniel に助けられ、そこで身元を尋ねられる。すると彼女は、"I am English-born. But I am a Jewess."（Bk.2, Ch.17, 164）と告げてうつむき、

---

[5] 1865 年前後という時代設定やジャマイカに対する発言から、Grandcourt の描写に Edward John Eyre 総督が関係している可能性は高い。George Eliot は当時の大英帝国の活動に個人的な発言をすることはなかったが、登場人物の会話に個人的な批判を潜ませており、ジャマイカ反乱に対する彼女の否定的な態度はここから読み取ることができる。

“You might have thought I was wicked.”（Bk.2, Ch.18, 170）と加える。Mirah につきまとうユダヤ人であることへの後ろめたさや劣等感は、長年押しつけられてきた西洋的な価値観から生まれたものである。彼女は救いを求めて、生き別れた母と兄を探すべくイギリスのコミュニティに入り込むが、そこで偏見の目に晒される。一見すると快く Mirah に手を差し伸べているかに見える女性だが、語り手はその内面に入り込んで、彼女が“[W]ise people would tell me to be cautious.”（Bk.3, Ch.20, 178）と心の中に秘めていたその警戒ぶりを暴く。他にも彼女をキリスト教に改宗させようとする隣人（192）や、ユダヤ人は“mere bubble of the earth”（Bk.3, Ch.22, 210）だと躊躇なく発言する女性、またこの時点では自分も同じユダヤ人だと知らない Daniel がイギリス人としての立場から、ユダヤ人は“most repugnant”（176）だと位置づけていることもわかる。Mirah と交流を深めようとする傍らで、“I’m sorry she is a bigoted Jewess”（Bk.5, Ch.36, 375）と発言することを考えると、住民たちは彼女と一線を画していると感じざるをえない。

George Eliot は本作品が完成した頃、Harriet Beecher Stowe と手紙のやり取りをしている。George Eliot は Stowe 夫人から *Daniel Deronda* を絶賛されると、ユダヤ人に対するイギリス人の態度が悪いために、同情と理解をもって本作品の執筆にあたったことを打ち明けている。そのうえで、“Moreover, not only towards the Jews, but towards all oriental peoples with whom we English come in contact, a spirit of arrogance and contemptuous dictatorialness is observable which has become a national disgrace to us.”（*Letters* VI: 301-302、1876.10.29）と強い口調でイギリスの態度を批判している。George Eliot は同じ手紙の中で、“They hardly know that Christ was a Jew.”と述べて、他者を知ろうとしない態度を“intellectual narrowness”と呼んで、さらなる批判を重ねる。

Daniel Deronda では、当初、ユダヤ人に対して頑なな態度をとっていたイギリス人たちが、次第にその態度を軟化させていく点が特徴的である。物語の後半に行くにつれて、Mirah はわずかながらもイギリス人を中心としたコミュニティで受け入れられていく。特別なパーティにも招かれ、彼女は一人の人間として歌声を披露して歓迎される。この時ある女性が“[W]here is her Jewish impudence?”（Bk.6, Ch.45, 476-77）と発言した瞬間に、固定化されたユダヤ人表象から Mirah 個人に目が向くようになったことがほのめかされる。ユダヤ人に対する George Eliot の

寄り添い方は単にユダヤ人だけに焦点を当てるのではなく、異文化の中でユダヤ人がどう位置づけられ、その過程がいかに偏見や傲慢さに満ちているかを暴くことにあった。読者はMirahの周辺人物やその背後にある価値観に目を向けることで、イギリスを含む西洋の暗い部分とそこに潜むユダヤ人への偏見に気づき、自分の態度を見直す契機を得ることになる。

2. Mordecai と Daniel

物語の中盤で Mirah の実兄だとわかる Mordecai は、本作品に登場するユダヤ人の中でも特に民族結合への理想が高い。彼は国家建国のヒントを求めて東洋を目指すが、直後に父が妹を連れて失踪したという報せを受ける。帰国した彼を待っていたのは衰弱した母の死で、結局、彼は民族結合どころか一家離散という憂き目を見る。やがて彼自身も病気になり旅を再開させることが難しくなると、自分の代わりに民族結合を果たせる国家的リーダーを待ち望む。

> In the doctrine of the Cabbala, souls are born again and again in new bodies till they are perfected and purified, and a soul liberated from a worn-out body may join the fellow-soul that needs it, that they may be perfected together, and their earthly work accomplished. . . . When my long-wandering soul is liberated from this weary body, it will join yours, and its work will be perfected.（Bk.6, Ch.43, 461）

彼はユダヤ教の思想カバラにある、魂の転生を強く信じている。だが弱りきったその体で民族結合に向けた大きな役割を全うすることに不安を感じ、自分の魂が Daniel の中に組み込まれることを期待する。そこで Daniel を“the spiritual product of his own belief”（Bk.5, Ch.38, 404）として人間としての完成を目指すというわけである。一方の Daniel も、“It is you who have given shape to what, I believe, was an inherited yearning―the effect of brooding, passionate thoughts in many ancestors”（Bk.8, Ch.63, 642）と話して Mordecai を創造主に位置づけ、このあたりから二人の関係に神秘主義の思想とゴーレム（golem）のイメージが重なっていく。当時の Daniel は実の両親のことも、将来への展望もつか

めない時期にある。所在なくボートでテムズ川を漂流する彼の姿は、イギリス社会で安定を得られていない状況と重なる。この時期に二人が出会い、それによって“an abiding place”（Bk.5, Ch.38, 407）や“rooting-place”（Bk.5, Ch.40, 427）を得ることから、互いの存在は「個」として完成するためにも、精神的な定住地を得るためにも必要だったといえる。

ただし本作品の後半部で、Daniel が Mordecai の理想をそのまま踏襲し、それを自分の理想として成し遂げようとしていないことが明らかになる。例えば、彼は Mordecai の誘いでユダヤ人の勉強会に参加するが、この会の様子が Daniel の視点で描かれているため、読者は遠巻きに参加者の立場を見渡すことができる。ユダヤ民族に関する議論が交わされる中、出席者にはユダヤと他民族の融合を求める人もいれば、“the feeling of nationality is dying”（Bk.6, Ch.42, 448）と後ろ向きな発言をする人もいる。西洋人を中心にしたコミュニティに入り込むことで、ある種の恩恵を得ようと考えるユダヤ人もいるが、唯一 Mordecai はユダヤ民族だけの結合に固執して孤立する。彼は相容れない意見が出るたびに反論を繰り返すが、仲間からは冷やかな反応しか返ってこない。そこで Mordecai は理想的な結束の仕方を説くのだが、彼の主張は一箇所に集まるのではなく離散状態を利用しようとする点で特徴的である。ある時には、“Let the torch of visible community be lit!”（Bk.6, Ch.42, 457）や、“Our national life was a growing light. Let the central fire be kindled again, and the light will reach afar.”（458）のように、光が拡散していくイメージを取り入れる。またある時には、“Israel is the heart of mankind”やそれに続く“their religion and law and moral life mingled as a stream of blood in the heart and made one growth”（453）と心臓のイメージを取り入れながら、そこから血液が体中に行きわたる様子で具体化する。彼はユダヤの思想を世界の末端まで届かせるその出発点を“the organic centre”（454）と呼び、その中心地や拡散させる過程で他民族と交わることを許さない。そのために彼の主張は仲間から排他的だと軽んじられるのだ。

Mordecai はその後、妹 Mirah と再会して新しい生活を始める。しかし病気で弱り切った彼は外に出て働くことができず、社会との接点を持たない。彼は自分の主張を立証するかのように、本作品に登場するユダヤ人で唯一どの他民族の人たちとも交わらず、家に閉じこもったままとなる。ユダヤ人だけで結束を強め、思

想を広めるための中心地を必要とした Mordecai だったが、結局、彼の理想を共有するのは Daniel だけとなる。そして彼の家に足繁く通う Daniel にとって、この家はユダヤの血や歴史そして思想などが集まった Daniel の個人的な“central union”（Bk.7, Ch.50, 531）となり、その中で Mirah、Daniel、Mordecai の三人が魂の結婚（“the marriage of our souls”, Bk.8, Ch.63, 643）で小さく結束していくのである。当初、民族結合を目指した Mordecai のプロットは、最終的に Mirah と Daniel の結婚物語として収束し、それを見届けた Mordecai はこの新婚夫婦にはさまれて死ぬ。世の中の変化を“progress”や“development”と（Bk.6, Ch.42, 449）と同義に捉え、他者と溶け合うことこそが正しい生き方だと話したユダヤ人の仲間とは異なり、Mordecai は国家建国に対して他者とのかかわりを一切求めなかった。おそらく彼は別のコミュニティに入り込むことで、ユダヤ人としての存在を失う可能性を恐れたのだろうが、このあまりにも排他的な考えを打ち消すためにも、Mordecai の死は必然だったといえる。

このように、Mordecai は民族結合をユダヤ諸民族だけの結合にとどめ、それ以外の民族との接点を一切求めていない。彼の主張はともすれば、婚姻などの肉体的・物理的な結合を拒否しただけでなく、精神的なレベルでの結合も容認しなかったと思わせるほどに排他的である。そのために同じユダヤ人からも眉を顰められたわけだが、Daniel だけは Mordecai の主張を自分なりに咀嚼して、他者との理想的な関係性を見出したことが考えられる。その点を考えるにあたって、Daniel の複雑なアイデンティティの問題を *The Spanish Gypsy* と共に考察したい。

3. 複雑なアイデンティティ

小説は東洋への旅立ちを目前にして Mordecai が死に、Daniel と Mirah が東洋に向かったところで終わる。George Eliot はこの新婚夫婦がその後どのような活動を行ったのかについてはっきりと描いておらず、オープンエンディングにすることで結末の解釈を読者に委ねている。冒頭で引用した Susan Meyer はそれでもこの結末を“removal”と捉えて、George Eliot のネガティブな態度を読み込む。同様に、Marc E. Wohlfarth も、“Judaism . . . safeguards the purity of the English national tradition from the specter of racial hybridity.”（Wohlfarth, 190）と述べて、彼女の保守的な態度を指摘する。いずれの論点においても

George Eliot がイギリス側に取り込まれ、イギリス人以外と関係を深めることに消極的だったという点で共通している。ここで Wohlfarth が言う“racial hybridity”が異種族混淆（miscegenation）を意味するのであれば、確かに George Eliot はその関係を好まない。ただしこれは本作品に限ったことではなく、詩劇 *The Spanish Gypsy* においてすでに提示されている。

The Spanish Gypsy は、George Eliot が Titiano（1488?-1576）の「受胎告知」（Annunciation）から着想を得て生み出した劇詩である。祈祷書を手にした乙女を見た途端 George Eliot は、結婚を目前に控えた乙女が実はある民族の王女であることを告げられ、その結果、愛を捨てて民族解放に向かう話へと一変させている。これが女主人公 Fedalma の原形である。Fedalma はスペインの貴族である Silva との婚礼を前にして、突然現れたジプシー（Fedalma の父でジプシーの王 Zarca）から、自分が 15 年前にスペイン貴族に連れ去られたジプシーの王女であることを知らされる。出生の秘密を知った Fedalma は、宗教、民族、共同体を超えて Silva との繋がりを維持すべきか否かで揺れ動き、結局は彼と別々の道を歩むことに決める。この劇詩について Leslie Stephen は、時代や人物の設定にいくつか疑問を投げかけたが、[6] George Eliot は当初から、ナスル朝（1230-1492）を滅亡させた 15 世紀のレコンキスタと“opposition of race”を悲劇の根幹に据えていたようだ。[7]

ここで注目すべきは、単に Fedalma と Silva の民族的な属性が異なるという点ではない。Fedalma が複雑なアイデンティティを付与されている点こそが重要なのである。例えば彼女は、ジプシー王国の次期女王となるべき運命を背負わされているが、その理想像は“the angel of a homeless tribe”[8] として描写される。これは 19 世紀の女性の理想像であった「家庭の天使」（the angel in the house）と大差がない。また父を“imperial Father”（203）と呼ぶ点においても、父権制社会の権力にしばられている様子がうかがえる。ヴィクトリア朝の社会が求める女性像と

---

[6] Stephen 162. Stephen は、“Why did George Eliot suppose that the only fitting historical embodiment was at ‘a particular period of Spanish history’? [. . .] Why place the heroine among conditions so hard to imagine?”と疑問を呈している。

[7] Cross 8-10.

[8] *The Spanish Gypsy* 112.以下、本論文での引用は Eliot, George. *The Spanish Gypsy*. Scholarly Publishing Office: U of Michigan Library, 2006.によるものとし、引用の際には頁数のみ本文中の括弧内に記す。

合わないFedalmaは、エスニシティの観点から言ってもまた、複雑なアイデンティティを付与されているのだ。彼女はSilvaから“my dark queen Fedalma”(84)と呼ばれており、明らかに一般的なスペイン人と外見が異なっている。Fedalma の外見描写についてまわる“dark”は、FedalmaとSilvaの結婚を“union of light with darkness”(30)と噂する人々の話にも出てくる。この二項対立はスペインの市民がFedalma を揶揄する気持ちの表れであり、彼女がスペインのコミュニティで受け入れられていないことが想像できる。

Daniel Deronda の場合も、Danielはユダヤ人でありながらイギリス人紳士に育てられ、本人は自分の出自のことを全く知らないままで育っている。Fedalma が個の欲求と社会への義務の間で揺れ動き、結局はジプシー王国の建国を目指してスペインを去ったように、*Daniel Deronda* の場合もやはり、Danielはユダヤ民族の国家建国を目指してイギリスを去る。展開が期待されたDanielとGwendolenの仲は進展せず、結婚という名の安易な異種族混淆は起きない。というのもGeorge Eliotが価値を置く交わり方は文化的な混淆(cultural hybridity)であって、決して結婚に代表されるような異種族混淆ではないからだ。

再びFedalmaを例にとると、彼女は父であるジプシーの王にスペインを捨てる決断を迫られると、“The Spaniards fostered me.”(199)と答えて、生まれと育ちの背景が違いながらも両者に恩恵があることを述べる。Danielもイギリス人養父(Sir Hugo Mallinger)からさらなる紳士教育を薦められると、“I want to be an Englishman, but I want to understand other points of view. And I want to get rid of a merely English attitude in studies.”(Bk.2, Ch.16, 155)と答えて、自分が単一文化で創り上げられることを拒否する。そしてDanielは血を分けたユダヤ人との間に誓いを立てる時に、“The Christian sympathies in which my mind was reared can never die out of me”(Bk.7, Ch.54, 566)とユダヤ人の実母に話して、ユダヤとイギリスの二つの要素があることを強調する。ユダヤ人の勉強会で他者との関わりを求めた人たちがいたように、George Eliotもやはり「個」が形成される過程において他者との接点を重視し、その上で集団が作られていくことを理想とした可能性が極めて高い。だからこそ、FedalmaとDanielは二つアイデンティティで苦しみながらも、両コミュニティの行き来しながら比較的広い視野を獲得したのである。George Eliot の場合、二つのアイデンティティ、あるいは二つの要素

は結婚によってもたらされることがなく、また一方のコミュニティがもう一方のコミュニティに溶け込んでしまうこともない。“fusion of races”（Bk.3, Ch.22, 206）の原点として登場する音楽家の Klesmer だけは唯一、本作品の中で結婚による異種族混淆を遂げているが、万人に受け入れられようとちぐはぐな服装で登場し、無理をして自らをイギリス化（Anglicisation）しようと試みる場面を滑稽に描くあたりに、George Eliot の懐疑的な態度が読み取れる。

4. George Eliot 流の共生論

George Eliot はある程度の権力関係ができあがった場所に、複数の民族を同居させることがない。これこそが彼女の独特な考え方だといえるが、これには George Henry Lewes の著作に若干の影響をうけている。*Daniel Deronda* を執筆していた頃、George Eliot は当時彼が手がけていた著作 *Problems of Life and Mind*（1874-79）の執筆を手伝っていたのだが、その中に本論で取り上げた共生論と類似する記述がある。

> [W]e fall into the error of supposing that the Organism is a mere assemblage of organs. . . . In a machine the parts are all different, and have mechanical significance only in relation to the whole. In an Organism the parts are all identical in fundamental characters, and diverse only in their superadded differentiations: each has its independence, although all cooperate.（Lewes 1874: 105）

Lewes はここで機械を例にとり、機械の部品一つ一つがそれぞれの働きをすることで全体が一つのパーツとなって機能していくことを説く。George Eliot がこの考えに同調したのは明らかだが、この考えの萌芽は彼の本が出版される 10 年ほど前の *Felix Holt, the Radical* にも見出せる。主人公の Felix は、“society stands before us like that wonderful piece of life, the human body”（Penguin 版, 489）と体の器官を例にとり、それぞれが各階級に合う役目を果たすことで社会全体が機能していくことを力説する。*Daniel Deronda* の中ではこのパーツが階級から民族へと規模を広げ、個々が機能を果たすことで世界全体が有機的な共同体にな

るような理想を掲げている。“Each nation has its own work, and is a member of the world, enriched by the work of each.”（Bk.6, Ch.42, 452）という Mordecai の発言には、George Henry Lewes の比喩に基づいた考えが反映されており、また、“the effect of our separateness will not be completed and have its highest transformation unless our race takes on again the character of a nationality.”（456）からも、ユダヤ人がイギリスとわかれることで、ユダヤ人が一つの共同体として機能することを優先させたことがうかがえる。

本作品の後半部分において Daniel は自分の祖父が、“the balance of separateness and communication”（Bk.8, Ch.60, 619）の取り方を模索していたことを知るが、彼はそれを、“separateness with communication”（620）と言い換えて、自分なりの解釈を加える。Daniel は“separateness”と“communication”を二つのものとしてわけることなく、離れたままでつながっているという一見すると妙な状況を理想化していく。東洋への旅立ち間際に、Daniel は名残惜しそうな Gwendolen から再会の可能性を尋ねられるが、彼は明言を避けて“separateness with communication”の方法として手紙のやり取りを提案する。そして彼は、“I shall be more with you than I used to be. . . . If we had been much together before, we should have felt our differences more, and seemed to get farther apart. Now we can perhaps never see each other again. But our minds may get nearer.”（Bk.8, Ch.69, 691）とつけ加える。George Eliot が George Henry Lewes の発言に自分なりの解釈を加え、その理想を *Daniel Deronda* で結実させたように、Daniel も一見すると排他的で否定的な Mordecai の発言に自分なりの解釈を加え、それをもとに民族結合に向けた新しい理想を見出す。それは諸民族がそれぞれ別の場所で一つのパーツとして機能し、ユダヤ民族か否かにかかわらず互いに良い影響を与えあうことにある。Daniel はこれを“fusion of races”として提示し、人類全体が融合する方法を説いてみせたのである。Daniel は Mordecai の発言を排他的だと切り捨てることはなく、肯定的な意義を見出す感覚を持った青年であり、ここに George Eliot 独特の共生論を読み取ることができる。

結論

本論の冒頭で引用した手紙の前半部には、このような記述がある。

> Extermination up to a certain point seems to be the law for the inferior races — for the rest, fusion both for physical and moral ends. It appears to me that the law by which privileged classes degenerate from continual intermarriage must act on a larger scale in deteriorating whole races. The nations have been always kept apart until they have sufficiently developed their idiosyncrasies and then some great revolutionary force has been called into action by which genius of a particular nation becomes a portion of the common mind of humanity.（*Letters* I: 246）

既に述べたようにこの手紙には若干、反ユダヤ主義の雰囲気があるため、彼女がどこまで“the inferior races”に寄り添っているのかは探り難い。ただし確実にいえることは、George Eliot が異民族間の結婚を“fusion”と捉えていないこと、また立派な民族には融合が待っているものの、それ以外の民族には十分な発展が期待できないことを認識している点である。George Eliot は日常を切り取ったリアリズムの手法を主とする作家であったものの、国家建国を夢見る青年が東洋でその夢を果たしたかどうかを安易に描き出すことはしなかった。しかし同時に James Picciotto が *Daniel Deronda* を論じながら、“George Eliot has passed from the realism of *Middlemarch* to the idealism of her present work.”（Picciotto 415）と指摘する通り、彼女は単に当時の社会を描き出すだけに留まらず、その先を見据えた独自の共生論を提示している。たとえ小説という虚構のナラティヴの中でも、George Eliot は偏見に満ちていたイギリス国内でユダヤ人が仲良く同居するような安易な結末を選ぶことも、Mordecai のように排他的な思想を抱く人物の理想像に肩入れすることもなかった。また Mordecai が死亡しても民族結合の動きが止まることはなく、Daniel にその一部を担わせている。彼はユダヤ民族が一つの共同体として存続していくことを最優先にし、同時に他民族と良い影響関係を築くことも念頭に入れ、別のコミュニティで存続していくことに活路を見出す。George Eliot はユダヤ人への偏見が強かった時代にユダヤ人を主人公にした小説を生

み出し、当時の社会問題に真摯に取り組んだ。彼女がユダヤ人に寄り添った視点から多民族共生のあり方を模索していたことを考慮に入れると、George Eliot は Daniel が東洋を目指す結末に消極的な意味を持たせていないと結論づけられる。

終章

本論文では George Eliot が帝国主義に抵抗をしめしていた証や、植民地、あるいはそれに準じる土地といった「外」の概念の変遷について、従来よく取り上げられてきた *Daniel Deronda*（1876）以外の作品も使って論じた。半自伝的小説という評価で固定化された *The Mill on the Floss*（1860）では、子どもたちが読む本やその子どもたちに求められる「男らしさ」と「女らしさ」に帝国主義の言説を読み取った。子どもたちが手に取る書物には、西洋的な価値観に根差した大英帝国の栄華が描かれ、価値観や道徳観までもが帝国主義のイデオロギーに影響を受けている。家の近所という小さな範囲ではあったものの、Maggie が帝国意識を振りかざしてジプシー共有地へと向かったエピソードは、帝国主義の縮図に満ちたものであった。教養小説における「成長」を読み取るならば、本作品の Maggie は刷り込まれた帝国意識に抵抗し、西洋的価値観ばかりが正当化されることの理不尽さに気づいたところにあらわれている。成長の証の一つとして、George Eliot が帝国主義や帝国意識の問題を絡めた点は特異である。

「外」との関係や、「外から帰った人」へのまなざしは、これまでの George Eliot 研究ではあまり注目されてこなった“Brother Jacob”（1864）をもとにして読み取った。イギリス社会における植民地の位置づけや価値、植民地に対する安易な幻想、そして帰国者を反道徳的な人物として描く特徴は、選挙法改正の時期を舞台にした *Felix Holt, the Radical*（1866）にも共通していた。両作品では植民地、あるいはそれに準じる土地がイギリスにとっての「約束の地」となっており、このような土地との接点が社会的、経済的成功と直結するものとして信じられていた。ところが、この二つの作品とほぼ同時期を描いた *Middlemarch*（1871-72）では、植民地やそれに準じる土地の存在が薄れており、*Daniel Deronda* では大英帝国の植民地が経済的な恩恵をもたらす地として描かれなくなっていた。これに伴い、George Eliot の中で「外」の概念も次第に変化しており、「外」とのかかわりで絡む“fortune”にも、彼女が作品ごとに異なった意味づけをしていることもわかった。植民地表象や帝国意識の変遷は年を経るごとに変化している。これは George

Eliot の個人的な経験、つまり Thornton Lewes の死に呼応する部分も多少はあるが、“Brother Jacob”にしても *Felix Holt, the Radical* にしても執筆時期に Thornton の問題は絡んでいない。そのため、George Eliot が個人的な事情に左右される前に大英帝国の活動について、あるいは植民地活動に対してどのような態度を示したのかを探るのは、大きな試みであった。

Daniel Deronda とテーマの上で共通点が多い *The Spanish Gypsy*（1868）では、個と社会の形成において文化的混淆（cultural hybridity）が理想化されていたこと、その萌芽が *Middlemarch* の背後でほのめかされる“cosmopolitan”から見出せることを考察した。他者への共感や理解を呼びかけることが多かった彼女は、国内におけるジプシーやユダヤ人の問題に関心を持ち、彼らに寄り添うかたちで作品を生み出した。Bernard Semmel の表現を借りれば、George Eliot の「他者」は“the other”ではなく“another”として描かれており（Semmel 105）、George Eliot は彼らの存続の仕方や理想的な関係性を模索し続けた。すでに述べたとおり、彼らの居場所を英国外に定めた点は批評家によって解釈に大きな違いがあり、George Eliot が批判の対象となる場合もあった。しかし、*Daniel Deronda* の発表直後に James Picciotto が送った賛辞にあるように、大英帝国の存在感が大きかったヴィクトリア朝期において、「他者」を主人公に据えることは George Eliot にとって大きな挑戦であったはずだ。

本橋哲也は『ポストコロニアリズム』（2005）の「いくつもの 1492 年」と題した章で、歴史を多方面から見直すことの大切さを我々読者に呼びかけている。本橋が真っ先に挙げた 1492 年は「Columbus の新大陸発見」だが、これはコロニアルな視点だけが反映された 1492 年である。George Eliot も 1492 年を「Columbus の新大陸発見」の年として捉えて、*The Mill on the Floss* の Maggie と結び付けている。Maggie がジプシー共有地で Columbus の名前を出した目的は、彼らの知識を試すこと、そして西洋人としての権力を振りかざす小道具として用いたことが考えられる。結局は、ジプシーが Columbus のことを知らなかったため、共通の知識がない Maggie とジプシーの間でこの記号は威力を持たない。

1492 年をポストコロニアルの視点からみた場合、今度は虐げられた人たちの姿が浮かび上がってくる。ここで本橋が言及するのは、スペインのレコンキスタとユダヤ人追放令である。George Eliot の作品で考えてみると、前者は *The Spanish*

Gypsy で選ばれた設定であり、後者は *Daniel Deronda* とかかわりが深い。George Eliot はどちらの作品においても、一方のコミュニティがもう一方のコミュニティを飲み込み、吸収してしまうような構図を排除している。その代わりに彼女が用意したのは、一方がもう一方のコミュニティに入って立場の違いを経験するという設定である。例えば *The Spanish Gypsy* ではスペイン人貴族の Silva が Fedalma と結ばれるために、身分を捨ててジプシーに仲間入りしようとする。しかし彼は常々「他者」と見なしていたジプシーから、今度は自分が「他者」と見なされ排除される経験をする。同様に *Daniel Deronda* でも、ユダヤ人を“most repugnant”だと言い放った Daniel が、自分がユダヤ人であるとわかる展開も、立場を違えた瞬間として読むことができる。このような点に注目すれば、George Eliot はヴィクトリア朝期において、現代の我々が使う「ポストコロニアリズム」の視点をすでに持っていたことがうかがえ、多角的な視点を持った作家であったということができる。

Edward Said は *Culture and Imperialism* の序文で、人文学者に起こりがちな問題点についてこのように述べている。

> Now the trouble with this idea of culture is that it entails not only venerating one's own culture but also thinking of it as somehow divorced from, because transcending, the everyday world. Most professional humanists as a result are unable to make the connection between the prolonged and sordid cruelty of practices such as slavery, colonialist and racial oppression, and imperial subjection on the one hand, and the poetry, fiction, and philosophy of the society that engages in these practices on the other. One of the difficult truths I discovered in working on this book is how very few of the British or French artists whom I admire took issue with the notion of "subject" or "inferior" races . . . .（Said 1993: xiii-xiv）

Said は文学研究者が文学作品を社会的なコンテクストと照らし合わせること、また作家の中には社会に存在する権力関係、特に人種に関わる権力関係に目が向いていないことを嘆いている。George Eliot の場合、声高に帝国主義や帝国

意識を批判することはなかったものの、Said が言うように文学作品を社会的なコンテクストから読むことで、彼女がひそかに文学作品の中に帝国主義への批判を忍ばせていたことがわかる。George Eliot の大英帝国の表象には、自国民の優越感を揶揄した描写がいくつかあり、Said が嘆くような、社会の暗部に目が向かない作家ではなかった。むしろ彼女は従属民族や隷属民族という考え方に抵抗を示した、当時ではかなり特異な作家であったと言える。

また本論文では *The Spanish Gypsy* や *Daniel Deronda* の結末は、彼女が異民族を英国内にとどめることを拒否した、帝国主義者としての態度のあらわれではないと主張した。ジプシーやユダヤ人を主人公にして作品を執筆すること自体、当時の規範からするとかなり特異なことであっただろう。しかし George Eliot の場合、当時多くの人が共有していた典型的な表象を一部利用しながらそのイメージを訂正させることが目的であった。またたとえフィクションの世界であろうとも、結婚による安易な異種族混淆で物語を片づけるのではなく、異民族が互いに良い影響を与えながら存続し続ける理想を提示して見せた。小さな田舎町の日常生活を描くことから始めた彼女が、最終的に異国や異民族の問題にまで描く範囲を拡大させた点を帝国主義との関連から読み直すことで、George Eliot が理想とした社会と当時の帝国主義に対する懐疑的な態度を示せたと考える。

参考文献一覧

第一次文献

Eliot, George. *Adam Bede*. Ed. Valentine Cunningham. New York: Oxford UP, 1998.

- - -. “Brother Jacob.” *Cornhill Magazine* 10 (July 1864): 1-32.

- - -. *Daniel Deronda*. Ed. Graham Handley. New York: Oxford UP, 1998.

- - -. *Felix Holt, the Radical*. Ed. Fred C. Thompson. New York: Oxford UP, 1998.

- - -. *Felix Holt, the Radical*. Ed. Lynda Mugglestone. London: Penguin, 2006.

- - -. *The George Eliot Letters*. Ed. Gordon S. Haight. 9 vols. New Haven: Yale UP, 1954.

- - -. *The Journals of George Eliot*. Ed. Margaret Harris and Judith Johnston. Cambridge: Cambridge UP, 1998.

- - -. *The Lifted Veil and Brother Jacob*. Ed. Sally Shuttleworth. London: Penguin, 2001.

- - -. *The Lifted Veil and Brother Jacob*. Ed. Hellen Small. New York: Oxford UP, 1998.

- - -. *Middlemarch*. Ed. David Carroll. New York: Oxford UP, 1998.

- - -. *The Mill on the Floss*. Ed. Dinah Birch. New York: Oxford UP, 1998.

- - -. *Selected Critical Writings*. Ed. Rosemary Ashton. New York: Oxford UP, 1992.

- - -. *The Spanish Gypsy*. Michigan: Scholarly Publishing Office, 2006.

第二次文献

Adams, Kathleen. *Those of Us Who Loved Her: The Men in George Eliot’s Life*. Warwick: The George Eliot Fellowship, 1980.

Agathocleous, Tanya and Jason R. Ruby. “Victorian Cosmopolitanism:

Introduction." *Victorian Literature and Culture* 38 (2010): 389-97.

Anderson, Benedict. *The Spectre of Comparisons: Nationalism, Southeast Asia, and the World*. London: Verso, 1998.

Ashton, Rosemanry. *The Spectre of Comparisons: Nationalism, Sotheast Asia, and the World*. London: Verso, 1998.

Beaseley, Edward. *Mid-Victorian Imperialists: British Gentleman and the Empire of Mind*. London: Routledge, 2005.

Beaty, Jerome. *Middlemarch from Notebook to Novel: A Study of George Eliot's Creative Method*. Urbana: U of Illinois P, 1960.

Beeton, Isabella Mary. *The Book of Household Management*. 1861. Hertfordshire: Wordsworth, 2006.

Behlmer, George K. "The Gypsy Problem in Victorian England." *Victorian Studies* 28 (1985):231-53.

Bennet, Joan. *George Eliot: Her Mind and Her Art*. Cambridge: Cambridge UP, 1945.

Bhabha, Homi K. *The Location of Culture*. London: Routledge, 2004.

Bodenheimer, Rosemarie. *The Real Life of Mary Ann Evans: George Eliot, Her Letters and Fiction*. New York: Cornell UP, 1996.

Brantlinger, Patrick. *Crusoe's Footprints: Cultural Dtudies in Britain and America*. New York: Routledge, 1990.

- - -. *Victorian Literature and Postcolonial Studies*. Edinburgh: Edinburgh UP, 2009.

- - -. *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830-1914*. Ithaca: Cornel UP, 1998.

Carpenter, Mary Wilson. "Medical Cosmopolitanism: *Middlemarch*, Cholera, and the Pathologies of English Masculinity." *Victorian Literature and Culture* 38 (2010): 511-28.

Carroll, Alicia. *Dark Smiles: Race and Desire in George Eliot*. Athens: Ohio UP, 2003.

Carroll, David, ed. *George Eliot: the Critical Heritage*. London: Routledge,

1995.

Cross, John W. *George Eliot's Life as Related in Her Letters and Journals*. 3 vols. Boston: Houghton Mifflin Company, 1908.

Dabydeen, David, John Gilmore, and Cecily Jones. *Oxford Companion to Black British History*. Oxford: Oxford UP, 2007.

Darwin, John. *The Empire Project: The Rise and Fall of the British World-System, 1830-1970*. Cambridge: Cambridge UP, 2008.

Davis, Philip. *The Victorians, 1830-1880*. New York: Oxford UP, 2002. Vol. 8 of *The Oxford English Literary History*. 13 vols.

Dentith, Simon. *Epic and Empire in Nineteenth-Centruy Britain*. Cambridge: Cambridge UP, 2006.

- - -. *George Eliot*. Brighton:Harvester Press, 1986.

Diedrick, James. "George Eliot's Experiments in Fiction: 'Brother Jacob' and the German Novella." *Studies in Short Fiction* 22.4 (1985): 461-68.

Dumett, Raymond E., ed. *Gentlemanly Capitalism and British Imperialism: The New Debate on Empire*. New York: Longman, 1999.

Eldridge, C. C. *Victorian Imperialism*. London: Hoddernand Stoughton, 1978.

Gallagher, Catherine. "George Eliot and *Daniel Deronda*: the Prostitute and the Jewish Question." *Sex, Politics, and Science in Nineteenth-Century Novel*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1986.

Gaskell, Elizabeth. *Cranford*. Ed. Elizabeth Porges Watson. New York: Oxford UP, 1998.

Graver, Susan. *George Eliot and Community: A Study in Social Theory and Fictional Forum*. Berkley: California UP, 1984.

Gregory, Melissa Valiska. "The Unexpected Forms of Nemesis: George Eliot's 'Brother Jacob': Victorian Narrative, and the Morality of Imperialism." *Dickens Studies* 31 (2002): 281-303.

Haight, Gordon S. ed. *A Century of George Eliot Criticism*. Boston: Houghton Mifflin Company: 1965.

- - -. *George Eliot: A Biography*. New York: Oxford UP, 1968.

Harris, John. *The Pug's Tour through Europe: or The Travelled Monkey*. London: John Harris, 1824. *Open Library*. Web. 18. July 2015.

Harris, Margaret. *George Eliot in Context*. Cambridge: Cambridge UP, 2015.

- - -. "What Eliot Saw in the Europe: The Evidence of her Journals", *George Eliot and Europe*. Ed. John Rignall (Aldershot: Scholar Press, 1997), 1-16.

Harvey, W. J. *The Art of George Eliot*. London: Chatto and Windus, 1961.

Hyam, Ronald, and D. A. Low. *Britain's Imperial Century, 1815-1914: A Study of Empire and Expansion*. Brasingstok: Macmillan Press, 1993.

Henry, Nancy. *The Cambridge Introduction to George Eliot*. Cambridge: Cambridge UP, 2008.

- - -. *George Eliot and the British Empire*. Cambridge: Cambridge UP, 2002.

- - -. "George Eliot and the Colonies." *Victorian Literature and Culture* 29.2 (2001): 413-33.

"History of the Rise, Progress, Ravages, etc. of the Blue Cholera of India." *Lancet* (19 Nov. 1831): 241-84.

Holmstrom, John, and Laurence Lerner, eds. *George Eliot and Her Readers: A Selection of Contemporary Reviews*. London: Bodley Head, 1996.

Hoppen, K. Theodore. *Mid-Victorian Generation*. New York: Oxford UP, 1998.

Horowitz, Lenore Wisney. "George Eliot's Vision of Society in *Felix Holt, the Radical*." *Texas Studies in Literature and Language* 17 (1975): 175-91.

Irwin, Jane. ed. *George Eliot's Daniel Deronda Notebooks*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.

James, Henry. "'The Lifted Veil' and 'Brother Jacob'." *Nation* 25 Apr. 1878: 277. Rpt. in *A Century of George Eliot Criticism*. Ed. Gordon S. Haight. Boston: Houghton Mifflin Company, 1965. 130-31.

- - -. "The Spanish Gypsy." *The North American Review* 107 (1868): 620-35.

Rpt. in *A Century of George Eliot Criticism*. Ed. Gordon S. Haight. Boston: Houghton Mifflin Company, 1965. 55-64.

James, Lowrence. *The Rise and Fall of the British Empire*. London: Little. 1994.

Karl, Frederick R. *George Eliot: Voice of a Century: A Bioraphy*. New York: W. W. Norton, 1996.

Kaye, John William. "The Indian Civil Service: Its Rise and Fall." *Blackwood's Edinburgh Magazine* 89 (Jan. 1861): 115-30; (Mar. 1861): 261-76.

Knoepflmacher, U. C. *George Eliot's Early Novels: the Limits of Realism*. Berkley: U of California P, 1968.

Leavis, F. R. *The Great Tradition: George Eliot, Henry James, Joseph Conrad*. London: Chatto & Windus, 1960.

Levin, George. Ed. *Cambridge Companion to George Eliot*. Cambridge: Cambridge UP, 2001.

Lesjak, Carolyn. "Labours and a Modern Storyteller: George Eliot and the Cultural Project of 'Nationhood' in *Daniel Deronda*." *Vitorian Identities: Social and Cultural Formations in Nineteenth-Cetury Literature*. Eds. Ruth Robbins nad Julian Walfrey. Houdmill: Macmillan, 1996.

Levin, George. Ed. *Cambridge Companion to George Eliot*. Cambridge: Cambridge UP, 2001.

Levine, Philippa. *The British Empire: Sunrise to Sunset*. Harlow: Pearson, 2013.

Levitt, Ruth. *George Eliot: The Jewish Connection*. Jerusalem: Massada, 1975.

Lewes, George Henry. *The Letters of George Henry Lewes*. Ed. William Baker. 3 Vols. Victoria: Victoria UP, 1995.

- - -. *Problems of Life and Mind*. Boston: James R. Osgood and Company, 1874.

Ligon, Richard. *A True and Exact History of the Island of Barbados*. 1657. Ed. Karen Ordahl Kupperman. Indiana: Hackett, 2011.

Linehan, Katherine Bailey. "Mixed Politics: The Critique of Imperialism in *Daniel Deronda*." *Texas Studies in Literature and Language* 34:3 (1992 Fall): 323-46.

"London: Saturday, November 19, 1831." *Lancet* (19 Nov. 1831): 241-284.

MacKenzie, John M. *Orientalism: History, Theory and the Arts*. Manchester: Manchester UP, 1995.

Mallen, Richard D. "George Eliot and the Precious Mettle of Trust." *Victorian Studies* 44.1 (2001): 41-75.

Meyer, Susan. *Imperialism at Home: Race and Victorian Women's Fiction*. NY: Cornell UP, 1996.

Mill, J. S. *Principles of Political Economy*. 1848. Ed. William James Ashley. London: Longman, 1926.

Miller, Derek. "*Daniel Deronda* and Allegories of Empire." *George Eliot and Europe*. Ed. John Rignall. Aldershot: Scholar Press, 1997. 113-22.

Mudge, Isadore G. and M. E. Sears. *A George Eliot Dictionary: The Characters and Scenes of the Novels, Stories, and Poems Alphabetically Arranged*. London: George Routledge and Sons, 1924.

Nestor, Pauline. *George Eliot*. Basingstokr: Palgrave, 2002.

Nord, Deborah E. "'Marks of Race': Gypsy Figures and Eccentric Femininity in Nineteenth-Century Women's Writin." *Victorian Studies* 41 (1998): 198-210.

Nurbhai, Saleel, and K. M. Newton. *George Eliot, Judaism and the Novels: Jewish Myth and Mysticism*. Houndsmill: Palgrave, 2002.

Parson, Timothy. *The British Imperial Century, 1815-1941: A World History Perspective*. Maryland: Rowman and Littlefield, 1999.

Pearce, T. S. *George Eliot*. London: Evans Bros, 1973.

Picciotto, James. "Review." *Gentleman's Magazine*. Nov. 1876: 593-603. *George Eliot: The Critical Heritage*. Ed. David Carroll. London:

Routledge, 1971. 406-17.

Pinney, Thomas ed. *Essays of George Eliot*. New York: Columbia UP, 1963.

Plasa, Carl. "George Eliot's 'Confectionery Business': Sugar and Slavery in 'Brother Jacob.'" *Literature Interpretation Theory* 16.3 (2005): 285-309.

Purkis, John. *A Preface to George Eliot*. London: Longman, 1985.

Ragussis, Michael. "The Birth of Nation in Victorian Culture: The Spanish Inquisition, the Converted Daughter, and the 'Secret Race'". *Critical Inquiry* 20 (1994): 477-508.

Ryan, James R. *Picturing Empire: photography and the visualization of the British Empire*. London: Reaktion Book, 1997.

Rignall, John ed. *George Eliot and Europe*. Aldershot: Scolar Press, 1997.

- - -. *Oxford Reader's Companion to George Eliot*. New York: Oxford UP, 2000.

Rodstein, Susan de Sola. "Sweetness and Dark: George Eliot's 'Brother Jacob.'" *Modern Language Quarterly* 52.3 (1991): 295-317.

Roger, Philip. "Lessons for Fine Ladies: Tolstoj and George Eliot's *Felix Hotl, the Radical*." *Salvic and East European Journal* 29 (1985): 379-92.

Said, Edward. *Culture and Imperialism*. New York: Vintage, 1993.

- - -. *Orientalism*. London: Penguin, 1978.

- - -. *The Question of Palestine*. London: Routledge, 1980.

Scholem, Gershom. *On the Kabbalah and its Symbolism*. Trans. Ralph Manheim. New York: 1969.

Semmel, Bernard. *George Eliot and the Politics of National Inheritance*. New York: Oxford UP, 1994.

Sprague, Rosemary. *George Eliot: A Biography*. Philadelphia: Chilton Book, 1968.

Steel, Richard. "Inkle and Yarico." *The Spectator* 13 Mar. 1711. Rpt. in *The Spectator*. Ed. Henry Morley. London: George Routledge and Sons, 1891. *Project Gutenberg*. Web. 25 Aug. 2012.

Stephen, Leslie. *George Eliot*. London: Macmillan, 1902.

Sussman, Herbert. *Victorian Masculinities: Manhood and Masculine Poetics in Early Victorian Literature and Art*. Cambridge: Cambridge UP, 2008.

Szirotny, J. S. "Two Confectioners the Reverse of Sweet: The Role of Metaphor in Determining George Eliot's Use of Experience." *Studies in Short Fiction* 21.2 (1984): 127-44.

Trumpener, Katie. "The Time of the Gypsies: 'A People without History' in the Narratives of the West." *Critial Inquiry* 18 (1992): 843-83.

Uglow, Jennifer. *George Eliot*. London: Virago, 1978.

Vance, Norman. *The Sinews of the Spirit: The Ideal of Christian Manliness in Victorian Literature and Religious Thought*. Cambridge: Cambridge UP, 1985.

Wagner, Jodi. "Gambling as Simulation in *Daniel Deronda*." *George Eliot-George Henry Lewes Studies* 58-59 (2010 Sept): 95-110.

Watson, Tim. "Jamaica, Genealogy, George Eliot: Inheriting the Empire After Morant Bay." *Caribbean Culture and British Fiction in the Atlantic World*, 1780-1870. Cambridge: Cambridge UP, 2008: 154-86.

Walvin, James, and J. A. Mangan. *Manliness and Morality: Middle-class Masculinity in Britain and America, 1800-1940*. Manchester: Manchester UP, 1987.

Williams, Eric. *From Columbus to Castro: The History of the Caribbean 1492-1969*. New York: Vintage, 1970.

Wohlfarth, Marc E. "*Daniel Deronda* and the Politics of Nationalism." *Nineteenth-Century Literature* 53.2 (1998): 188-220.

Woolf, Virginia. *Collected Essays*. Vol. 1. London: Hogarth Press, 1996.

Yeazell, Ruth Bernard. "Why Political Novels Have Heroines: *Sybil*, *Mary Barton*, and *Felix Holt*." *Novel* 18:2 (1985, Winter): 126-44.

Young, Robert J.C. *Postcolonialism: A Very Short Introduction*. New York: Oxford UP, 2003.

Zimmerman, Bonnie. "Felix Holt and the True Power of Womanhood." *ELH*

46:3 (1979, Fall): 432-51.

天野みゆき 「ジョージ・エリオットと帝国意識—『ダニエル・デロンダ』と『テオフラストス・サッチの印象』の文化的意義」『ジョージ・エリオット研究』 8（2006）: 1-13.

アンダーソン、ベネディクト 『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』 白石さや・白石隆訳（NTT 出版、1997）.

木畑洋一 編著 『大英帝国と帝国意識—支配の深層を探る』（ミネルヴァ書房、1998）.

サイード、エドワード・W 『文化と帝国主義』（上）（下）、大橋洋一訳（みすず書房、1998）.

バーバ、ホミ・K 『文化の場所:ポストコロニアリズムの位相』本橋哲也（他）訳（法政大学出版局、2005）.

本田毅彦 『インド植民地官僚—大英帝国の超エリートたち』（講談社、2001）.

本橋哲也 『ポストコロニアリズム』（岩波書店、2005）.

谷田恵司 「金貨と砂糖—ジョージ・エリオットの『兄ジェイコブ』」『東京家政大学研究紀要』44.1 (2004) :45-50.

和知誠之助 『ジョージ・エリオットの小説』（南雲堂、1967）.